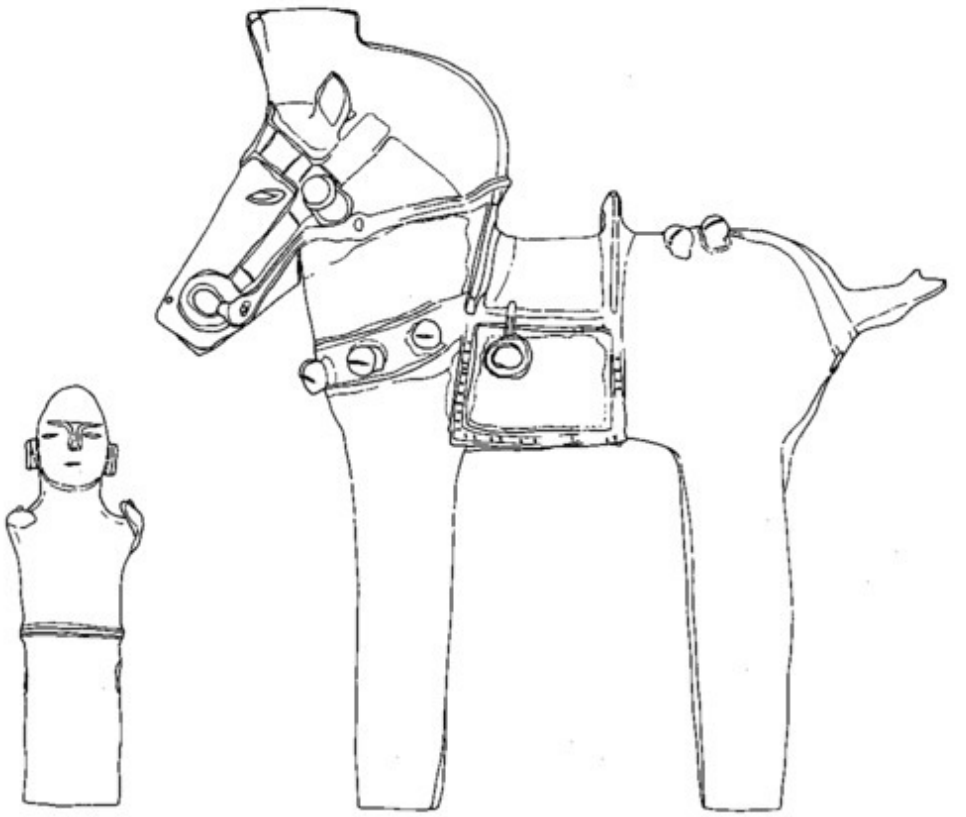
内堀遺跡群X

—大室公園整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報—

1998

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

内堀遺跡群 X



内堀4号墳出土の人物・馬形埴輪

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

内堀4号墳全景

内堀4号墳出土の馬形埴輪

D区さくら草の湿原全景

序

昔より大室地域の人々からなれ親しまれ、守り継がれてきた大室4古墳。古墳の周辺には松や杉、コナラ、エゴ等の樹木が生い茂り、子供たちが鳥の巣をかけ、鳥の住む環境を大事に守り継いでいます。

樹木とともに、古代の上毛野の国を彷彿とさせる前方後円墳群の姿は地域の誇りとなっています。

そんな人々の思い入れのある大室の地に、古墳群を中心に大室公園の建設が次第に具体的な姿となって、市民の前に姿を表してきています。

内堀遺跡群は、そんな大室公園の中に位置しており、昭和62年度より本年度で12年目の継続調査です。旧石器、縄文、古墳、平安、室町時代等の遺物や遺跡の発見がなされました。

今回の調査でも旧石器、縄文、古墳の三時代の遺物、遺跡の発見が見られましたが、中心は、円墳と住居跡群の遺跡です。

中でも6世紀後半の古墳の馬飼人と馬の埴輪のセットの発見、6世紀前半に位置づけられる多数の住居跡群の発見が上げられます。この住居跡群は前二子古墳と同時期にあたり、古墳の構築を行った支配者階級と実際に古墳造りに働いた被支配者階級の関係を考える上での良い資料に成り得るものと考えています。

また、住居跡群の各住居跡を見てみますと、6世紀後半の住居自体も構築時期に多少変化が見られ、竈の構築の変遷等にも新たな資料を得られたと考えています。

更に4世紀と比定される住居跡も発見されており、4世紀の住居の範囲の拡大がみられました。住居跡の中から十王台式に比定される土器も発見されており、茨城方面との交流が4古墳の構築前にあり、この地の繁栄の基礎となったことのわかる資料も得られました。

各々の遺跡の内容は本文を一読していただき、史跡整備へのご指導、ご鞭撻をいただければと願っております。

平成10年3月25日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　中西誠一

例　　言

1　本報告書は、前橋市が整備する大室公園に係る内堀遺跡群内堀遺跡、下縄引Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。

内堀遺跡……A区（管理用道路）、B区（内堀4号墳）、C区（排水管付設）

下縄引Ⅱ遺跡…D区（さくら草の湿原）、E区（さくら草の湿原北側フェンス）

2　遺跡は群馬県前橋市西大室町2510番地ほかに所在する。

3　調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　中西誠一が前橋市長　萩原弥惣治と委託契約を締結して実施した。調査担当および調査期間は以下のとおりである。

調査担当者　戸所慎策・安立聡（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）

発掘調査期間　平成9年5月21日～平成9年12月15日

報告書作成期間　平成9年12日16日～平成10年3月25日

4　内堀4号墳は、昭和62年度に前橋市埋蔵文化財発掘調査団が、平成8年度に前橋市教育委員会がトレンチ調査を実施している。出土遺物は本報告書で合わせて掲載した。

5　本書の原稿執筆・編集は戸所・安立が行った。整理作業をはじめ報告書の作成には、伊藤孝子・下境真由美・下境弥・高畑八栄子・角田正次郎・内藤貴美子・永井智教・蜂岸あや子・吉田真理子の協力があった。

6　発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1　挿図中に使用した北は座標北である。

2　挿図に、建設省国土地理院発行の1／20万地形図（長野・宇都宮）と1／5万地形図（前橋）を使用した。

3　本遺跡の略称は9E11である。

4　各遺構・住居址の施設名の略称は次のとおりである。

M…古墳、H…古墳時代の住居址、D…土坑、W…溝状遺構、F…炉址、P…柱穴・貯蔵穴

5　遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。

遺構　　住居址・土坑・溝…1/60、全体図1/200、1/400、1/500、1/5000

遺物　　土器・石器…1/3、一部の土器・石器…2/3、1/2、埴輪…1/5

6　スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構平面図　　焼土…淡点、炭化物…粗い斑、粘土…細かい斑

遺構断面図　　火山降下物…濃点、焼土…淡点、粘土…細かい斑、構築面…斜線

遺物実測図　　須恵器断面…黒塗、石器使用痕…網

7　遺物分布図のシンボルの使用は次のとおりである。

●…土器、○…土製品、▲…鉄器、■…石器・石製品

なお接合状態は実線で結んだが、個体別資料数の多いものは結んでいない。

8　本文中の数値の（　）は現存値を示し、［　］は復原値を表す。

9　火山降下物の略称と年代は次のとおりである。

As－B（Bテフラ：供給火山・浅間山、1108年）

Hr－FA（FAテフラ：供給火山・榛名山、6世紀初頭）

As－C（C軽石：供給火山・浅間山、4世紀中葉）

目　　次

序

I　調査に至る経緯 …… 1

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地 …… 2

2　歴史的環境 …… 5

III　調 査 の 経 過

1　調査方針 …… 7

2　調査経過 …… 8

IV　層　　序 …… 9

V　遺 構 と 遺 物

1　A区管理用道路 …… 10

2　B区内堀4号墳 …… 10

3　C区排水管付設 …… 40

4　D区さくら草の湿原 …… 40

5　E区さくら草の湿原北側フェンス …… 47

VI　成果と問題点

1　旧石器時代 …… 48

2　縄文時代 …… 48

3　古墳時代 …… 49

図　版

口絵　1　内堀4号墳全景

　　2　内堀4号墳出土の馬形埴輪

PL.　1　A区・B区・C区全景

　　2　B区内堀4号墳

　　3　B区内堀4号墳

　　4　B区内堀4号墳

　　5　B区内堀4号墳、記念撮影

　　6　D区全景

　　7　D区H－1～5・24号住居址

　　8　D区H－6～10号住居址

　　9　D区H－10～12、15・16号住居址

　　10　D区H－16～19号住居址

　　11　D区H－20～23号住居址、E区・H－1号住居址

　　12　B区内堀4号墳出土の形象埴輪

口絵　3　D区さくら草の湿原全景

PL.　13　B区内堀4号墳出土の円筒埴輪、形象埴輪

　　14　B区内堀4号墳出土の形象埴輪

　　15　B区内堀4号墳出土の形象埴輪

　　16　B区内堀4号墳出土の形象埴輪

　　17　B区内堀4号墳出土の土器・鉄器、縄文土器

　　18　D区H－1～3・5～7号住居址出土の土器

　　19　D区H－7～10号住居址出土の土器

　　20　D区H－11・15号住居址出土の土器

　　21　D区H－15～18号住居址出土の土器

　　22　D区H－18～21号住居址出土の土器

　　23　D区H－21～24号住居址出土の土器

　　24　D区H－24号住居址出土の土器、
　　D区出土の土製品、石器、石製品

挿　図

頁

Fig.　1　内堀遺跡群の位置……1

　　2　内堀遺跡群調査全体図……3・4

　　3　内堀遺跡群と周辺遺跡……6

　　4　平成9年度調査経過図……8

　　5　内堀遺跡群標準土層図……9

　　6　A区全体図……11

　　7　B区全体図……12

　　8　内堀4号墳断面模式図……13

　　9　B区埴輪列実測図……14

　　10　B区馬形埴輪掘り方……15

　　11　B区石室グリッド設定図……16

　　12　B区石室実測図……17

　　13　B区遺物分布図（1）……18

　　14　B区遺物分布図（2）……18

　　15　B区遺物分布図（3）……19

　　16　B区遺物分布図（4）……19

　　17　B区円筒・形象埴輪実測図（1）……20

　　18　B区形象埴輪実測図（2）……21

　　19　B区形象埴輪実測図（3）……22

頁

Fig.　20　B区形象埴輪実測図（4）……23

　　21　B区形象埴輪実測図（5）……24

　　22　B区形象埴輪実測図（6）……25

　　23　B区形象埴輪実測図（7）……26

　　24　B区形象埴輪実測図（8）……27

　　25　B区形象埴輪実測図（9）……28～30

　　26　B区形象埴輪実測図（10）……31・32

　　27　B区形象埴輪実測図（11）……33・34

　　28　B区形象埴輪実測図（12）……35・36

　　29　B区土器実測図……37

　　30　B区鉄器実測図……38

　　31　B区土坑……39

　　32　D区全体図……41

　　33　E区全体図……47

　　34　D区H－1・2・10号住居址……63

　　35　D区H－3号住居址……64

　　36　D区H－4・5・24号住居址……65

　　37　D区H－6号住居址……66

　　38　D区H－7・8号住居址……67

頁

Fig. 39 D区H－9・12号住居址……68
40 D区H－11号住居址……69
41 D区H－16号住居址……70
42 D区H－15号住居址……71
43 D区H－20号住居址……72
44 D区H－17号住居址……73
45 D区H－18・19号住居址……74
46 D区H－21・22号住居址……75
47 D区H－23号住居址……76
48 D区D－1～6号土坑……77
49 D区H－1・3・5～7号住居址
出土の土器……78
50 D区H－7～9号住居址出土の土器……79
51 D区H－9・10号住居址出土の土器……80
52 D区H－11号住居址出土の土器……81
53 D区H－11・15・16号住居址出土の土器……82
54 D区H－17・18号住居址出土の土器……83
55 D区H－18・19号住居址出土の土器……84
56 D区H－20号住居址出土の土器……85
57 D区H－21～23号住居址出土の土器……86
58 D区H－24号住居址出土の土器……87
59 D区出土の土製品・石器・石製品……88
60 縄文土器……89

表

頁

Tab. 1 内堀遺跡群下縄引II遺跡の
住居址名対照表……V
2 発掘調査報告書抄録……VI
3 住居址一覧……51
4 内堀4号墳計測表……54
5 溝状遺構観察表(D区さくら草の湿原)……54
6 土坑観察表(B区内堀4号墳)……54
7 土坑観察表(D区さくら草の湿原)……54
8 内堀4号墳円筒埴輪観察表……55
9 内堀4号墳形象埴輪観察表……56～58
10 内堀4号墳出土遺物観察表……58
11 D区遺物観察表……59～61
12 縄文土器観察表……62

Tab. 1 内堀遺跡群下縄引II遺跡の住居址名対照表

『内堀遺跡群X』においては、便宜上H－1からH－24の名称を使用したが、
遺跡の住居址通番号は、以下の通りとする。(H－13・14は欠番)

本報告名称	通番名称	本報告名称	通番名称	本報告名称	通番名称
H－1	H－144	H－9	H－152	H－19	H－160
H－2	H－145	H－10	H－153	H－20	H－161
H－3	H－146	H－11	H－154	H－21	H－162
H－4	H－147	H－12	H－155	H－22	H－163
H－5	H－148	H－15	H－156	H－23	H－164
H－6	H－149	H－16	H－157	H－24	H－165
H－7	H－150	H－17	H－158	H－1	H－166
H－8	H－151	H－18	H－159		

◎H－144からH－165は、D区で検出。
◎H－166はE区で検出。

Tab. 2　発掘調査報告書抄録

ふりがな	うちぼりいせきぐん　じゅう
書名	内堀遺跡群X
副書名	大室公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報
巻次	第10巻
シリーズ名	－
シリーズ番号	－
編著者名	戸所慎策　安立　聡
編著機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編著機関所在地	〒371－0007　群馬県前橋市上泉町664－4
発行年月日	1998（平成10）年3月25日

ふりがな 所収遺跡群名	ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
内堀遺跡群 （うちぼりいせきぐん）	内堀遺跡 下縄引II遺跡 （しもなわびき）	前橋市西大室町 2510番地ほか	10201	9E11	36°23′15″	139°12′00″	19970521～ 19971215	3881	公園造成

所収遺跡群名 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
内堀遺跡群	包含層	旧石器時代 縄文時代	包含層・土坑2基	石器 土器・石器	
内堀遺跡	古墳	古墳時代後期	古墳1基	埴輪・土器	馬形埴輪と人物埴輪が古墳が造られた当時の位置から出土
内堀遺跡群 下縄引II遺跡	集落	古墳時代前期 古墳時代中期 古墳時代後期	住居址3軒 住居址5軒 住居址11軒	土師器（赤井戸式・樽式系を含む） 土師器・石製品・土製品 土師器・須恵器・石器・石製品	隣接する周溝墓群と関連を有する集落。

I　調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市の「大室公園整備事業」に先立って行われたものである。この調査は昭和62年度に始まり今年度で11年目になるが、公園建設予定地の埋蔵文化財を調査し公園設計の基礎資料にすることが目的である。

昭和62年度は、公園予定地約369000㎡のうち国指定史跡である前二子古墳・中二子古墳・後二

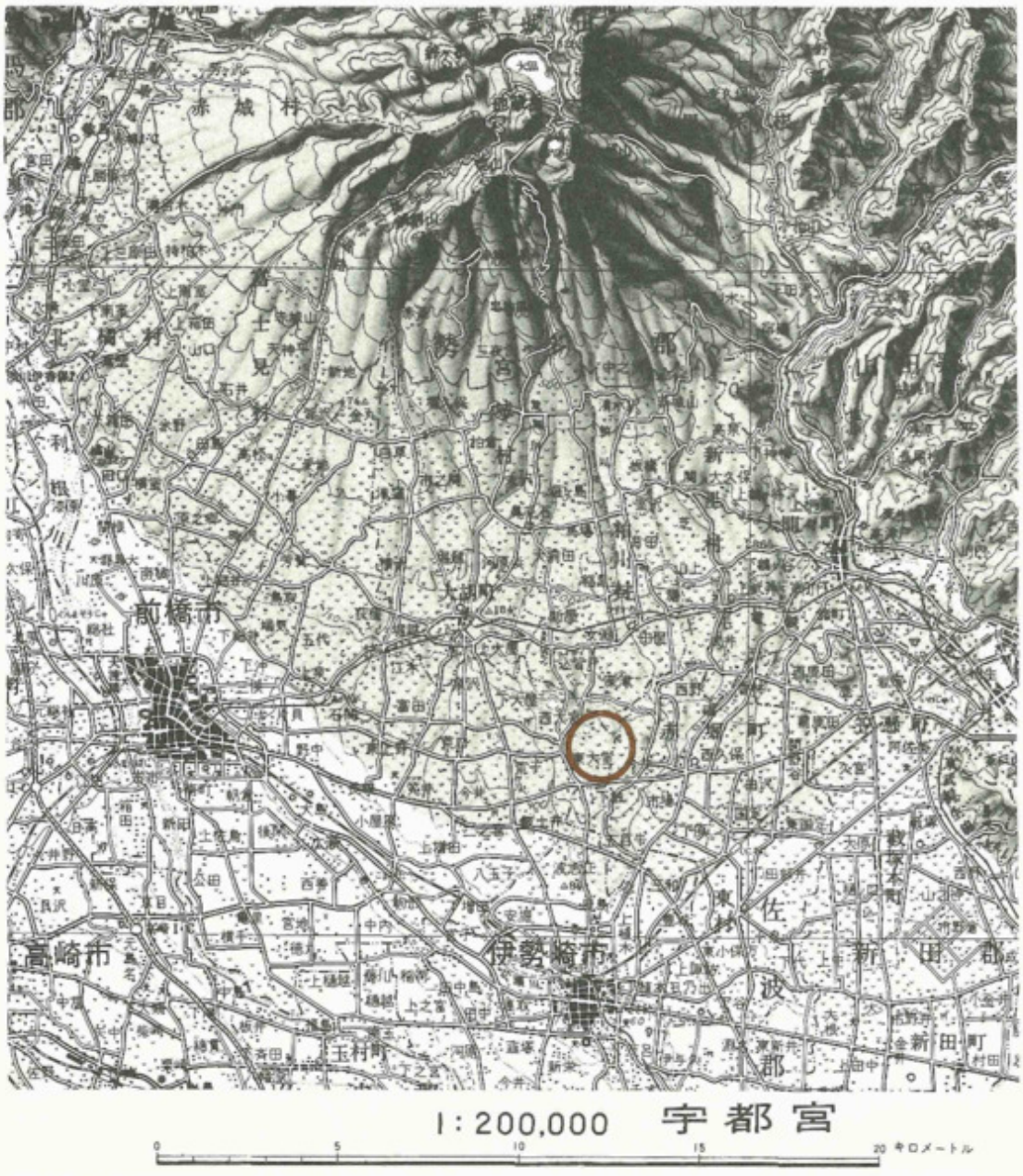


Fig. 1　内堀遺跡群の位置

子古墳・小二子古墳や山林、沼などを除く約200000㎡について東西に10ｍ間隔でトレンチを入れる方法で確認調査を行い、予定地全域についての埋蔵文化財の分布状況を知るとともに、その結果を踏まえ（内堀遺跡群Ⅰに収録）、昭和63年度には予定地の北西部約10000㎡についての発掘調査を実施した（内堀遺跡群Ⅱ）。また、平成元年度は、昭和63年度調査区の西側を中心に約12600㎡について発掘調査を実施した（内堀遺跡群Ⅲ）。平成２年度は、昭和63年度と平成元年度の調査区を取り囲む範囲の発掘調査と確認調査を実施した。発掘調査の面積は約9000㎡・確認調査の面積は約2500㎡で合計11500㎡である（内堀遺跡群Ⅳ）。

平成３年度は、平成元年度第Ⅰ調査区の南および西側に隣接したＬ字形の区域約4000㎡について、後二子古墳・小二子古墳範囲確認調査とともに発掘調査を実施した。平成４年度は公園予定地の北西部にある自然丘陵の東側と西側の部分約9400㎡について、前二子古墳の範囲確認調査と並行して発掘調査を実施した。また、Ｍ－６号墳の範囲確認調査や一部試掘調査も行った（内堀遺跡群Ⅳ）。

平成５年度は、五料沼の北側の部分3130㎡について、２カ年計画の２年次の中二子古墳範囲確認調査の前に発掘調査を実施した（内堀遺跡群Ⅳ）。

平成６年度の調査は、平成５年度の調査区（Ａ区）の水路をはさんだ東側の部分1200㎡について、２カ年計画の２年次の中二子古墳範囲確認調査と一部並行して発掘調査を実施した（内堀遺跡群Ⅶ）。

平成７年度は、前橋市の指定文化財「関根家住宅（赤城型民家）」の移設予定地とその周囲道路部分の併せて3000㎡について、小二子古墳の範囲確認調査と一部並行して発掘調査を実施した（内堀遺跡群Ⅷ）。

平成８年度は、後二子古墳北側の管理用道路、赤城型民家の南側、内堀４号墳のトレンチ調査等を小二子古墳の調査の前後に実施した。（内堀遺跡群Ⅸ）

今年度は、内堀４号墳の全面調査、管理用道路、平成６年度の南側で五料沼に流れ込む水路の両側の調査を実施した。調査面積は発掘調査と確認調査で約3881㎡である。

調査した部分は、公園整備が予定されている地域で、記録保存を目的とした調査である。なお、初年度以前の経緯については『内堀遺跡群Ⅰ』に詳しく述べられているので本書では省略する。

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地

内堀遺跡群が所在する前橋市西大室町は、前橋市の中心市街地から東へ約15kmの所にある。遺跡は国道50号線東大室十字路より北へ２kmで、県道前橋・今井線と県道伊勢崎・深津線の交差点

Fig. 2 内堀遺跡群調査全体図

から北東1kmに位置している。またＪＲ両毛線伊勢崎駅から遺跡は北約7kmにあり、上毛電鉄新屋駅から近い。東側は多田山と呼ばれる火山泥流による丘陵地形があり、赤堀町との境となっている。また、北に接する粕川村とは、七ツ石とよばれる信仰の対象となっている巨石のある丘陵とそれに連なる丘陵地形を行政上の境界としている。

平成9年度の調査区は、内堀遺跡群（公園予定地）の中の、内堀4号墳と管理用道路は西側に、さくら草の湿原は北東に位置している。

本遺跡群の東端には五料山とよばれる自然丘陵があり、また、後二子古墳の南側、さらには前二子古墳が造られた所も丘陵地形となっている。この地区の丘陵地形の基盤は、すべて粗粒安山岩よりなる火山泥流によって形成されており、それらが露出しているのが、七ツ石や石山観音、産泰神社裏の巨石などである。また、平成3年度調査区内から小さな谷地が入り、かつては湧水による小河川があったものと推定される。現在五料山の西側には小河川が流れているが、近世頃にこの谷地の南側に堤を造り、堰止めてできたものが五料沼である。本遺跡のある丘陵の北側には現在水田地帯が広がっているが、下縄引Ⅰ遺跡や粕川村五反田遺跡の存在からこの地域を当時の生産基盤と考えることが難しいため、上記の谷地を含めた南側に生産基盤を求めたい。本遺跡地の標高は、127m～132mである。

2　歴史的環境

内堀遺跡群のある荒砥地区は自然に恵まれた風光明媚な所であるとともに、大室4二子古墳を始めとした周知の遺跡が存在する考古学上にも重要な地域である。そこで、本遺跡群を理解するために周辺の歴史的環境をみてみたい。

まず、旧石器時代の遺跡として、荒砥川流域の洪積台地先端部を中心に尖頭器がまとまって出土した荒砥北三木堂遺跡④、ＡＴ下の国内最大の「環状ブロック群」が検出された下触牛伏遺跡㉖、また、宮川の沖積地に臨む柳久保遺跡群③においてナイフ形石器、細石刃等の旧石器文化の遺物が出土している。

続く縄文時代には、草創期の遺跡として爪形文土器が検出された下触牛伏遺跡㉙がある。二本松遺跡㉕や柳久保遺跡群からは、田戸下層期の土器が出土している。前期の遺跡は、荒砥二之堰遺跡㉔、荒砥上ノ坊遺跡⑥、荒砥上諏訪遺跡⑲など検出例は多い。中期後半の遺跡も多く確認されているが、いずれも5～10軒の中・小規模の集落にとどまっており、赤城村三原田遺跡、赤堀町曲沢遺跡のような大規模遺跡の存在は知られていない。

弥生時代の遺跡は水田耕作に適した沖積地を臨む台地や微高地に立地しており、中期後半から後期の小規模集落が荒砥島原遺跡⑤、荒砥上川久保遺跡㉘、西原遺跡⑯、西迎遺跡⑰などで見られる。古墳時代前期の遺跡としては、本遺跡の北西に隣接する上縄引遺跡⑱をはじめ、北山遺跡⑬、七ツ石遺跡⑭、久保皆戸遺跡㉒、梅木遺跡㉑などがある。この時期の遺跡は、住居出土の土

器を見る限り複雑な様相を呈しており、弥生時代後期の樽式・赤井戸式土器はこの時期まで残存し、土師器と共伴する。そのうち、浅間C軽石降下後およびFA降下前の各遺跡の住居は、内堀遺跡群下縄引Ⅰ遺跡の集落に対応するものであると考えられる。また、下縄引Ⅰ遺跡の集落の墓域として上縄引遺跡の周溝墓群を考えている。5世紀後半から6世紀代に入ると、赤堀茶臼山古墳㉓をはじめ強大な支配者の存在を暗示する大室4二子古墳が築造され、この地区が当時の中心的様相を呈するようになる。梅木遺跡で検出された首長層の居宅は大室4二子古墳と何らかの関係があると推定される。このほかに居館址として、荒砥荒子遺跡⑦、丸山遺跡①などがある。また、荒砥荒子遺跡の豪族居宅遺構と関連し、舞台遺跡1号古墳⑧および西大室丸山遺跡⑨があり、

Fig. 3 内堀遺跡群と周辺遺跡

豪族の勢力格差により居宅・古墳の規模、祭祀行為に相違があったことが窺える。6世紀後半から7世紀代に入ると小円墳の群集化が進み、1～3基程度の散在する小円墳も出現するようになり、支配階層の多層化と系列化が進んだことを意味している。粕川村深津の三ケ尻西遺跡⑮では、7世紀後半の製鉄遺構3基と住居址が確認された。古墳群が密集した地域であることから、有力な豪族が招いた技術者の集落址で製鉄品造りの拠点になっていたと推定される。また、西大室では赤城南麓の古墳時代終末期を代表する截石切組積石室をもつ富士山古墳⑩が築造され、高度な石材加工技術を習得していたことが窺える。

奈良・平安時代には居住域が台地全体に広がり、水田開発が進み、荒砥諏訪西遺跡②では微高地まで水田化している。また、12世紀の中頃、開削されたとされる女堀の遺構も残存している。また、奈良～平安時代の炭窯址が横俠遺跡群や粕川村の西原古墳群、大胡町の上大屋・樋越地区遺跡群等の近隣市町村から検出されており、当時赤城南麓の近隣で盛んに木炭生産が行われていたことが窺える。中世以降の城郭としては、大室城⑪、元大室城⑫、今井城、赤石城などがあり、荒砥北三木堂遺跡などでは多数の墓坑が調査されている。また、井戸や溝など近世の遺構も多くの遺跡で確認されている。

III　調査の経過

1　調査方針

調査の実施にあたっては、国家座標に基づいた原点を据えて、内堀遺跡群全体グリッド（4mグリッドを基本とし、西から東へX0～X250・北から南へY0～Y200グリッドの設定枠）を用いた。ちなみにX125－Y50グリッドは第Ⅸ系の＋43200.000m・－56800.000mで、北緯36° 23′ 15″ .8002・東経139° 12′ 00″ .4300に当たる。調査面積は約3881㎡である。

調査区域が五料沼を挟んで大きく2つに分かれているため、A区（管理用道路）・B区（内堀4号墳）・C区（排水管付設）・D区（さくら草の湿原）・E区（さくら草の湿原北側フェンス）と呼称した。なお、C区は、工事の関係上緊急を要したため、公共開発として調査を実施した。E区は、フェンス工事に伴って立ち会い調査を実施した。

調査には期間的制約があるため掘削用重機を用いて表土の除去を行うことにした。並行してグリッド設定、ベンチマーク（水準点）の設置を行った。その後、平板測量で遺構の配置図を作成し、各遺構の調査工程を検討した。具体的には

1　遺構の掘り下げは、セクションベルトを設けて土層観察を行いながら進める。

2　遺物について、10cm四方以上のものは縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドットで表記した平面図を作成する。取り上げに際しては、遺物台帳に諸属性を記録する。

3　炉と竈の図化については、原則として縮尺1/10にて、遺構平面図については、原則として

縮尺1/20にて実施する。

4　円筒埴輪、形象埴輪で掘り方の分かるもの、集中して遺物が出土したものは、1／10の微細図を作成する。

5　内堀4号墳は、平成8年度のトレンチを基準にし、墳丘・周堀を4区に分け、さらに主体部をS区として、遺物の取り上げを実施する。

以上の方針の下に調査を進めた。

2　調査経過

発掘調査は、平成9年4月より現地調査、発掘事務手続き、公園緑地課との事前協議などを十分行ってから、現場事務所の設置や発掘調査用具の搬入など本格的な準備を行い、5月21日より発掘調査を開始した。調査区が分かれているため、今年度の調査区を、A区（管理用道路）・B区（内堀4号墳）・C区（排水管付設）・D区（さくら草の湿原）・E区（さくら草の湿原北側フェンス）として、調査を実施した。C区は緊急を要したため、公共開発として、5月7日と8日に調査を実施した。

調査工程を考慮して、B区北側→A区→B区南側へとバックフォー（0.4㎥）で表土掘削を開始した。続いて、7月24日よりD区の表土掘削をバックフォー（0.4㎥）と土の搬出を10tクローラーで水路の西側より開始した。8月22日には表土掘削は終了した。6月5日にA・B区を、8月24日にD区の杭打ちを実施した。5月21日から内堀4号墳の掘り下げを開始した。円筒埴輪、馬形埴輪、人物埴輪で基部が当初の設置場所から出土したため、調査途中ではあったが、7月21日に現地説明会を実施した。県内外から約600名の見学者があった。その後、A区の掘り下げを実施した。D区は、期間や湧水等の関係で、水路の東側のみ本調査を実施した。調査の結果、住居址22軒・土坑6基・溝4条が検出された。水路の西側は、As－Bを含む溝が検出されたが、沼の湧水により、調査が実施できなかった。公園緑地課と協議し、平成10年度の調査とした。調査面積は3881㎡。8月20日に業者委

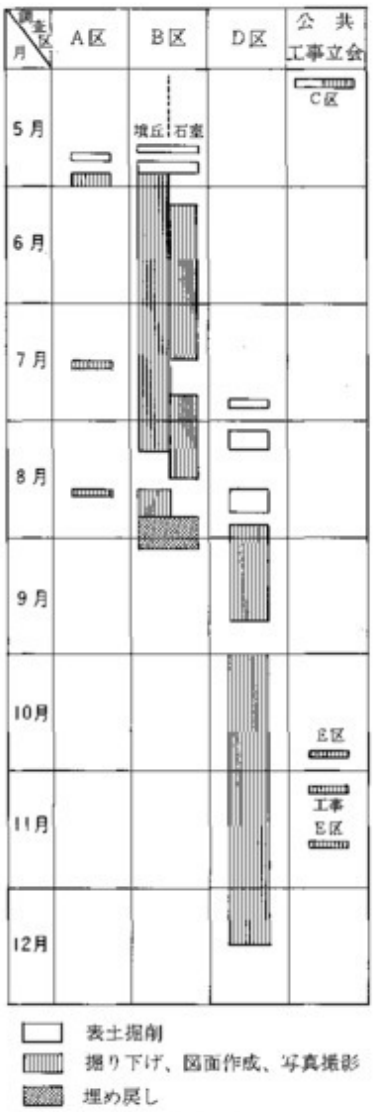


Fig. 4　平成9年度調査経過図

託によるA・B区を、12月4日にD区のラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。12月15日をもってD区の図面作成を終え、全調査を終了した。

遺物整理作業と報告書作成は12月16日より3月25日まで行った。また、3月12日には、水路の西側の平成10年度調査区域となったさくら草の湿原の試掘立ち会いを行った。

Ⅳ 層　　序

X98－Y23グリッドの土層を基にして本遺跡の標準土層図を作成した。本遺跡は、内堀遺跡群の北東部に存在し、約20～30万年前に赤城山の山体崩壊によって、引き起こされた梨木泥流によって形成された「流れ山」を中心とした標高129～137mの丘陵性台地である。「流れ山」の頂上には梨木泥流によって運ばれた大形の礫が一部露出し、土層の堆積も薄く、ちなみにⅦ層のＡＴ（姶良丹沢パミス）が表面から50～60cm程度で検出できる。

Ⅰａ層　黒褐色粗砂層。耕作土層。As－B（浅間Bテフラ：1108年降下）を50%以上含む。粘性なく、締まりあり。

Ⅰｂ層　黒褐色土層。As－B、As－C（浅間C軽石：4世紀中葉降下）、Hr－ＦＰ（榛名二ツ岳軽石：6世紀中葉降下）を含む粗砂層。粘性はないが、締まりはある。

Ⅰａ層　As－B純層。天仁元（1108）年に浅間山より降下した軽石層。わずかに間層をはさんで上部にAs－Kk（浅間粕川テフラ）が存在する場合もある。

Ⅰｂ層　黒色細砂層。As－C、Hr－ＦＰ（径20㎜）を15%含む細砂層。粘性を有し、締まりあり。

Ⅰｃ層　暗灰黄色細砂層。粘性は少しあるが、締まりが弱い。

Ⅲ　層　黄褐色細砂層。淡色黒ボク土。粘性は少しあるが、締まりが弱い。縄文時代遺物包含層。

Ⅳａ層　明黄褐色硬質ローム層。As－ＹＰ（浅間板鼻黄色軽石：約1.3～1.4万年前）を10%、As－Ｓｒ（浅間白糸軽石：約1.8万年前）やAs－OPl（浅間大窪沢第1軽石）を5%含む微砂層。粘性があり、硬く締まる。

Ⅳｂ層　明黄褐色土層。ハードローム層。As－ＹＰを

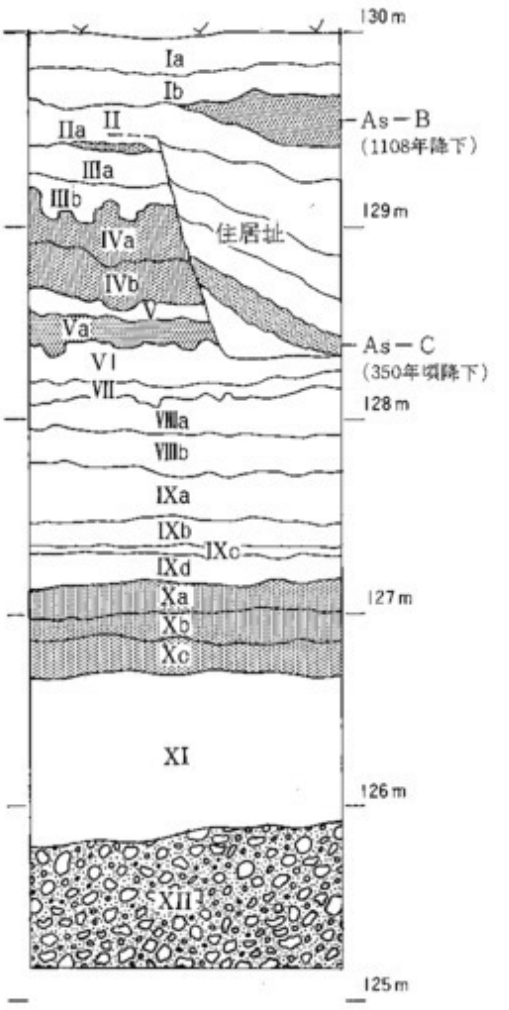


Fig. 5　内堀遺跡群標準土層図

5％、As－ＳｒまたはAs－OP1を10％程度含む微砂層。粘性があり、硬く締まる。

Ⅴ　層　明黄褐色硬質ローム層。As－ＢＰ（浅間板鼻褐色軽石群：1.8～2.1万年前）をブロックで20～30％程度含む層。粘性があり、硬く締まる。

Ⅵ　層　明黄褐色硬質ローム層。As－ＢＰをブロックで15％程度含む層。粘性があり、締まりが弱い。

Ⅶ　層　明黄褐色微砂層。風化土壌。粘性を有し締まりは弱い。上部にＡＴ（姶良丹沢パミス：約2.2～2.5万前）の含有が極大値を示す。

Ⅷ　層　明黄褐色粘土層。暗色帯。粘性が強く、締まりの弱い粘土層。色調でa・bの２亜層に分類できる。

Ⅸ　層　明黄褐色粘土層。粘性が強く、締まりのある粘土層。a～dの４亜層に分類できる。

Ⅹ　層　明黄褐色軽石層。Hr－ＨＰ（榛名八崎軽石：4.1～4.4万年前）。３亜層に分類でき、Ⅹa層は比較的大粒な軽石層、Ⅹb層は火山灰層、Ⅹc層は軽石層である。

Ⅺ　層　褐色粘土層。水性堆積で非常に粘性が強い。

Ⅻ　層　青灰色砂礫層。巨礫によって構成される。梨木泥流（約20～30万年前）によって形成されたと考えられる「流れ山」。

Ⅴ　遺　構　と　遺　物

本年度の発掘調査では、古墳１基・住居址23軒・土坑８基・溝５条が検出された。

古墳時代の住居址は前期が３軒、中期が５軒、後期が11軒である。このうち前期の住居址は、すでに報告されている住居址と合わせると総数107軒、中期は10軒、後期は22軒となる。

1　A区　管理用道路　（Fig. 6、PL. 1）

縄文時代の遺構としては、土坑１基を検出した。遺物としては、縄文土器片138点、石器片38点を検出した。しかし、復原できる遺物はない。

2　B区　内堀４号墳

(1) 周堀・墳丘（Fig. 7、PL. 2・4）

内堀４号墳は、小二子古墳の南約150ｍ、北から南に緩やかに傾斜する斜面に占地する。外縁部は盛土など旧地形を改変した様子は認められなかった。

周堀は、今年度の全面発掘により、全周していることが改めて確認できた。掘削はハードローム層まで掘り込まれている。周堀を覆う土は、すでに調査をした大室公園内の４つの古墳と同様の堆積状態であった。周堀覆土の中位からは２層からなるAs－Bテフラ（層厚約10cm）、その

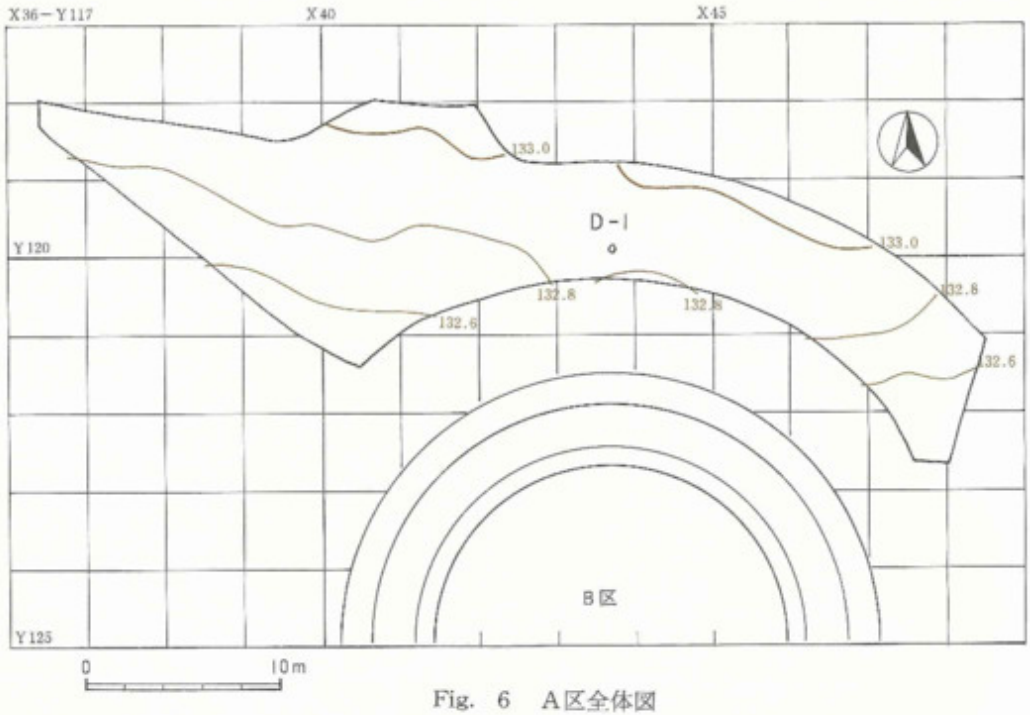


Fig. 6　A区全体図

上位に一層挟んでAs－Kkテフラ（層厚約２cm）が純層で検出されている。埴輪片の多くは、As－Bテフラの下層から検出されている。周堀の北東部分は、一部道路により壊されていた。周堀の平面形状は、不整形な円形で、北側が広く深く、４箇所の膨らみをもつ。

墳丘の北側の周堀内に渡り状施設が確認された。幅は上端で約２ｍ弱、古墳主軸方向より14°東へ向き、ほぼ南北方向にローム面を掘り残して造られていた。古墳の北側にあることから、石室石材である粗粒安山岩を北にある流れ山から採取し、運び入れるための作業路として使用したと思われる。また、周堀底部からの高さは東側で78cm、西側で42cmで、渡り状施設を挟んだ周堀の標高に差が生じている。そのため古墳築造後も残されたと思われる。渡り状施設の両側の周堀は北側に大きく膨らんで掘られている。東側の周堀の膨らんだ所には深掘りが見られる。南にいくほど浅くなる不整形な楕円形をしており、南北３ｍ、東西2.5ｍ、深さ約70cmで、粘土層にまで達している。深掘りの覆土中から埴輪等の遺物が出土していないこと、および深掘り上部が周堀と同じレベルで堅くしまっていることから、古墳完成時には埋め戻され、整形されていたと考えられる。近接する小二子古墳は石室天井部を、４号墳深掘りで見られるものと同様な粘土で覆っていることなどから、後述するように４号墳石室では粘土は検出されなかったが、小二子古墳と同様な構造が推測でき、そのための粘土をこの場所から採集した可能性が考えられる。

墳丘は、下段墳丘と下段平坦面と上段墳丘からなり、上段墳丘はほとんどが後世の耕作等により削平されていた。また、樹木の根の跡等により、墳丘の境界がはっきりしない場所があった。

墳丘径は東西18.5ｍ、南北20.2ｍで、下段は地山削り出しと盛土によって、上段斜面は盛土に

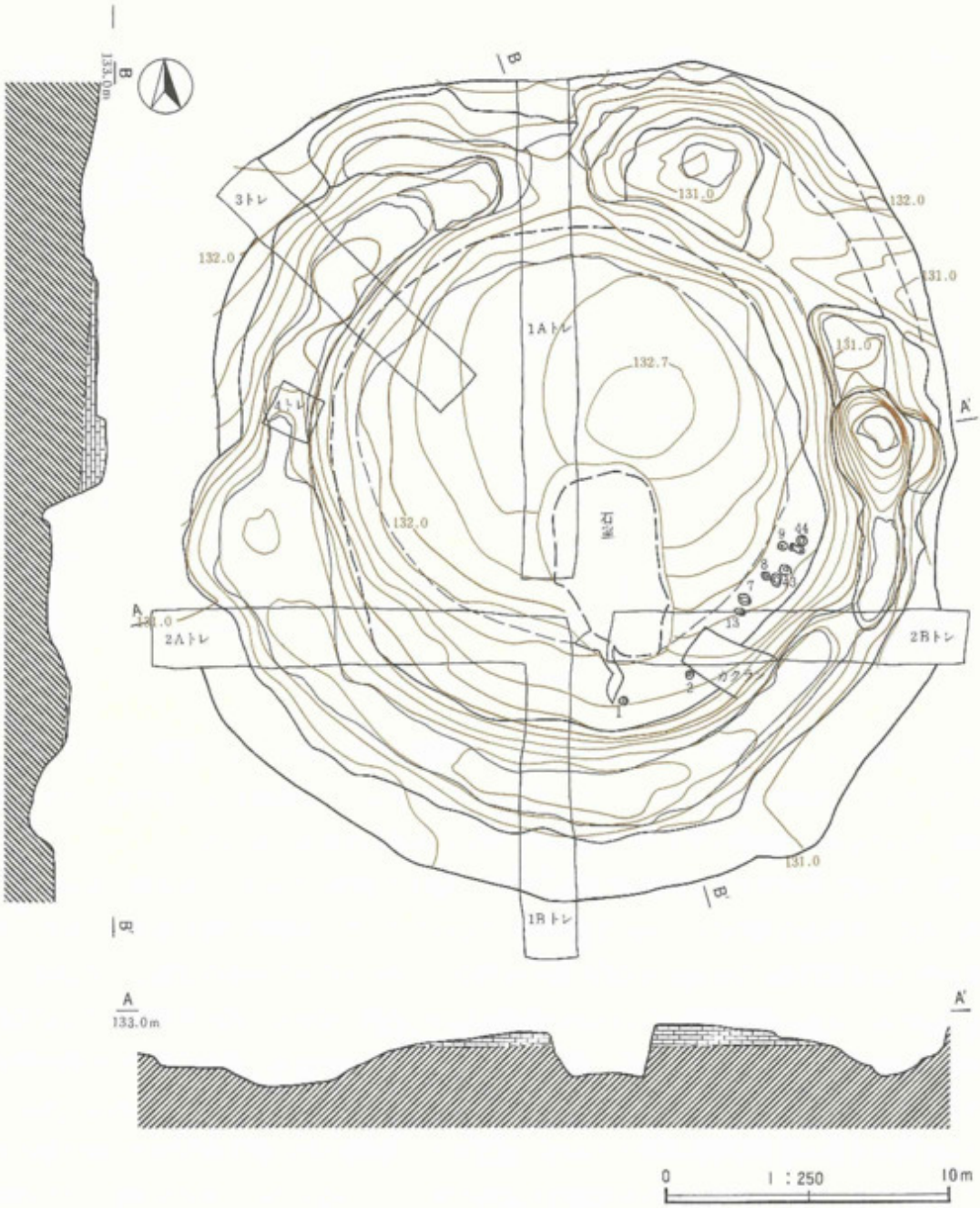


Fig. 7　B区全体図

よって造成される。上段、下段ともに葺石は検出されなかった。

(2)　埴輪列（Fig. 9・10、PL. 2～4、12～16）

下段平坦面から、円筒埴輪6本、形象埴輪の人物埴輪7個体、馬形埴輪2個体を検出した。そのうち、円筒埴輪2本(1、2)、人物埴輪4個体(7、8、9、13)、馬形埴輪2個体(43、44)が

原位置から検出された。

円筒埴輪は下段平坦面の石室の入り口を挟むように検出した。それらの設置間隔は、約2.5mである。掘り方は径約20cm、平坦面の盛土を約7cm掘り込んでいた。検出された円筒埴輪で図示できたものは3本、破片から別個体と判断できたものは最低3本、計6本であり、その本数は遺物の数、分布からみても大きく増えないことは確実で、形象埴輪の数と比べると少ないと言える。円筒埴輪の出土分布は古墳の南側に集中し、北側からはほとんど出土していない。北側からは形象埴輪の出土も少ないこと、As－Bが純層で見られることから考えると、北側は埴輪が樹立されなかったか早い段階で消失してしまったと思われる。

形象埴輪のうち、人物埴輪は、石室の入り口の右側（東側）で検出した。遺物の分布から判断すると、やや上段墳丘寄り、石室入り口から近い順に女子3個体（H、F、D）、男子2個体（G、A）が並ぶ。女子3個体の掘り方は攪乱のために検出されなかったが、人物GとAは50cmの間隔で設置されていた。さらに続いて平坦面の中央付近には馬形埴輪2個体が80cmの間隔で並び、馬形埴輪の前足の墳丘側から男子がそれぞれ検出された。人物埴輪はいずれも周堀側に向かって、馬形埴輪は南を向いて設置されていた。人物埴輪、馬形埴輪ともに周堀側に傾いて出土している。墳頂部には、出土分布から器材埴輪の設置が推測される。最低で、盾2個体、靫3個体、大刀3個体、甲4個体と考えられる。それらのほとんどが古墳の南半分からの出土である。

(3) 主体部（Fig. 11・12、PL. 4・11）

石室のほとんどの石は後世の石取りのために抜き取られていた。石室の調査は、ほとんどを割られた石の搬出に費やした。また、石取りの際に割られた石が石室内に残されており、石室の東側に積み直されていた。積み直された石の間から埴輪片、須恵器片等の遺物が出土した。隣接する小二子古墳より石の抜き取りは激しく、石室の構造ははっきりしない。しかし、石室は、半地下式の構造で、当時の地表面を約50cm掘り込んで造られ、N－14°－Wに開口する袖無型横穴式石室であることが確認された。羨道は長さ約1.5mで緩やかに傾斜している。羨道と玄室の境と

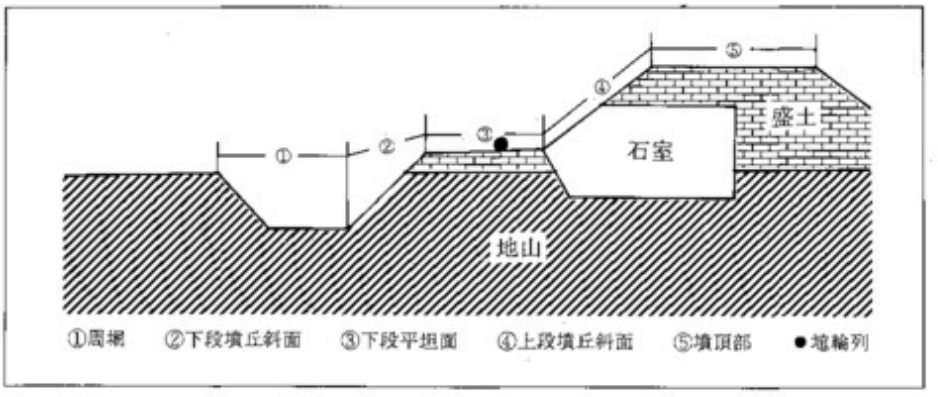


Fig. 8 内堀4号墳断面模式図

Fig. 9　B区墳輪列実測図

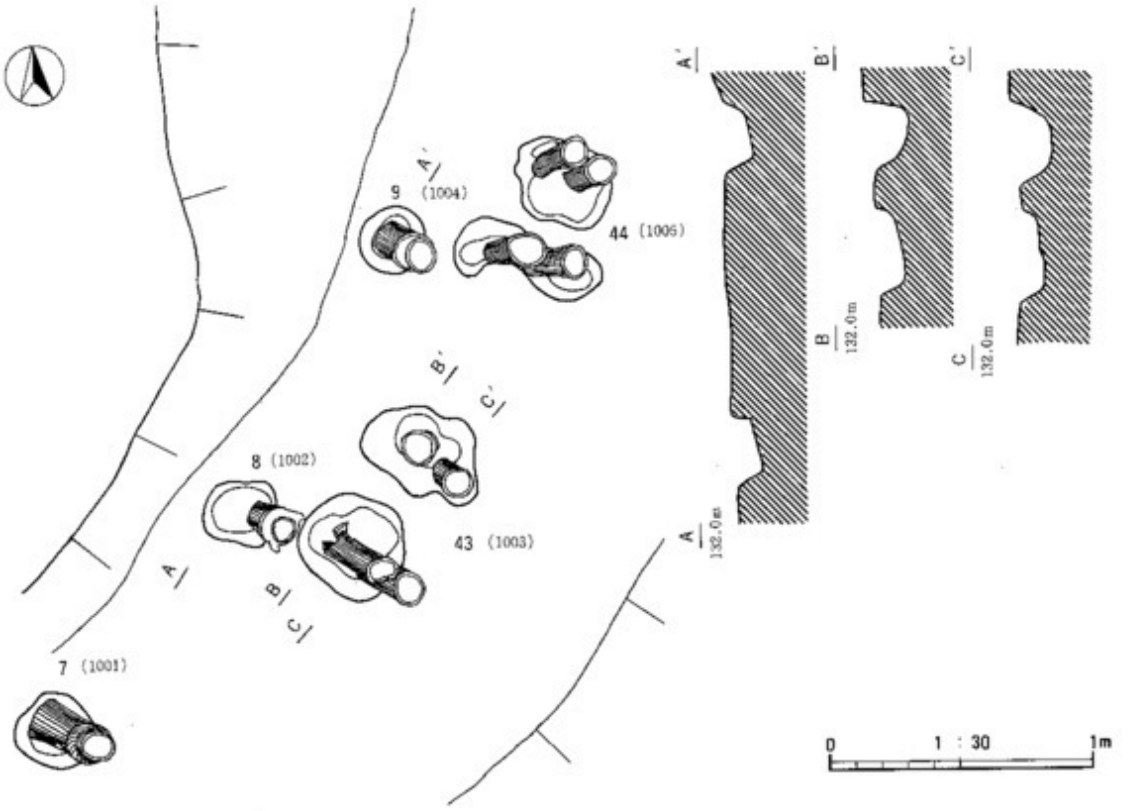


Fig. 10　B区馬形埴輪掘り方

思われる床面には横長の石を据えた痕跡がわずかに見られ、梱石があったと推測される。推定される石室の大きさは、玄室長3.5m、奥壁幅1.4m、玄室入り口幅0.7m、現存の高さ1.5mである。掘り方の大きさは全長5.1m、幅3.2mである。わずかに石室の床面に玉石が残されていた。床面の標高は130.8mで、ほとんどの玉石は石室の東側の墳丘や周堀の覆土の中に出されていた。周堀内の玉石は、As－Bテフラより上位の層から検出された。玉石周辺の土はフルイにかけて、調査を実施したが、副葬品等の遺物は検出されなかった。床面に壁石を据えた痕跡がわずかに確認された。痕跡からすると、壁石は、奥壁2石、東壁3～4石、西壁3～4石から造られていたと推定される。

(4)　出土遺物

a．円筒埴輪（Fig. 17、PL. 4・13）

円筒埴輪は、2本がほぼ完形で原位置から検出された。復原された円筒埴輪は3本である。口縁部の破片から円筒埴輪は6本が確認された。設置場所は、下段平坦面の南側半分に設置し、石室の入り口を挟むようにしながら設置されていたことが推定される。復原された円筒埴輪はすべてが2条突帯で、器高は最低31.0cm、最高34.7cmである。透孔は、円形で、直径約4cm前後であ

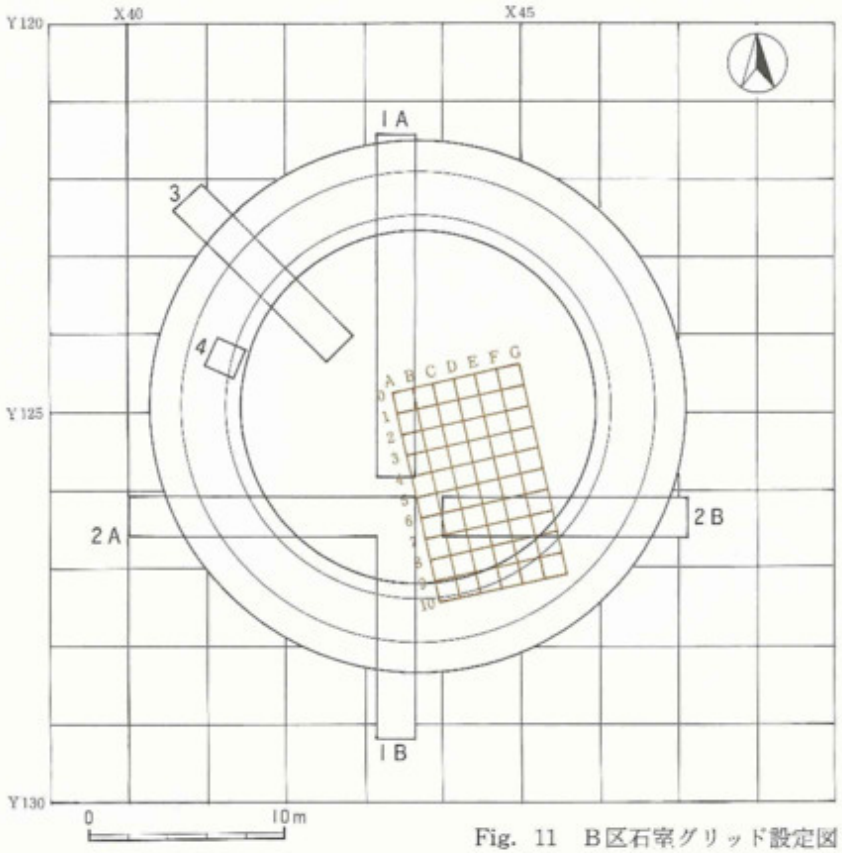


Fig. 11　B区石室グリッド設定図

る。掘り方の確認された円筒埴輪は、約7～10cmほどが土に埋められていた。内面に篦記号をみとめることができる。円筒Aは口縁部に横方向に、円筒Bは透孔上部に斜めに、円筒Cは透孔上部に垂直に1本の線刻がある。円筒埴輪の観察から、口縁から突帯2条目までの長さが長く透孔が大きいタイプと長さが短く透孔がやや小さいタイプの2種類に分類できるようである。

また内面の線刻も前者が縦方向、後者が横方向に刻まれるようである。ただし、埴輪の絶対量が少ないため、これを結論づけることはできない。

なお朝顔形円筒埴輪の出土はなかった。

b．形象埴輪（Fig. 17～28、PL. 2・3・12～16）

形象埴輪は、人物・馬・盾・靫・大刀・靱の6種類が確認された。そのうち人物4個体と馬2個体は原位置から検出された。下段平坦面に人物・馬が設置され、盾・靫・大刀・靱は墳頂部に設置されたと推定される。

人物埴輪は、掘り方は検出されなかったが、南から人物H、F、Dが設置される。いずれも女子半身像である。Hは顔面の一部、Fは頭部から頸部、Dは頭部から胸部が検出された。残りの良いFとDを比較すると、いずれもつぶし島田、耳環、首飾り、腕飾りが表現される点は共通しているが、それらの細部の表現や顔の表情は明らかに異なり、違う製作者によるものと思われる。人物女子の南から人物G、A、B、Cが原位置から出土している。いずれも男子半身像である。

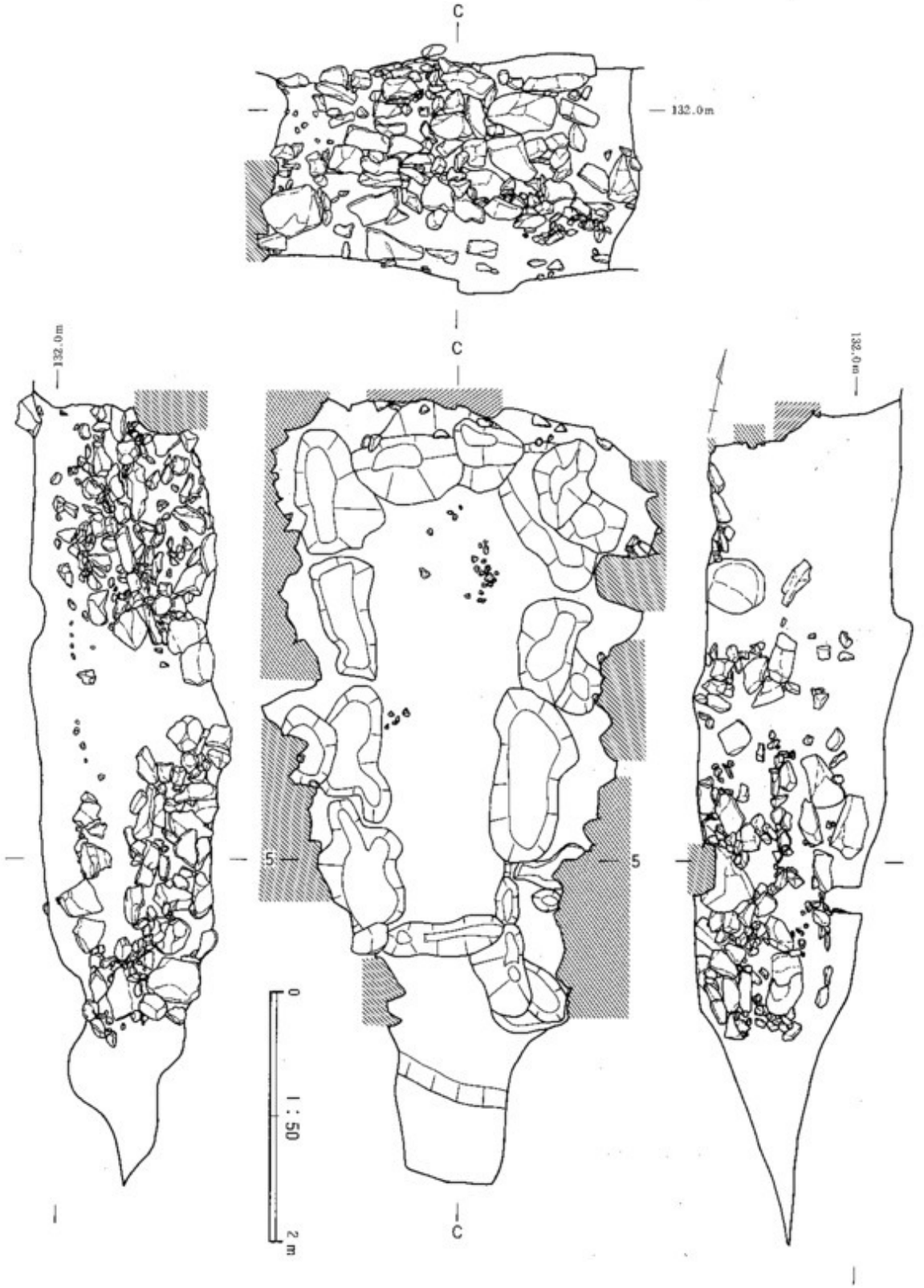


Fig. 12　B区石室実測図

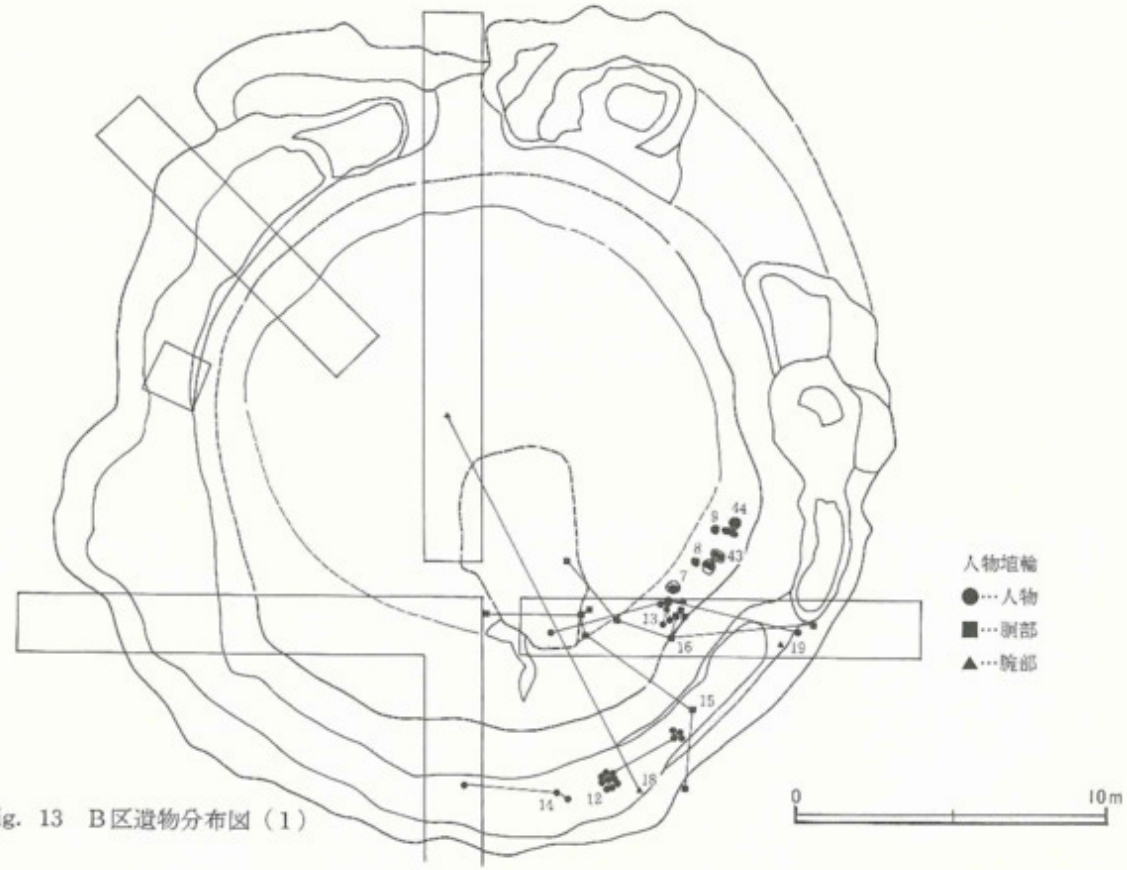


Fig. 13　B区遺物分布図（1）

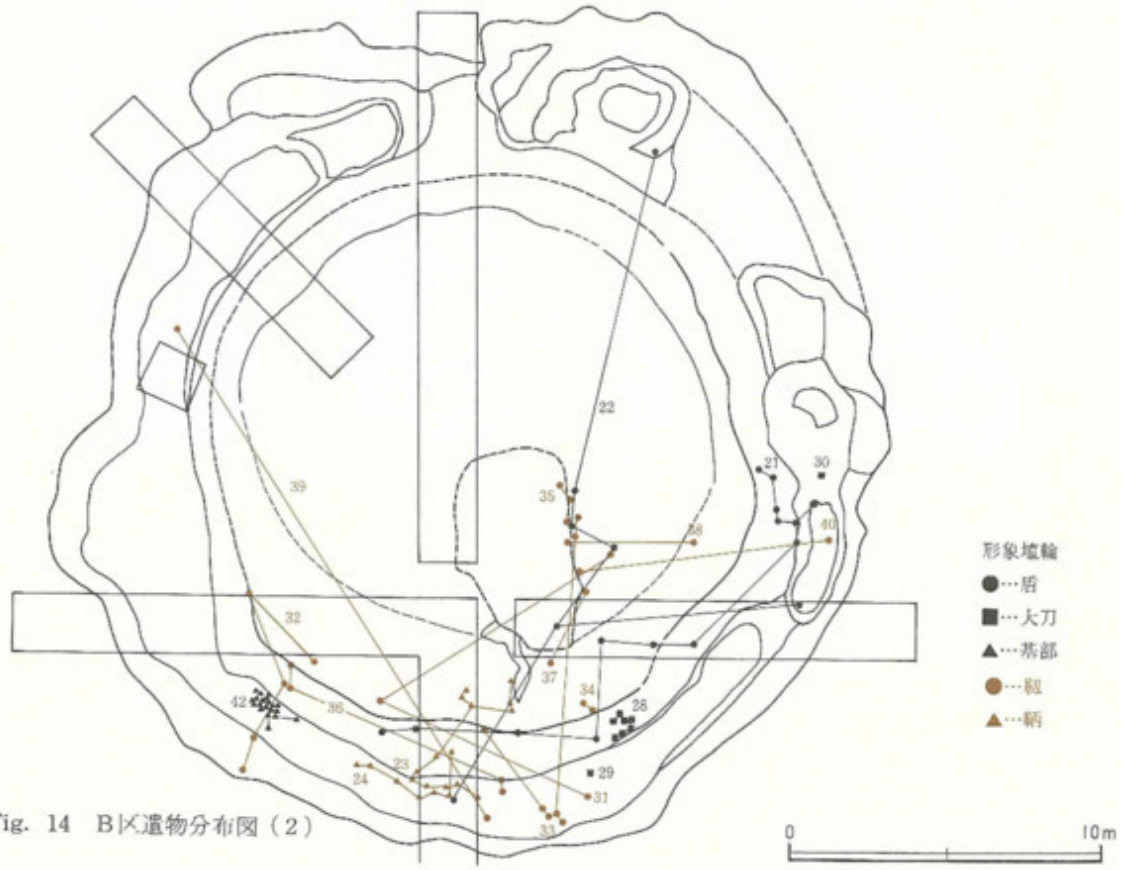


Fig. 14　B区遺物分布図（2）

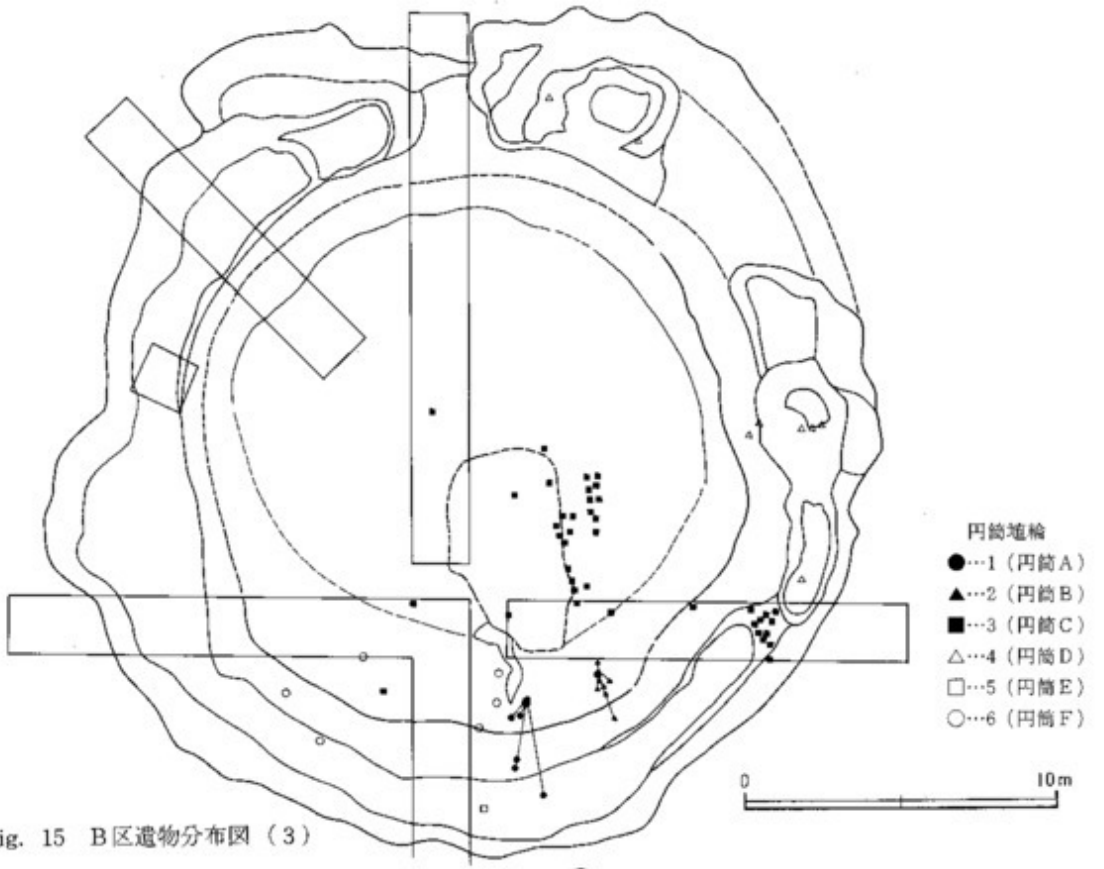


Fig. 15　B区遺物分布図（3）

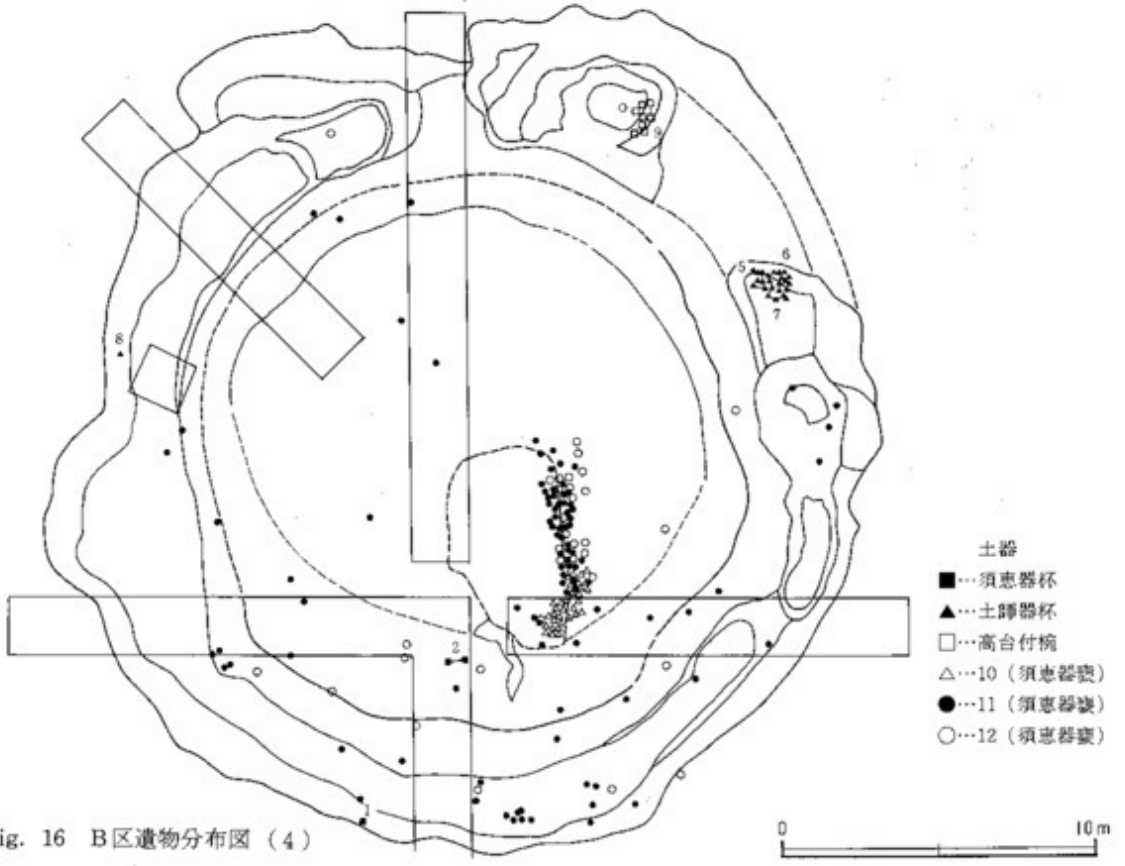


Fig. 16　B区遺物分布図（4）

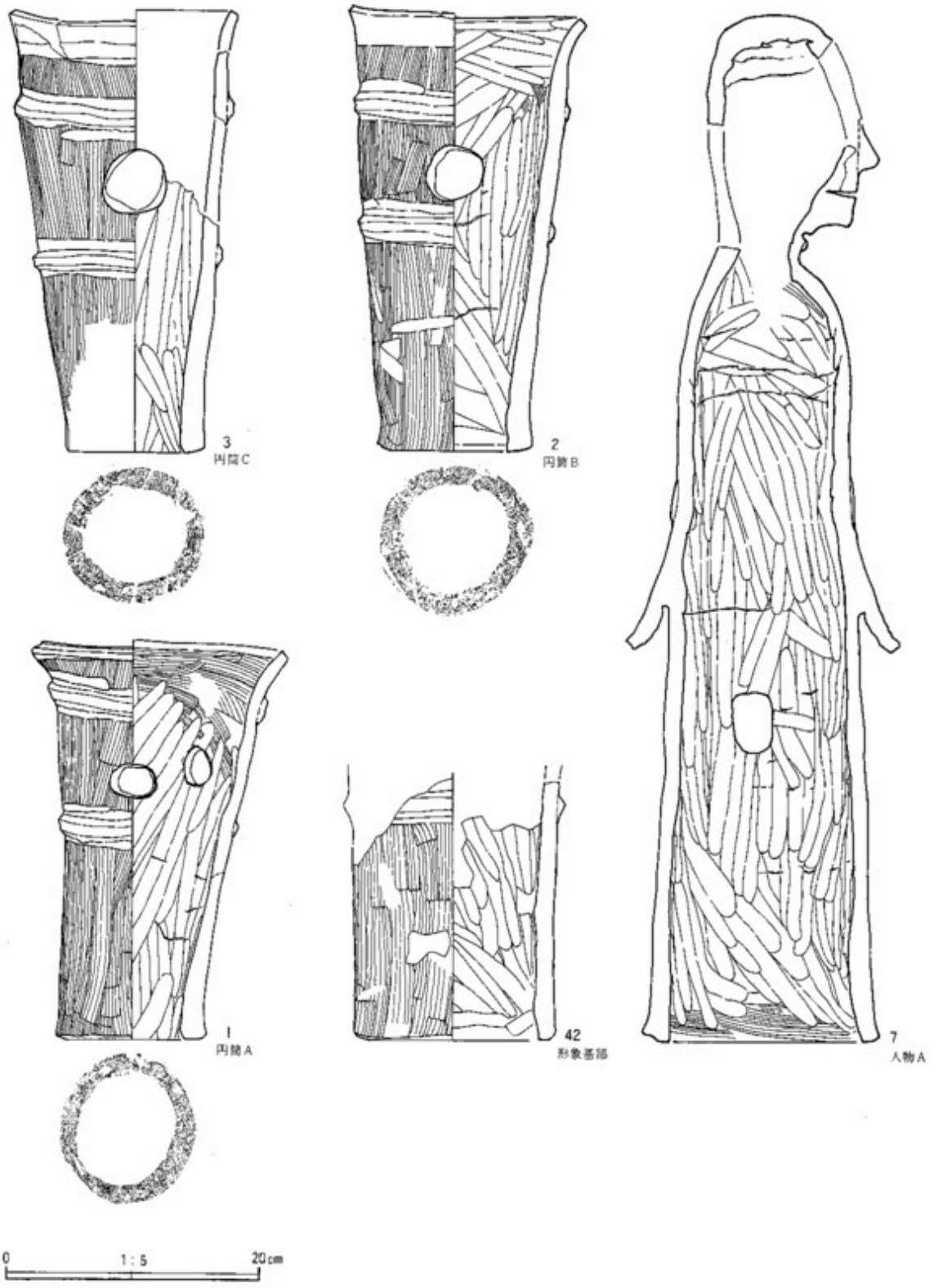


Fig. 17　B区円筒・形象埴輪実測図　（1）

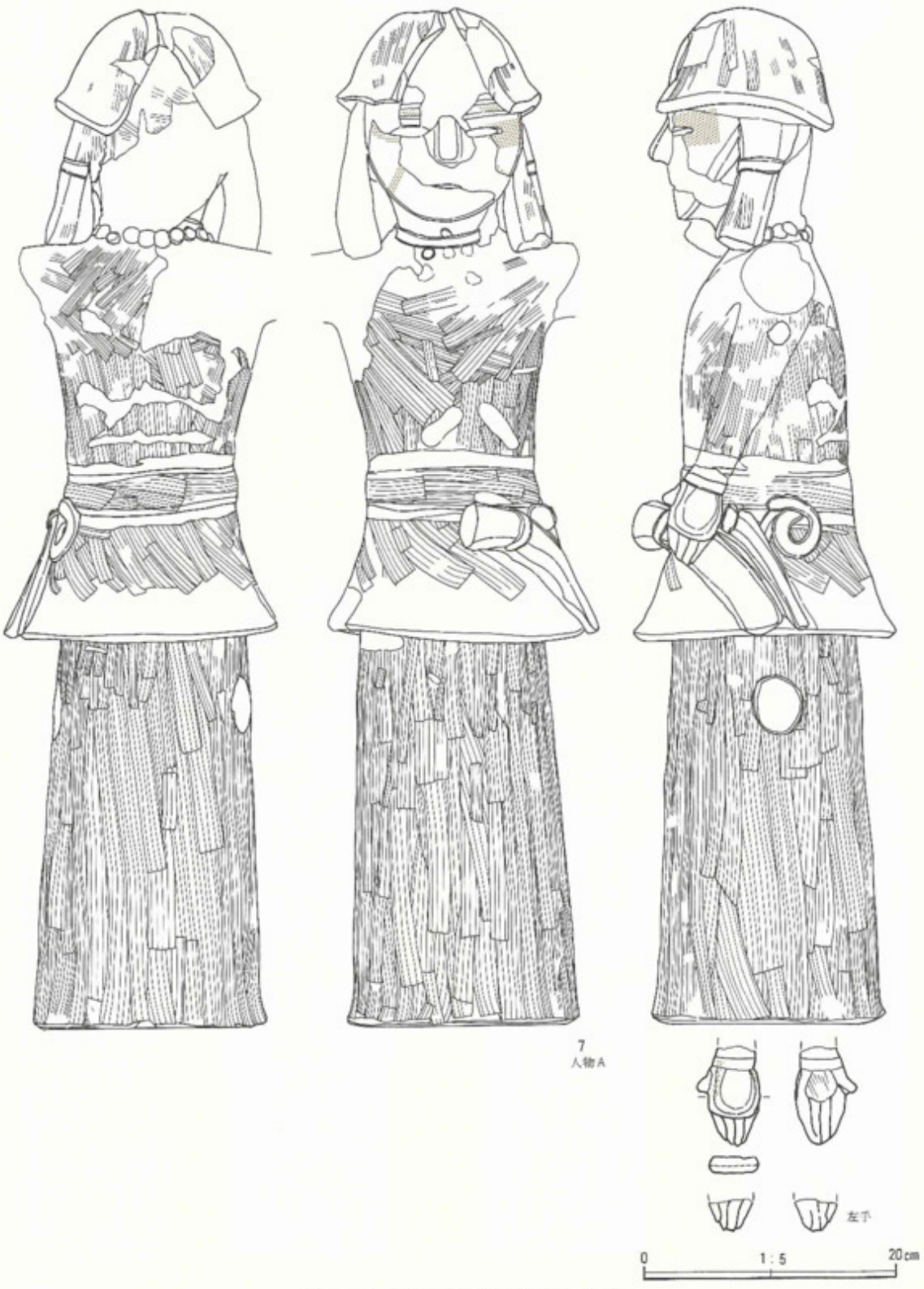
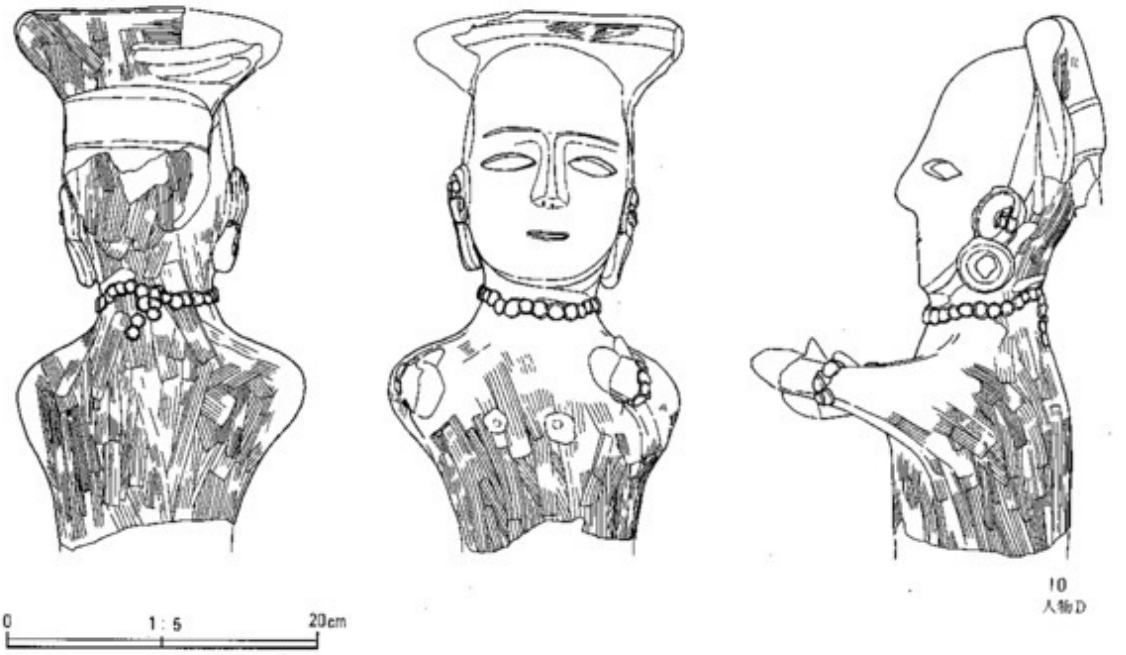


Fig. 18　B区形象埴輪実測図　（2）



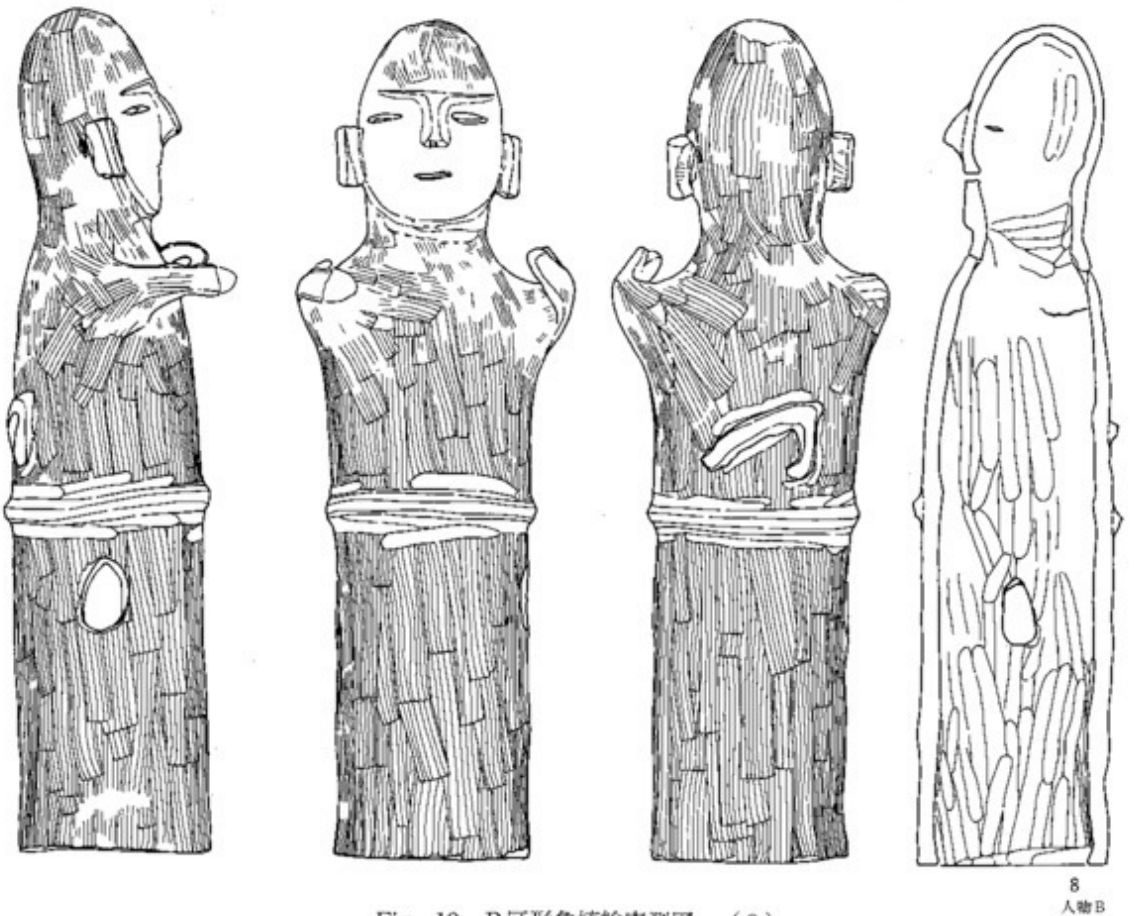


Fig. 19　B区形象埴輪実測図　（3）

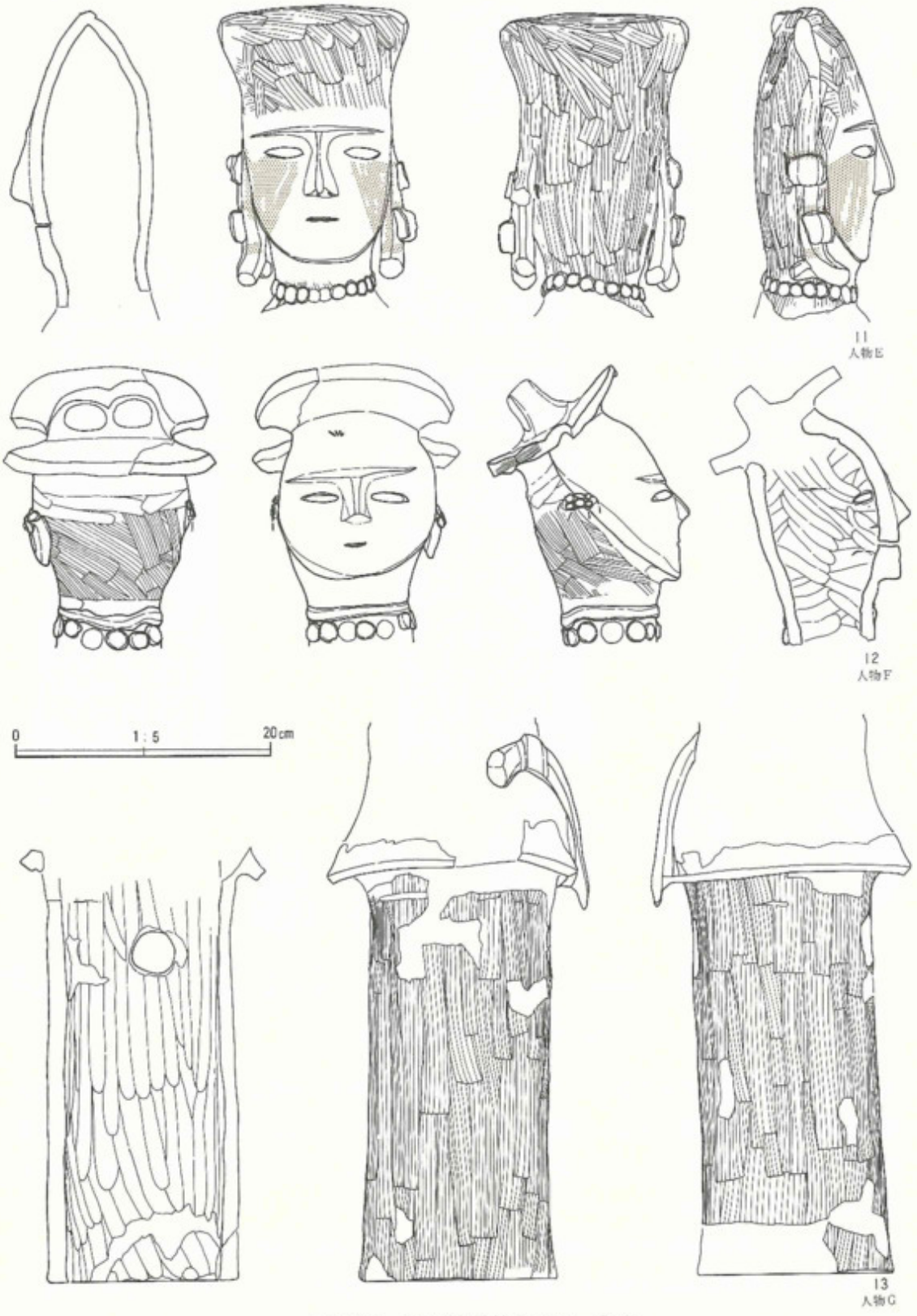


Fig. 20　B区形象埴輪実測図　（4）

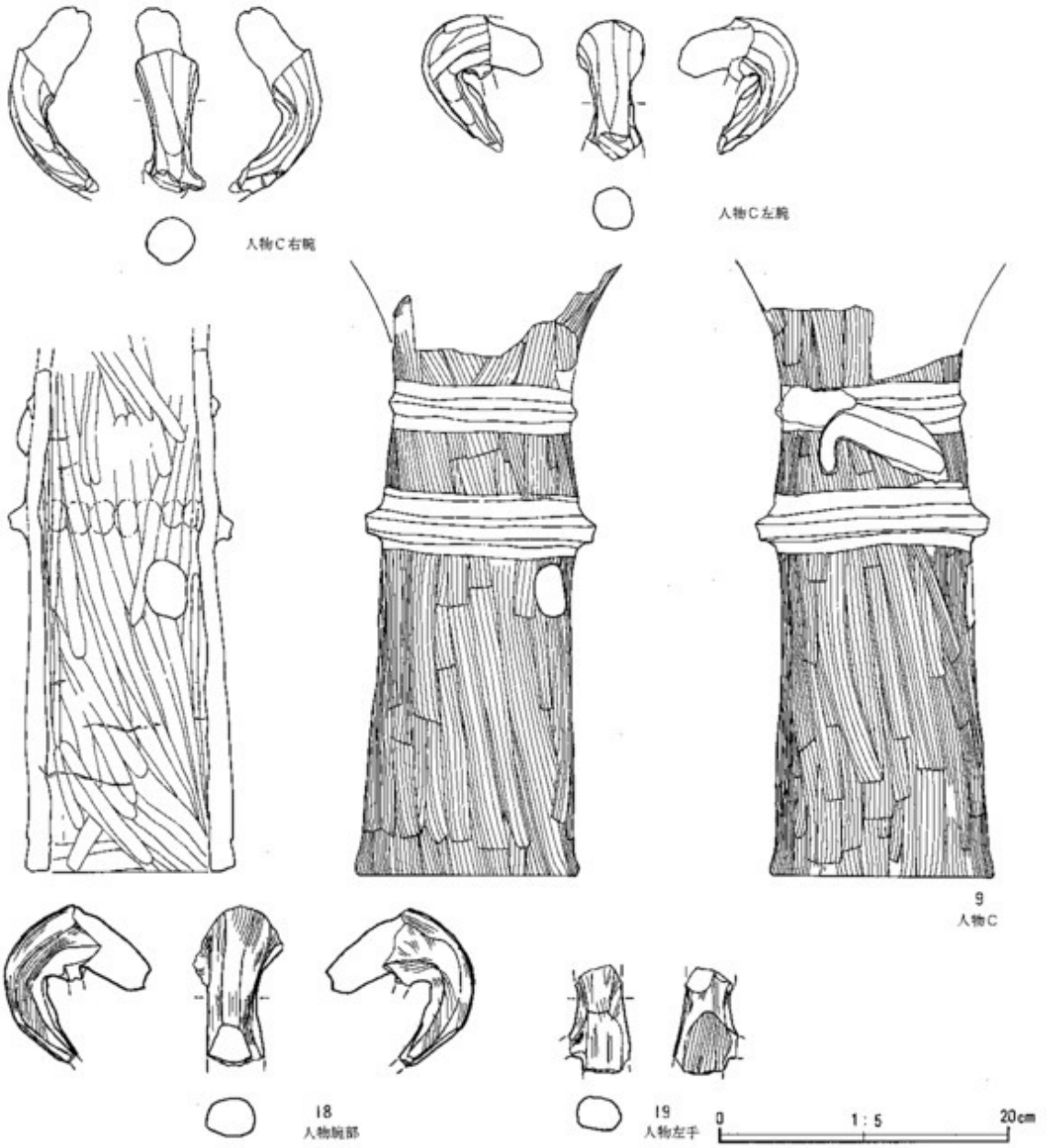


Fig. 21　B区形象埴輪実測図　（5）

人物Gは基部から裾部のみであるが、出土位置などから人物E（頭部から頸部）と同一個体である。頭巾を被った武人像である。人物Aは左手を大刀にかけている武人像であるが、細部の表現において人物Gと異なり、むしろ人物女子Fに近い。人物B、Cともに馬形埴輪の前足付近から出土し背中には鎌を背負う。

馬形埴輪は、頭を南側に向けて設置され、それぞれの前足の墳丘側に人物埴輪が設置されていた。掘り方は、前足と後足で別に掘られ、約10cmが土に埋設されていた。それらの2個体では胎土、焼成、色調、ハケ目、馬具の細かい表現などいずれも異なっている。以下、詳細について記

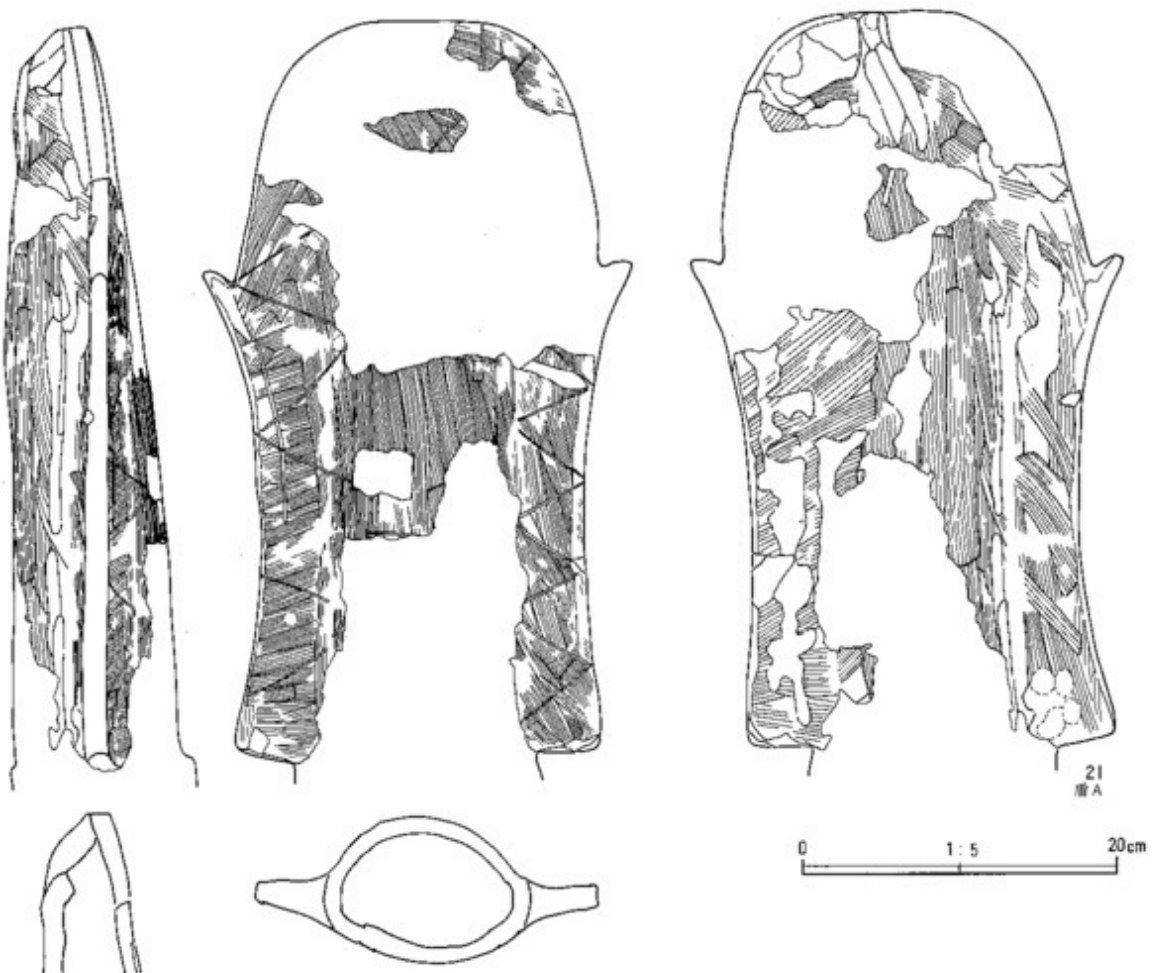


Fig. 22　B区形象埴輪実測図　（6）

述する。

◎馬形埴輪A（南側43）

①胎土…粗粒②焼成…良好③色調…明赤褐④残存…右腰、4本の足のつけねを欠く。⑤特徴…頭部は、U字状に曲げた粘土板を本体に貼り付けて形成。口先から約2.5cm入った所に直径1cmの孔を2つあけることで鼻孔を表現。頭の両側に口先から鏡板まで線刻がそれぞれなされ、口を表現。目は木の葉形に切り込む。耳は頭部を円形にくりぬき、そこに先をとがらせた円筒状の粘土を貼り付ける。轡部分は、鏡板は素環で、幅1.5cmの粘土帯を直径8cmの環状に貼り付ける（口の線刻は鏡板を貼り付けた後）。引手は、幅1.3cmの粘土紐を貼り付けて表現し、その両端は環状に作られ、それぞれ鏡板、手綱に接続する。手綱は、幅1.5cmの粘土紐を貼り付け、前輪とたてがみの接合部で左右から伸びる手綱が連結。たてがみは、孤状の

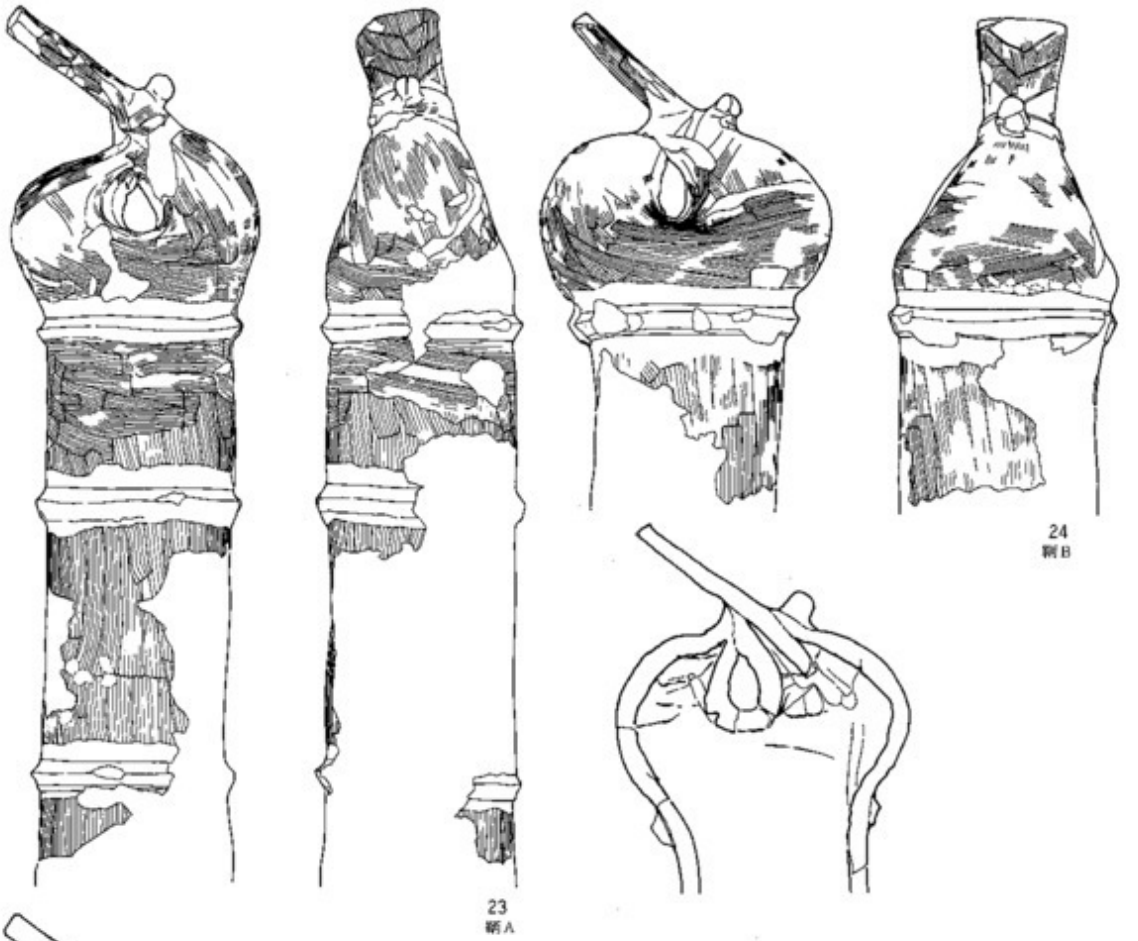


Fig. 23　B区形象埴輪実測図　（7）

粘土板で、端部のみナデている。その先端は4 cmほど突出し、結び飾りとして逆三角形の粘土板がつく。面繋は、幅3 cmの粘土帯を貼り付けて表現され、線刻がなされている。鏡板からでて、耳の後ろを通り、たてがみに至るものと、引手と手綱の連結部からでて、目と耳の間を通り、頭を巻いているものからなり、その交差する部分には、直径4.5cmの円形をした辻金具がつく。また、額の部分にも剝落痕があることから、同様のものがついていたと思われる。胸繋は、幅4.5cmの粘土帯で表現され、直径4 cm、高さ3.5cm、中心に刻みのある中実の鈴が6個貼り付けてある。4.5×3.5cmの楕円形の孔が正面胸繋の下にあけられている。鞍の部分は、前輪・後輪ともU字形の粘土板を本体に貼り付け、端部はナデている。鐙は、幅1 cmの粘土紐を環状にして貼り合わせて輪鐙を表現。障泥は、腹部に22

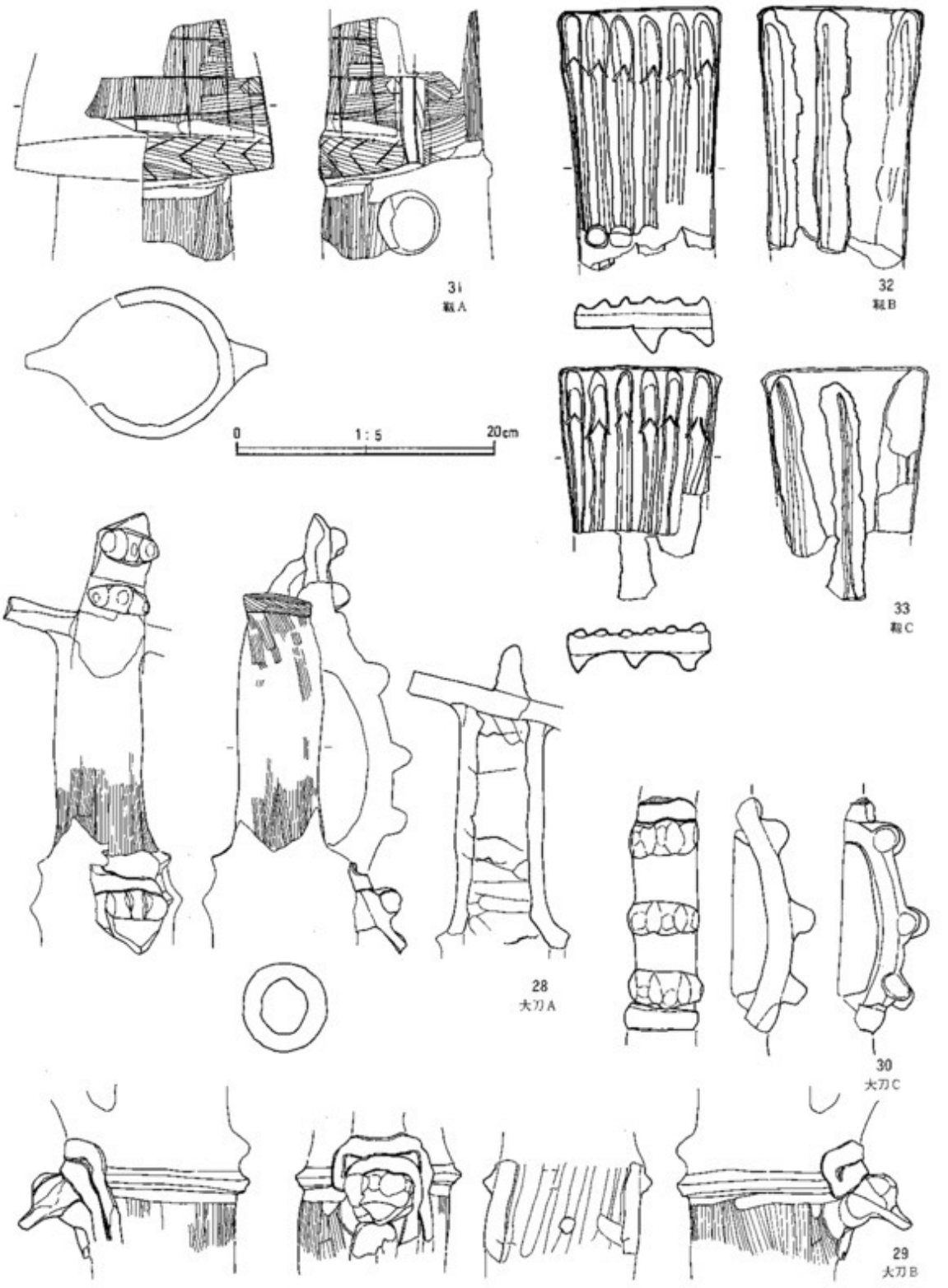
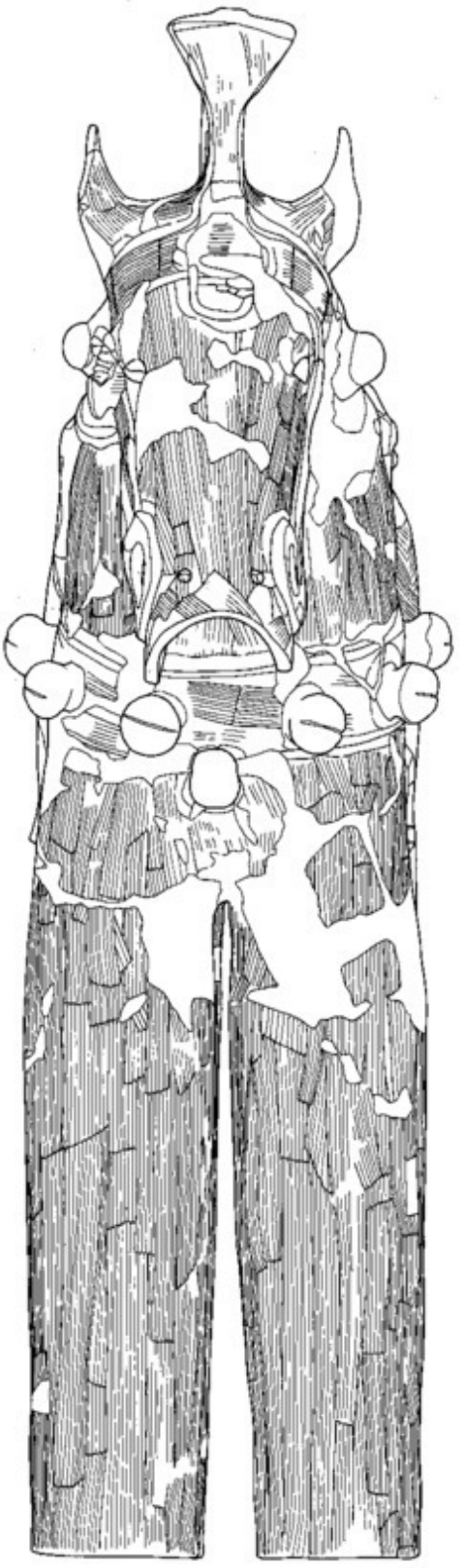


Fig. 24　B区形象埴輪実測図　（8）

×６cmの長方形の粘土板を貼り付けて表現。縁には、1.3cmほどの粘土紐が貼られ、縫い目の表現として刻みが入る。尻尾は中空で、円錐状にした粘土を貼り付けて作られ、端部には、高さ1.5cmの突起がつく。尻繋は、幅約４cmの粘土帯を貼り付けて表現。その構造は残りがよくないため、剝落痕からの判断であるが、後輪の両端と中央からそれぞれ腰の頂部にあったと思われる雲珠に向かい連結し、そこから二又に分かれ、尻尾の下に開けられた直径3.3cmの孔の上部で合流する。幅0.8cm長さ２cmの粘土紐が左右２つずつ垂れるように貼り付け、その先に胸繋についていたものと同じ鈴がついている。足は、直径10cm、高さ47.5cmの円筒で、４本ともほぼ同じ高さであり、かかとの部分には、逆Ｖ字に切り取られ、ひずめを表現。全体にハケ目は粗く、ナデ消されていない。⑥大きさ…最大長101.25cm、最大高102.5cm、最大幅28cm

◎馬形埴輪Ｂ（北側44）

①胎土…中粒②焼成…極良③色調…橙④残存…足のつけね、腰の一部を欠く。⑤特徴…頭部は、粘土紐を巻き上げて作った口先で直径約6.5cmの円筒を本体の頸部に取り付け、その両側面に粘土板を貼り付けて形成。顎の部分には、５×3.5cmのいびつな楕円形の孔があけられている。顔の正面には、口先から３cmのところに復元径で約１cmの鼻孔が２つあいている。顔のわきには、3.3cmの線刻がなされ、口を表現。目は馬形埴輪Ａよりややひらいた木の葉形だが、その上下を盛り上げ、丁寧にナデることにより、かなり写実的に表現されている。耳は頭部を円形にくりぬき、そこに粘土板を巻いた筒を貼り付け、ていねいにナデて微妙なラインを表現している。轡部分の鏡板は、素環で、幅１cmの粘土紐を環状にして表現。引手は



43
馬Ａ

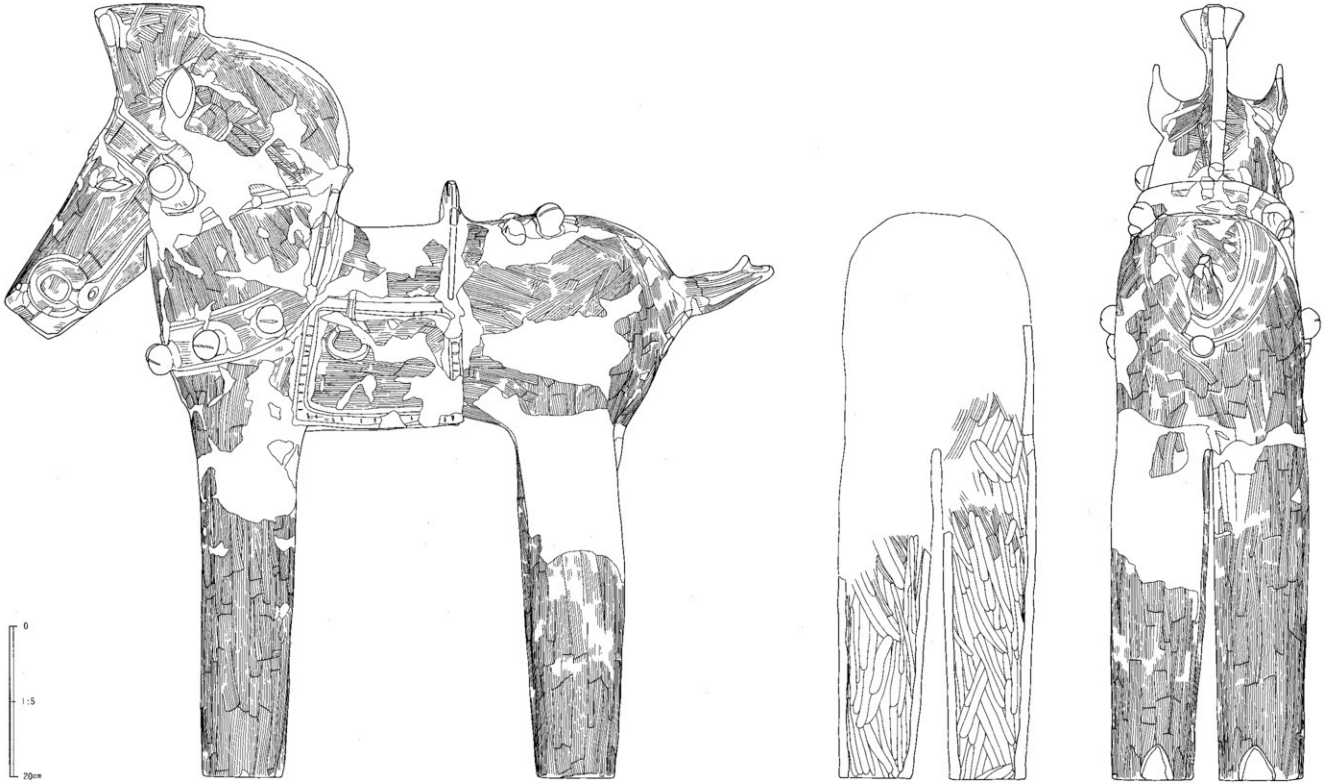
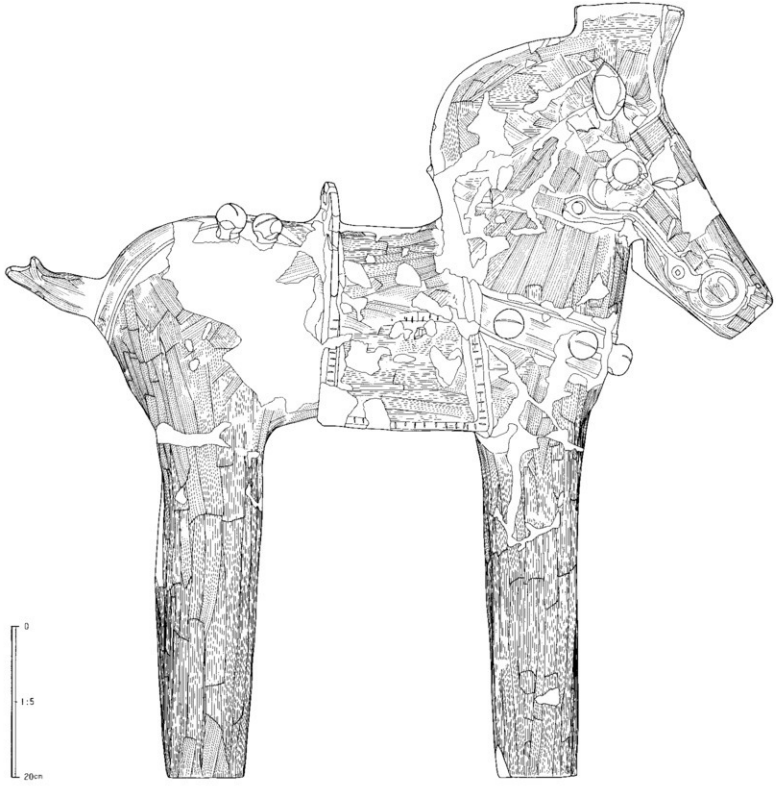


Fig. 25 B区形象埴輪実測図 (9)



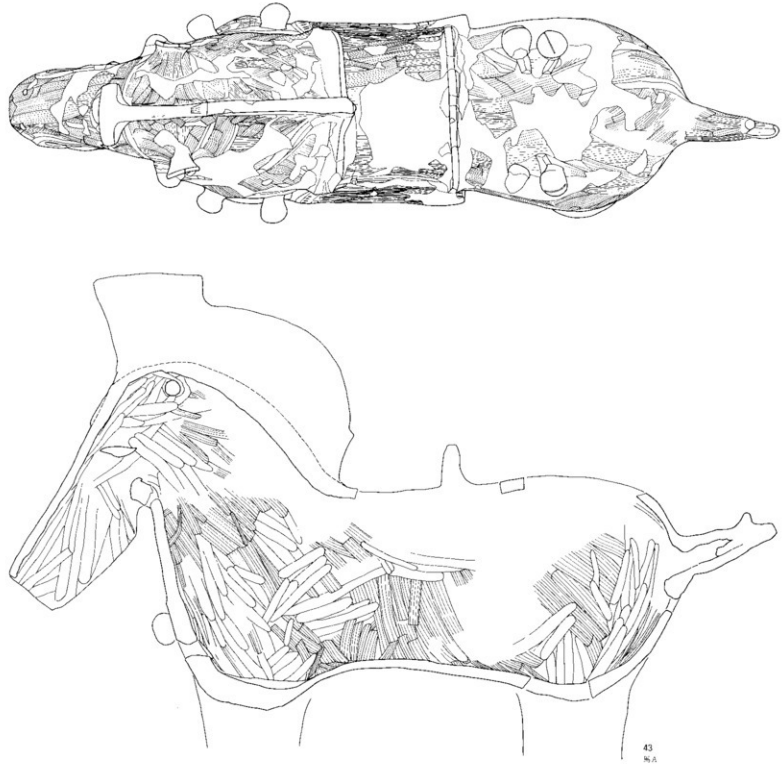


Fig. 26　B区形象埴輪実測図　(10)

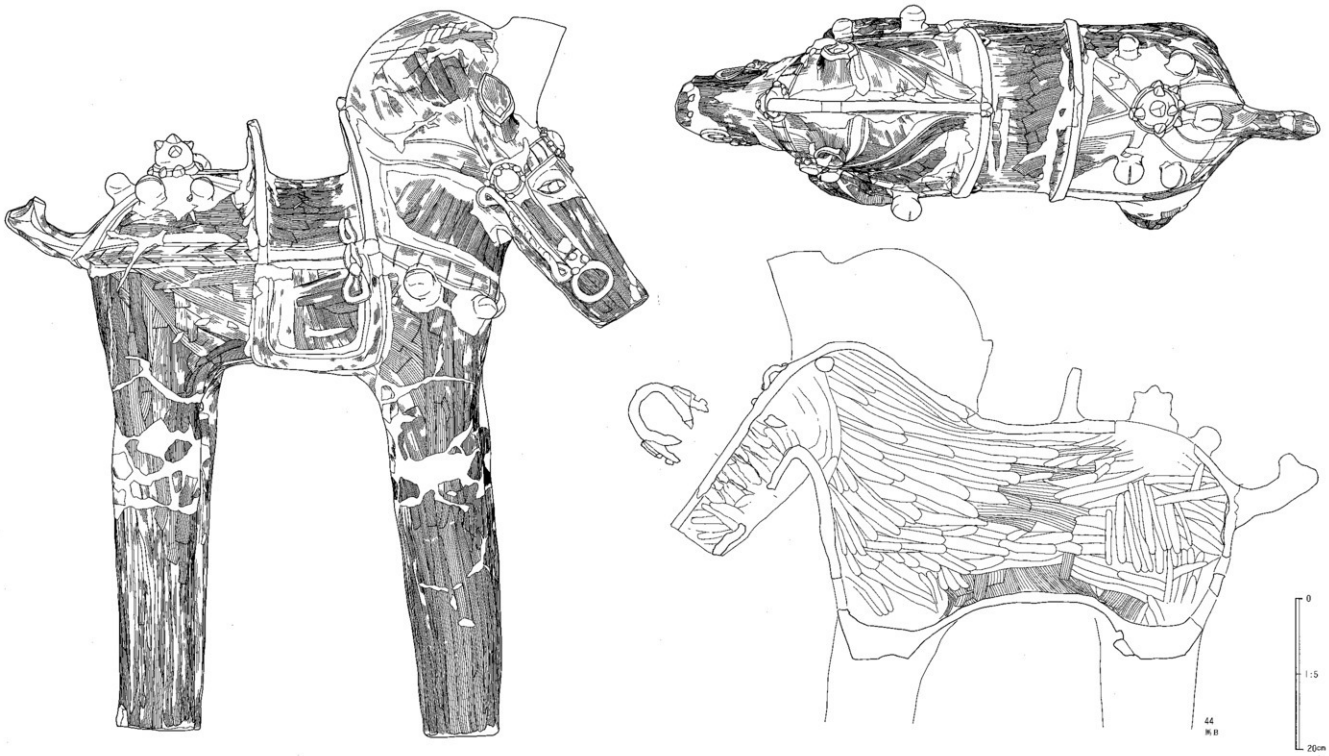


Fig. 27　B区形象埴輪実測図　(11)

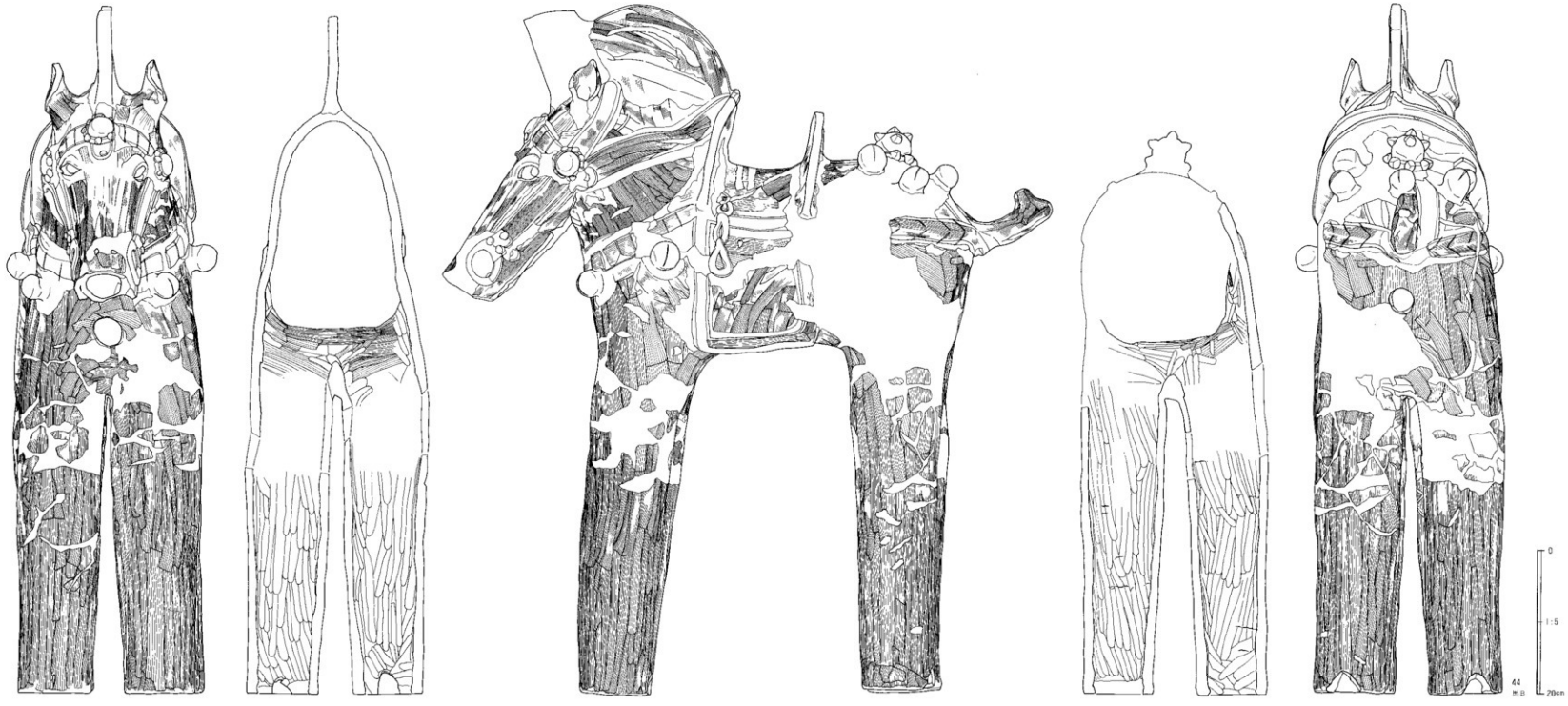


Fig. 28　B区形象埴輪実測図　(12)

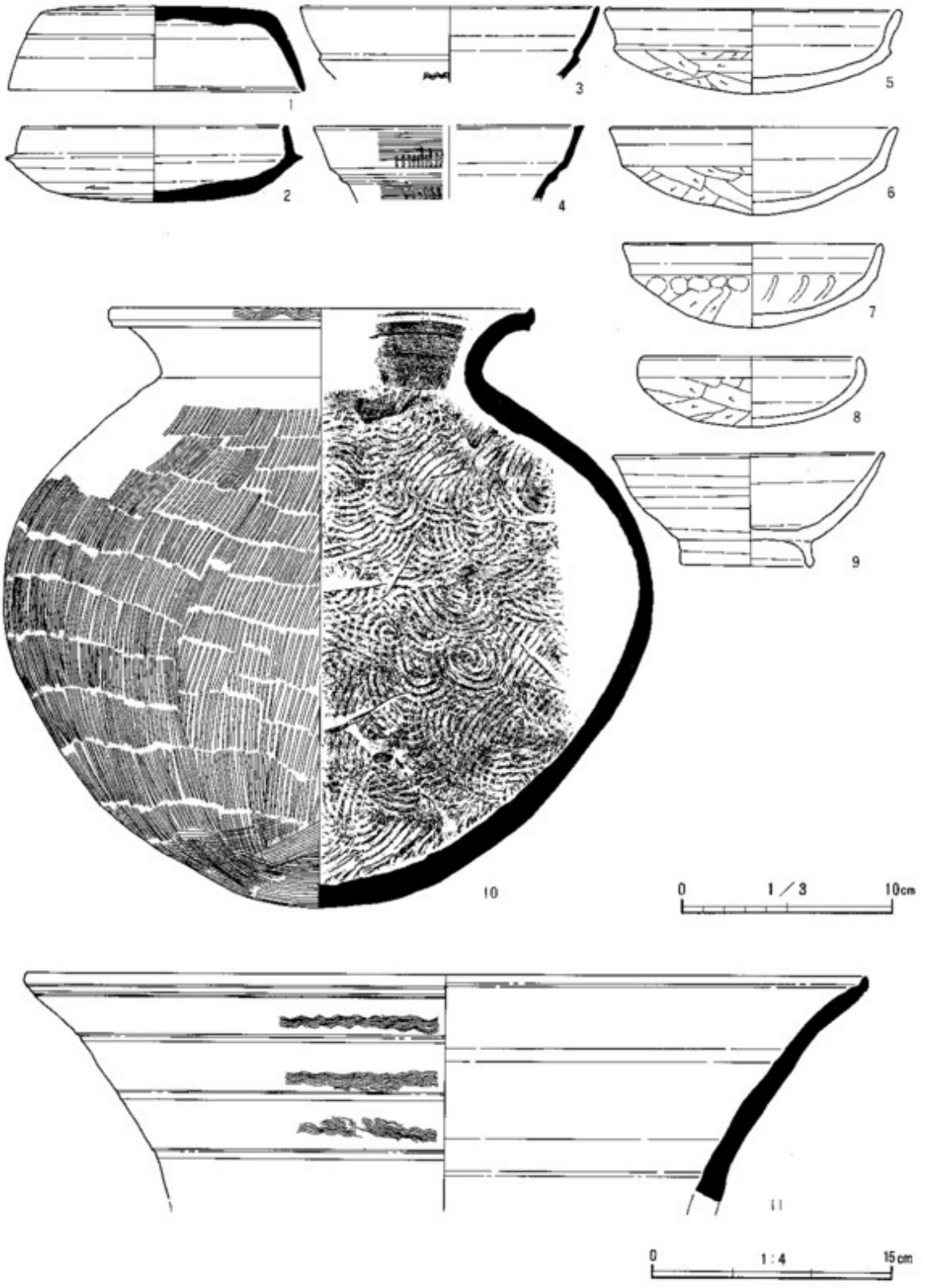


Fig. 29 B区土器実測図

両端を環状にした幅1cm、長さ17cmの粘土紐を貼り付けている。手綱の表現はない。たてがみは、孤状の粘土板を貼り付けている。結び飾りは欠けている。面繋は約2.5cmの粘土帯を貼り付けて表現。その構造は、鏡板からでて目の下、耳の下を通り、たてがみに至るもの、引手の体側の環からでて目の上、額を通り、反対の引手に至るもの、同じく引手の体部側からでて頸部をへて前輪とたてがみの接点で左右からきた帯が合流するやや太めの帯からなる。鏡板との接点には一辺2.5cmの正方形で、直径1cm前後のボタン状粘土が3個ついた辻金具が左右にある。耳の下の3つの帯の連接には、1cm前後のボタン状粘土を8個まわりにつけた直径4.5cmの飾りが左右につく。額の帯の中心にも同じ飾りがつき、そこから2.5cmの隅丸方形で真ん中にボタン状粘土のついた粘土板がつく。額を通る帯のみ1.8cm間隔で線刻がされている。胸繋は幅2.5cmの粘土帯を貼り付け、短軸方向にそって線刻がなされ、前輪と脚部の接合部から胸を通り反対側の前輪に至っている。胸繋の下には直径3.8cmの鈴が左右2個ずつ貼り付けてある。また、胸繋の下正面には直径4cmの円形の孔があけられている。鞍は前輪、後輪ともにU字形の粘土板を本体に貼り付けて形成される。前輪とたてがみの接合部には、1cmほどの突起がつく。鐙は環状にした幅1cmの粘土紐が3つ連なるようにして貼り付けてある。上の2個が兵庫鎖、下のやや大きい環が環鐙を表現。障泥は腹部に17×3cmの長方形の粘土板をつけ、その縁にそって正方形に幅2cmの粘土帯を貼り付けている。尻尾は中実の棒状粘土を貼り付けている。その端部上には高さ2cmの突起がつく。尻繋は幅3cmの粘土帯を貼り付けて表現され、後輪と障泥の接点からでて、尻尾に至る。綾杉文が線刻される。腰の頂部には×状に帯が貼り付けられ、その交点に直径7cmの雲珠がつく。雲珠には11個の突起がつく。後輪からでて尻尾のわきの尻繋には、雲珠のわきの左右に2個ずつ、後ろに1個の鈴がつく。鈴は胸繋につくものと同じものである。尻尾の下3.5cmのところに直径3.5cmの円形の孔があけられる。足は直径9.5cm、高さ約45cmの円筒で、4本ともほぼ同じ大きさ。かかとの部分には逆V字に切り取られたひずめの表現がある。後足のつけねには、左右が1cm、中央が2.5cmのいびつな粘土塊が貼り付けられており、雄の生殖器の表現と思われる。

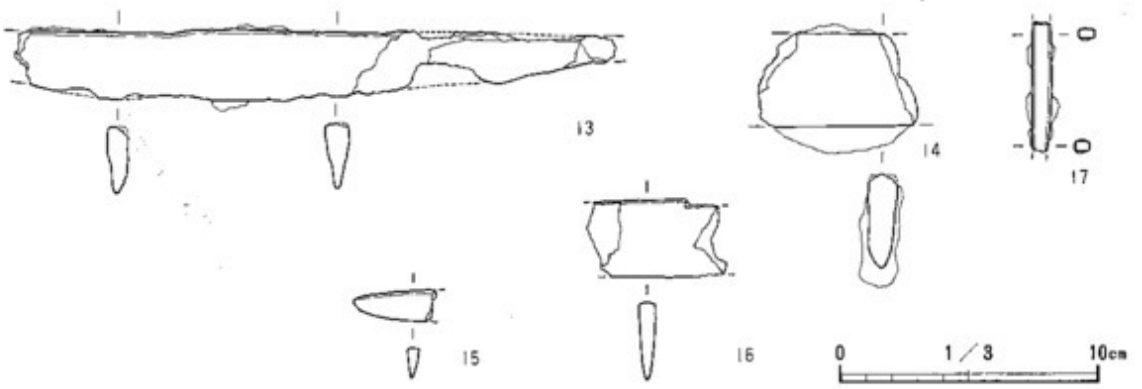


Fig. 30　B区鉄器実測図

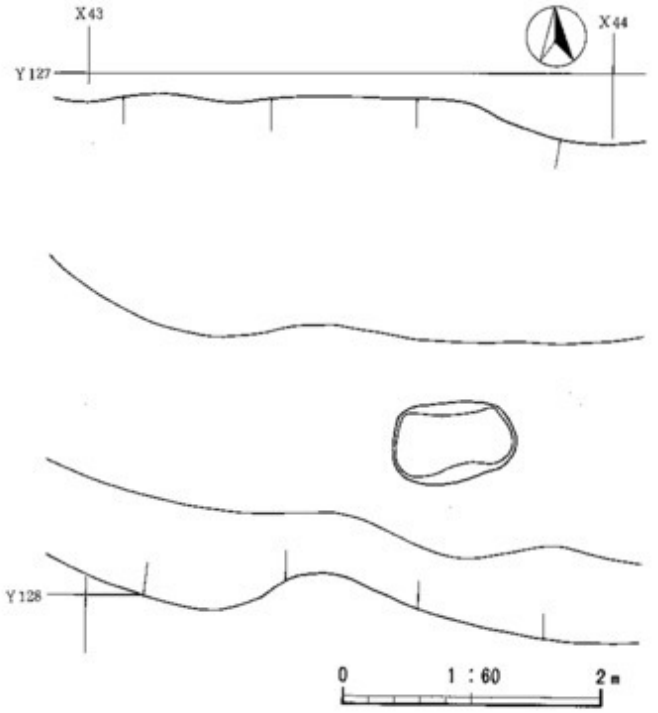


Fig. 31　B区土坑

外面のハケは、足や胴体を除き、全体的にナデられているが、あまり丁寧ではなく、ハケが残る部分が多い。また、摩耗で分かりにくいが、面・胸・尻繋の縁部にそって、赤色塗彩が確認できる。⑥大きさ…最大長85.5cm、最大高95cm、最大幅28.8cm

盾形埴輪は最低２個体確認している。ともに類似した形状で、梯子状文様、鋸歯文の線刻を伴う。鞆形埴輪は最低３個体確認している。作り方は基本的には共通しており、筒状の本体を曲げて２方向に積み上げ片方を閉塞し、もう片方に板状粘土を差し込み６の字状にし、鞆部上部に斜め上方より径３cm程の孔を穿つ。大刀形埴輪は最低３個体確認している。いずれも玉纏大刀を表現しているが、細部の表現が若干異なっている。靫形埴輪は最低４個体確認している。いずれも粘土紐に逆Ｖ字状に刻みを入れて三角形逆刺鏃を表現しており、裏側には両側と中央に断面三角形の粘土紐を貼る。翼部には鋸歯文を施すものと１本の斜めの線刻を施すものに分類できる。また隣接する小二子古墳からは斜平行線の線刻を施したものが出土している。

c．墳丘・周堀部出土土器（Fig. 29、ＰＬ．17）

墳丘出土土器は、須恵器大甕が２個体、調査区全面から破片で出土している。墳頂部において祭祀行為がなされていたと推定される。そのうち１個体が復原できた（11）。口縁径は52.8cmである。石室左前面からは昨年度ＴＫ43伴行期に比定される須恵器杯身が出土している。また同じく昨年度出土している小ぶりの甕の破片も石室カクラン層からまとまって検出された。カクラン

層からは、須恵器の杯蓋、甕、高杯と思われる破片が検出された。杯蓋と接合する破片は周堀からも出土している。杯蓋もＴＫ43併行期に比定できる。周堀内からは、土師器の杯が４点、高台椀１点が検出された。周堀北東部からは土師器の杯が３個体まとまって出土した（５、６、７）。いずれも６世紀後半代の時期に比定でき、古墳の築造年代に近接するものと思われる。そのほかの２点は７世紀後半以降の時期と考えられる。

d．副葬品（Fig. 30、ＰＬ．17）

主体部が壊されていたため、副葬品はほとんど検出されなかった。主体部の土はフルイがけを行ったが、埴輪片や鉄片がわずかに検出されたにすぎない。石室カクラン層の中から直刀片が４点、石室床面から鉄鏃片１点を検出した。いずれも非常に残りが悪い。取り出された玉石の検出された、周堀や墳丘の土についてもフルイがけを実施したが、副葬品は検出しなかった。

3　C区　排水管付設　（Fig. 2、ＰＬ．1）

縄文時代は全面調査を実施した。その結果、縄文土器片25点、石器８点を検出した。遺構は検出しなかった。緊急を要したため旧石器時代の調査は、昨年度までに検出された旧石器の範囲を確認するために、長さ４ｍのトレンチ２本を入れて調査を実施した。遺物は、縄文土器、石器がわずかに、またＡＴ下層より安山岩礫１点を検出した。黒曜石の石器は検出しなかった。

4　D区　さくら草の湿原

(1)　住居址

Ｈ－１号住居址（Fig. 34・49・59、ＰＬ．６・８・24）

（位置） X137・138－Y76・77G **（形状）** 長方形と推定される。**（規模）** 東西（4.06）×南北（2.44）ｍ。確認面からの壁高34cm。**（面積）** （6.26）㎡ **（方位）** Ｎ－10°－W **（覆土）** Hr－ＦＰ、As－Ｃ、ローム土の混入率の違いにより２層に大別できる。**（床面）** ほぼ平坦であり、あまり固くない。**（炉址）** 地床炉を１ケ所検出。長径90×短径63×深さ10cmの規模。**（遺物）** 遺物は総数142点。赤井戸式の土器は１点破片で出土。このうち４個体を図示した。**（備考）** 古墳時代中期。南側は調査区域外のため調査できず。

Ｈ－２号住居址（Fig. 34、ＰＬ．６）

（位置） X136・137－Y76・77G **（形状）** 調査範囲が少ないため不明。**（規模）** 東西（2.92）×南北（1.46）ｍ。確認面からの壁高19cm。**（面積）** （3.12）㎡ **（方位）** Ｎ－16°－E **（覆土）** As－Ｃ、ローム土の混入率の違いにより２層に大別できる。**（床面）** あまり固くない。**（遺物）**

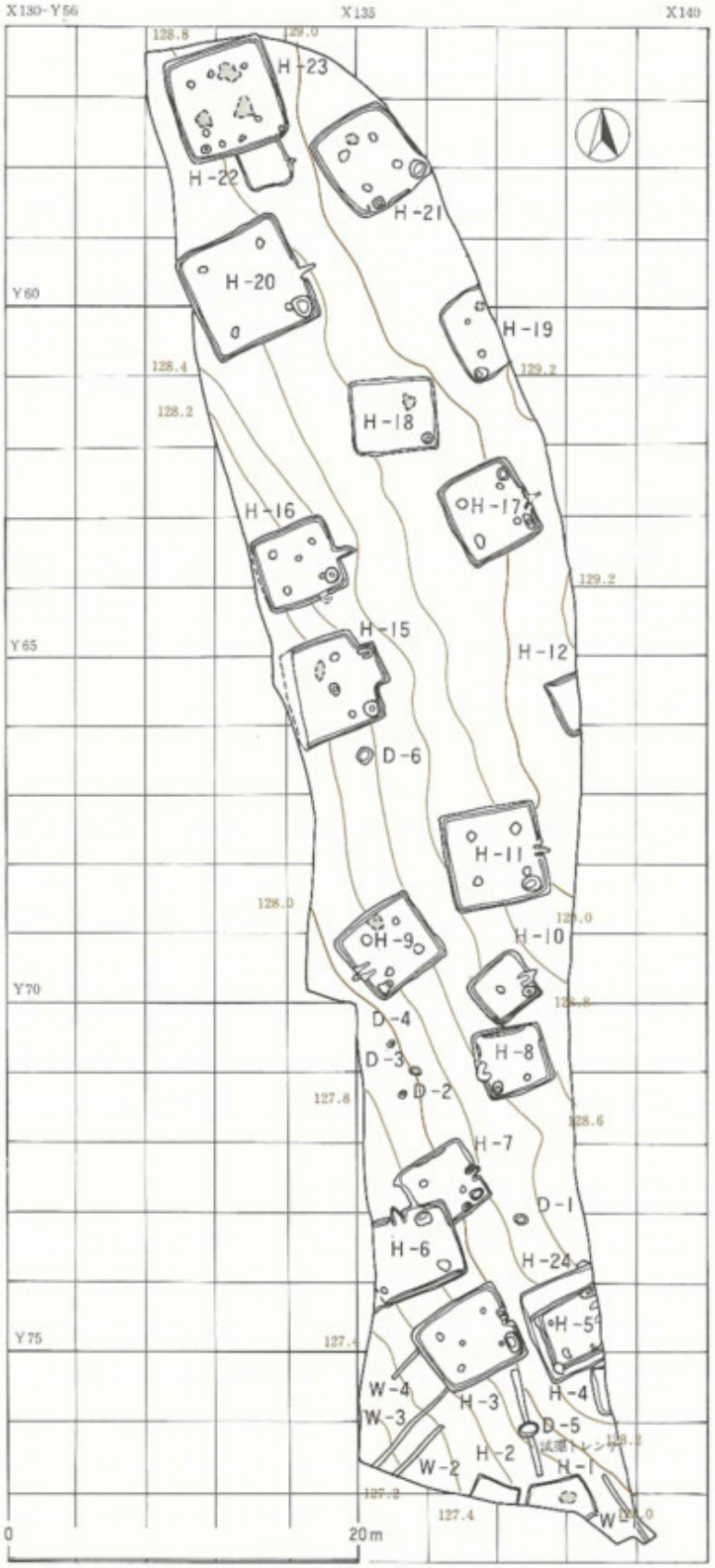

X130-Y56
X135
X140
Y60
Y65
Y70
Y75
H-23
H-22
H-21
H-20
H-19
H-18
H-17
H-16
H-15
H-12
D-6
H-11
H-10
H-9
D-4
D-3
D-2
H-8
H-7
D-1
H-6
H-24
H-5
H-4
W-4
W-3
H-3
D-5
H-2
W-2
H-1
128.8
129.0
128.4
129.2
128.2
129.2
128.0
129.0
128.8
127.8
128.6
127.4
127.2
127.4
0
20m

Fig. 32　D区全体図

検出されず。（**備考**）時代不明。南側は調査区域外のため調査できず。

H－3号住居址（Fig. 35・49、PL. 6・18）

（**位置**）X135～137－Y73～75G（**重複**）W－3とW－4に切られる。（**形状**）正方形（**規模**）長軸5.66×短軸4.86m。確認面からの壁高81cm。（**面積**）24.96㎡（**方位**）N－60°－W（**覆土**）4層に大別でき、As－C、ローム土等の混入度により8層に細分できる。（**床面**）ほぼ全面に堅緻面が存在した。（**竈址**）東壁中央部に位置。主軸方向はN－73°－Eで推定全長135cm、幅107cm。（**柱穴**）6個検出した。P_5が貯蔵穴。（**遺物**）総数995点の遺物が出土。このうち1個体図示した。（**備考**）古墳時代後期。

H－4号住居址（Fig. 36、PL. 6）

（**位置**）X138－Y75G（**形状**）調査範囲が少ないため不明。（**規模**）東西（0.74）×南北2.78m。確認面からの壁高30cm。（**面積**）（1.73）㎡（**方位**）N－86°－W（**覆土**）2層に大別でき、As－C、ローム土等の混入度により3層に細分できる。（**床面**）あまり固くない。（**遺物**）総数82点の遺物が出土。（**備考**）時代不明。

H－5号住居址（Fig. 36・49、PL. 6・18）

（**位置**）X137・138－Y74・75G（**重複**）H－24を切る。（**形状**）正方形と推定される。（**規模**）東西（4.14）×南北3.64m。確認面からの壁高89cm。（**面積**）（12.45）㎡（**方位**）N－63°－E（**覆土**）As－C・Hr－FPの混入率の違いにより、4層に大別できる。4層は竈の粘土を主体とする。（**床面**）ほぼ平坦であり、堅緻面が広がる。（**竈址**）東壁中央南寄りに位置。主体部は調査区域外のため不明。主軸方向は推定N－71°－Eで、調査部分は全長72cm、幅150cm。構築材に粘土を用いる。（**柱穴**）竈の北隣に貯蔵穴1個検出。（**周溝**）調査範囲では全周。（**遺物**）総数1309点の遺物が出土した。このうち2個体図示した。（**備考**）古墳時代後期。

H－6号住居址（Fig. 37・49・59、PL. 7・18・24）

（**位置**）X135・136－Y72～74G（**重複**）H－7を切る。（**形状**）長方形（**規模**）長軸（5.98）×短軸5.10m。確認面からの壁高88cm。（**面積**）（23.96）㎡（**方位**）N－73°－E（**覆土**）4層に大別できる。（**床面**）ほぼ平坦であり、全面にわたって極めて堅緻な床面が広がる。（**竈址**）北壁中央に位置。主軸方向はN－19°－Wで、推定全長120cm、推定幅105cmを測る。構築材に粘土を用いる。右袖に土器、左袖に石を使用。支柱には本体に石を用い、その上に土器を使用。（**柱穴**）5個。貯蔵穴はP_5である。（**周溝**）東壁を除き調査範囲ではほぼ全周する。（**遺物**）総数1414点の遺物が出土。底部に木葉痕を残す手捏土器1点、土玉1点、土製管玉1点を含め、図示した遺物は7個体である。（**備考**）古墳時代後期。

H－7号住居址（Fig. 38・49・50・59、PL. 7・18・19・24）

（位置）X135・136－Y71・72G（重複）H－6に切られる。（形状）正方形（規模）長軸［4.34］×短軸［4.16］m。確認面からの壁高70cm。（面積）［14.34］㎡（方位）N－58°－E（覆土）3層に大別できる。2層に粘土、灰、炭化材を含む。（床面）ほぼ平坦で、堅緻面が広がる。（竈址）東壁中央に位置。主軸方向はN－55°－Eで、推定全長90cm、推定幅87cmを測る。構築材に粘土を用いる。袖に土器を使用。（柱穴）主柱穴4個のうち2個、貯蔵穴2個を確認。（周溝）東壁を除き確認。（遺物）総数713点の遺物が出土した。図示したものは土玉1点を含め11個体。（備考）古墳時代後期。

H－8号住居址（Fig. 38・50・59、PL. 7・19・24）

（位置）X136・137－Y70・71G（形状）正方形（規模）長軸4.12×短軸4.06m。確認面からの壁高88cm。（面積）15.54㎡（方位）N－74°－E（覆土）3層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、全面に堅緻面が広がる。（竈址）東壁中央に位置。主軸方向はN－74°－Eで、推定全長116cm、推定幅108cmを測る。構築材に粘土を用いる。袖に土器を使用。（柱穴）主柱穴1個、貯蔵穴1個が確認できた。（周溝）ほぼ全周する。（遺物）総数771点の遺物が出土。5個体の土器を図示した。（備考）古墳時代後期。

H－9号住居址（Fig. 39・50・51・59、PL. 7・19・24）

（位置）X134～136－Y68・69G（形状）正方形（規模）長軸5.06×短軸4.72m。確認面からの壁高59cm。（面積）22.29㎡（方位）N－54°－W（覆土）3層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、堅緻面が広がる。（柱穴）5個。主柱穴4個と貯蔵穴1個を確認。（竈址）西壁中央に位置。主軸方向はN－52°－Eで、推定全長112cm、推定幅93cmを測る。構築材に粘土を用いる。袖に土器を使用。（周溝）全周。（遺物）総数1515点の遺物が出土した。一括遺物の中にはいわゆる模倣杯は含まれていない。図示したものは土製勾玉を含めて8個体である。（備考）古墳時代中期。

H－10号住居址（Fig. 34・51・59、PL. 7・8・19・24）

（位置）X136・137－Y69・70G（形状）正方形（規模）長軸3.66×短軸3.20m。確認面からの壁高73cm。（面積）10.64㎡（方位）N－53°－E（覆土）Hr－FP、As－Cの混入率の違いにより3層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、堅緻面が広がる。（竈址）東壁中央に位置。主軸方向はN－58°－Eで、推定全長122cm、推定幅72cmを測る。構築材に粘土を用いる。袖に土器を使用。（柱穴）住居址のほぼ中央部に1個を確認。（周溝）竈周辺を除き全周。（遺物）総数2131点の遺物が出土した。このうち13個体を図示した。そのなかには須恵器の甕や杯蓋、手捏土器4点、剣形の石製模造品3点がある。（備考）古墳時代後期。

H－11号住居址（Fig. 40・52・53・59、PL. 8・20・24）

（位置）X136・137－Y67・68G（形状）正方形（規模）一辺5.68m。確認面からの壁高74cm。（面積）31.17㎡（方位）N－78°－E（覆土）Hr－FP、As－Cの混入率の違いにより3層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、堅緻面が広がる。（竈址）東壁中央に位置。主軸方向はN－78°－Eで、推定全長148cm、推定幅120cmを測る。構築材に粘土を用いる。袖に土器を使用。（柱穴）主柱穴4個と貯蔵穴1個を確認。（周溝）竈周辺を除き全周。（遺物）総数3157点の遺物が出土した。このうち15個体を図示した。（備考）古墳時代後期。

H－12号住居址（Fig. 39・53、PL. 8）

（位置）X137・138－Y65・66G（形状）調査範囲が少ないため不明。（規模）東西（2.12）×南北3.44m。確認面からの壁高66cm。（面積）（4.77）㎡（方位）推定N－70°－E（覆土）ロームブロックの混入率の違いにより3層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、あまり固くない。（周溝）調査範囲では北西コーナー部を除き確認。（遺物）総数176点の遺物が出土した。（備考）時代不明。

H－13号住居址（欠番）

H－14号住居址（欠番）

H－15号住居址（Fig. 42・53・59、PL. 8・20・21・24）

（位置）X133～135－Y64～66G（形状）正方形と推定される。東壁に張り出し部をもつ。（規模）東西（6.00）×南北（5.80）m。張り出し部長軸2.62×短軸0.96m。確認面からの壁高53cm。（面積）（29.27）㎡（方位）N－68°－E（覆土）Hr－FP、As－Cの混入率の違いにより3層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、あまり固くない。（竈址）東壁張り出し部北側に位置。馬蹄形に粘土を巡らせて構築する。主軸方向はN－77°－Eで、推定全長60cm、推定幅36cmを測る。構築材に粘土を用いる。（柱穴）柱穴2個と貯蔵穴1個を確認。（周溝）調査範囲では竈部分を除き全周。（遺物）総数1095点の遺物が出土した。このうち石製模造品1点を含め5個体を図示した。（備考）古墳時代中期。

H－16号住居址（Fig. 41・53、PL. 8・9・21）

（位置）X133・134－Y63・64G（形状）正方形（規模）長軸4.78×短軸4.56m。確認面からの壁高72cm。（面積）20.58㎡（方位）N－68°－E（覆土）Hr－FP、As－Cの混入率の違いにより2層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、堅緻面が広がる。（竈址）東壁中央に位置。主軸方向はN－77°－Eで、推定全長138cm、推定幅81cmを測る。構築材に粘土を用いる。袖に土器を使用。（柱穴）主柱穴5個と貯蔵穴2個を確認。貯蔵穴1個は南壁の横穴。（周溝）竈部

分を除き全周。（遺物）総数1225点の遺物が出土した。このうち１個体を図示した。（備考）古墳時代後期。

H－17号住居址（Fig. 44・54・59、PL. 9・21・24）

（位置）X136・137－Y62・63G（形状）長方形（規模）長軸5.12×短軸4.72m。確認面からの壁高73cm。（面積）22.82m²（方位）N－65°－E（覆土）Hr－FP、As－Cの混入率の違いにより３層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、堅緻面が広がる。（竈址）東壁中央に位置。主軸方向はN－66°－Eで、推定全長128cm、推定幅94cmを測る。構築材に粘土を用いる。袖に土器を使用。（柱穴）主柱穴４個と貯蔵穴２個を確認。（周溝）竈部分を除き全周。（遺物）総数1897点の遺物が出土した。滑石製臼玉１点のほか11個体を図示した。須恵器高台付椀は流入したものと思われる。（備考）古墳時代後期。

H－18号住居址（Fig. 45・54・55・59、PL. 9・21・22・24）

（位置）X134～136－Y61・62G（形状）長方形（規模）長軸4.88×短軸4.48m。確認面からの壁高30cm。（面積）20.34m²（方位）N－85°－E（覆土）Hr－FP、As－Cの混入率の違いにより３層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、固くない。（炉址）１個検出。長径100×短径52×深さ10cmの地床炉。（柱穴）１個を確認。（遺物）総数952点の遺物が出土した。このうち６個体を図示した。（備考）古墳時代中期。

H－19号住居址（Fig. 45・55、PL. 9・22）

（位置）X136・137－Y59～61G（形状）調査範囲が少ないため不明。（規模）東西（3.34）×南北4.96m。確認面からの壁高42cm。（面積）（11.97）m²（方位）N－55°－E（覆土）Hr－FP、As－Cの混入率の違いにより３層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、中央部に堅緻面が広がる。（炉址）１個検出。長径50×短径46×深さ６cmの地床炉。土器を使用。（柱穴）３個確認。（遺物）総数179点の遺物が出土した。樽式土器片65点、赤井戸式土器片10点、十王台式土器１点を検出。このうち３個体を図示した。なおＳ字甕は検出されていない。（備考）古墳時代前期。

H－20号住居址（Fig. 43・56・59、PL. 10・22・24）

（位置）X132～134－Y58～60G（形状）正方形（規模）長軸6.66×短軸6.60m。確認面からの壁高80cm。（面積）42.72m²（方位）N－65°－E（覆土）Hr－FP、As－Cの混入率の違いにより２層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、堅緻面が広がる。（竈址）東壁中央に位置。主軸方向はN－65°－Eで、推定全長120cm、推定幅90cmを測る。構築材に粘土を用いる。袖に土器を使用。（柱穴）主柱穴４個と貯蔵穴１個を確認。（周溝）竈部分を除き全周。（遺物）総

数2761点の遺物が出土した。樽式土器片25点、赤井戸式土器片24点、須恵器片56点を検出。このうち砥石１点を含め10個体を図示した。（備考）古墳時代後期。

H－21号住居址（Fig. 46・57・59・60、PL. 10・22～24）

（位置）X134～136－Y57・58G（形状）長方形（規模）長軸5.80×短軸5.24m。確認面からの壁高83cm。（面積）27.61㎡（方位）N－58°－E（覆土）Hr－FP、As－Cの混入率の違いにより２層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、堅緻面が広がる。（炉址）１個検出。長径76×短径52×深さ９cmの地床炉。（柱穴）主柱穴４個と貯蔵穴２個を確認。（遺物）総数609点の遺物が出土した。石田川式土器片19点、樽式土器片25点、赤井戸式土器片19点を検出。このうち７個体を図示した。（備考）古墳時代前期。

H－22号住居址（Fig. 46・57、PL. 10・23）

（位置）X133・134－Y57・58G（重複）H－23を切る。（形状）正方形と推定される（規模）東西2.74×南北（2.70）m。確認面からの壁高54cm。（面積）（6.50）㎡（方位）N－66°－E（覆土）Hr－FP、As－Cの混入率の違いにより３層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、堅緻面が広がる。（竈址）東壁中央に位置。主軸方向はN－67°－Eで、推定全長102cm、推定幅32cmを測る。構築材に粘土を用いる。袖に土器を使用。（遺物）総数269点の遺物が出土した。このうち３個体を図示した。（備考）古墳時代後期。

H－23号住居址（Fig. 47・57、PL. 10・23）

（位置）X132・133－Y56・57G（重複）H－22に切られる。（形状）正方形（規模）長軸6.34×短軸（6.16）m。確認面からの壁高66cm。（面積）37.21㎡（方位）N－73°－E（覆土）Hr－FP、As－Cの混入率の違いにより３層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、炭化物が多くあまり固くない。焼土を５個検出。形は不整形。（垂木の間隔）北壁で約30cmを計る。（柱穴）主柱穴４個、柱穴２個、貯蔵穴１個を確認。（遺物）総数1791点の遺物が出土した。石田川式土器片62点、樽式土器片14点を検出。このうち５個体を図示した。６世紀前半の須恵器３点は流入したものと思われる。（備考）古墳時代前期。

H－24号住居址（Fig. 36・58、PL. 6・23・24）

（位置）X137・138－Y73～75G（重複）H－５に切られる。（形状）不明（規模）東西（5.14）×南北5.58m。確認面からの壁高69cm。（面積）（22.07）㎡（方位）N－67°－E（覆土）Hr－FP、As－Cの混入率の違いにより３層に大別できる。（床面）ほぼ平坦であり、あまり固くない。（柱穴）１個確認。（遺物）総数58点の遺物が出土した。高杯が大量に重なり合って出土。このうち10個体を図示した。H－５号住居址で取り上げた遺物がある。（備考）古墳時代後期。

(2) 溝状遺構　Tab. 5参照。5条を確認する。

(3) 土坑　Tab. 7参照。6基を確認する。（Fig. 48・59）

(4) グリッド出土の遺物（Fig. 59、PL. 24）

淡色黒ボク土の上面にて遺構確認中に確認された縄文時代遺物の散布が少ないため、包含層としての特別な調査は実施しなかった。縄文時代早期から前期諸磯b式土器片や打製石斧を検出した。

5　E区　さくら草の湿原北側フェンス

H－1号住居址（Fig. 33、PL. 10）

（位置） X144・145－Y39G **（形状）** 不明 **（規模）** 東西（4.50）×南北（1.00）m。**（面積）** （4.14）㎡ **（遺物）** 総数5点の遺物が出土した。**（備考）** 古墳時代か。

焼土（Fig. 33）

（位置） X147－Y40G **（形状）** 不明 **（規模）** 東西（0.45）×南北（0.40）×高さ0.17m。

（備考） 時代不明。

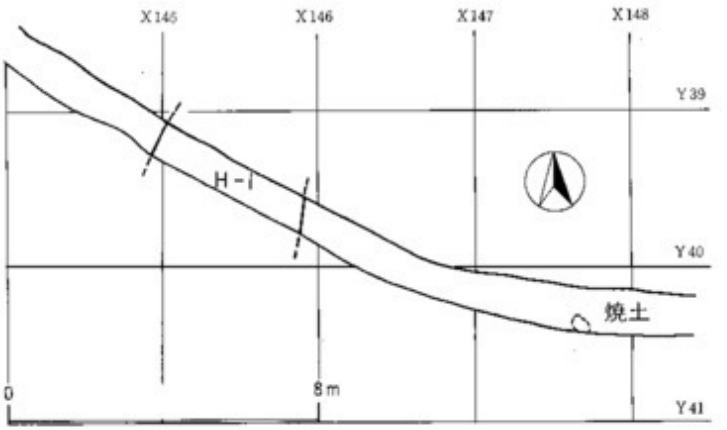


Fig. 33　E区全体図

Ⅵ　成果と問題点

1　旧石器時代

今年度はC区の排水管付設の場所のみであった。4メートルのトレンチ2本のみであったが、一昨年、昨年の石器の分布範囲が東方向に広がるかを確認するために設定した。その結果、黒曜石は検出されず、黒曜石の出土範囲は昨年度までの調査範囲での推定範囲の可能性が強くなった。

2　縄文時代

今年度の調査では縄文時代の住居址については確認できなかった。遺物については遺構を伴わない状態で多少検出されている。

A区は、内堀遺跡群Ⅷで調査を実施した北東方向にあたるが、遺構は土坑1基のみの検出で、グリッド単位での遺物の出土数も少なかった。貝殻条痕文をもつ縄文時代早期末から0段多条の縄文を施す前期初頭の遺物が中心を占め、若干ではあるが前期後半の諸磯b式の土器が検出された。しかし、小片で、時期は不明なものが多くある。

B区は、内堀遺跡群Ⅷで調査を実施した東にあたり、内堀4号墳が造られた場所である。古墳の覆土の中に縄文土器が含まれていた。縄文時代早期末から前期初頭を中心に後期堀之内式土器までの範囲である。古墳を造る際に混入したものである。また、周堀の南側の底面から土坑が1基（Fig. 31）検出された。遺物はなかったので、詳細な時期は不明である。A区、B区ともに早期末から前期初頭を中心とする土器群が主体となっており、内堀遺跡群Ⅷで調査された北東方向にもその分布が広がっていることが確認された。

C区は、内堀遺跡群Ⅷで調査を実施した南東方向にあたるが、遺物の出土のみで、遺構は検出できなかった。縄文時代早期の田戸上層土器から前期諸磯b式土器までの範囲が確認されたが、量的には諸磯b式が主体を占め、その分布の広がりが確認された。

D区は、古墳時代の住居址の調査が主体となったが、縄文土器を覆土に含む住居址もあり、表採の遺物の中にも縄文土器や石器が含まれていた。縄文時代の遺構は検出できなかった。

遺物はいずれも細片のため、時代の確認できたものは後期の加曾利B1式の土器1点だけである。内堀遺跡群Ⅶにおいて諸磯期の住居が検出された南に当たるのだが、古墳時代の住居の密度が高いためか遺物の量は少なかった。

3　古墳時代

（1）　内堀４号墳

昭和62年、平成８年の調査と今年度の調査の結果、兆域27ｍの２段築成の円墳であることが判明した。石室は明治時代頃に石を抜き取られたため、壊滅的な被害を受けていた。床面に残された根石の設置痕から袖無型横穴式石室であることが推定される。北側に所在する国指定史跡小二子古墳よりも石の抜き取りは徹底していた。

円筒埴輪、人物埴輪と馬形埴輪が古墳を造った当時の原位置から検出でき、埴輪の設置位置を一部確定できたことは、意義深いものがある。円筒埴輪は、小二子古墳に類似する２条突帯であるが、その検出された量が少ないことに注意する必要があろう。人物埴輪は、石室の東側の下段平坦面に一列で設置されていた。石室の入り口に近い方から、女性３個体、男性２個体、馬形埴輪２個体、馬形埴輪の前足の墳丘側に男性２個体が設置されていた。

馬形埴輪は２個体とも写実的に表現されている。足の設置されている周辺に集中して出土したために、ほとんど完形に近い状態まで復原できた。西から東に向かって倒れた様子が窺える。２個体の馬の造り方は、基本的には共通しているが、しっぽの造り方が、南側の馬形埴輪は、中が中空になっているのに対し、北側の馬形埴輪は、棒状であるなど、細部の造り方の違いもみられることから、同一人物による製作とは考えにくい。

南側の馬形埴輪の前足の墳丘側には、背中に粘土紐を貼り付け鎌を表現した人物埴輪（人物Ｂ）が設置されている。頭部のみ、基部のすぐ北側にまとまって倒れていた。頭部まで復原できたが、他の人物埴輪に比べるとやや小ぶりである。両腕は短く、左手はやや上に向けている。出土位置から馬飼人の可能性が高い。

北側の馬形埴輪も前足の墳丘側には、背中に粘土紐を貼り付け鎌を表現した人物埴輪（人物Ｃ）が設置されている。残念ながら、基底部から腰部、左腕までしか検出されなかった。出土位置から馬飼人の可能性が高い。本報告書では、馬形埴輪の前足の墳丘側に設置され、背中に鎌を表現していることから、馬飼の性格をもつ人物という意味で馬飼人の名称を使用した。また馬飼人の大きさが他の人物埴輪と比べると明らかに小さく、それぞれの馬と馬飼人で胎土、焼成、色調などが同じことから、製作段階から馬と馬飼人がセットとしてみなされ造られていると考えられる。

器材埴輪はすべてカクラン層や周堀に崩落した状態で検出された。盾は最低２個体、靫は、鏃身表現部からみると、最低４個体であり、造り方は、４個体とも共通している。鞆は、最低３個体であり、造り方は基本的には同じである。大刀は、最低３個体である。家形埴輪や翳形埴輪は検出されていない。

内堀４号墳の築造年代についてであるが、石室前面より出土した須恵器杯身や杯蓋がＴＫ43併行期に比定できることから、６世紀後半と考えられる。近接する小二子古墳との時期差を明確に

見つけることは難しく、埴輪の量や内容の差は、墳形・規模の差によるものとみなされよう。

内堀遺跡群全体で見ると、3号墳、4号墳、6号墳が6世紀後半の円墳と考えられ、散在的にではあるが増加する様相が推測される。しかし、3号墳は試掘調査のみ、6号墳はトレンチ調査であり、今後の調査を待ち、再検討を加えたい。

（2） 住居址

古墳時代の遺構として、D区・さくら草の湿原から古墳時代前期（4世紀）の住居址3軒、中期（5世紀）の住居址4軒、後期（6世紀）の住居址12軒を調査することができた。すでに調査した住居址と合わせると、前期が住居址107軒、中期の住居址が10軒、後期の住居址22軒となった。H－19号住居址は、十王台式系の甕が土師器とともに出土している。しかし、調査範囲が西側半分であり、住居址の全容を調査していないため、その土器組成などは明確にはできない。

住居址の造られた時期は、4世紀後半が、H－19・21・23号住居址になる。5世紀前半がH－1号住居址、5世紀後半が9・15・18・24号住居址となる。H－9号住居址は、いわゆる模倣杯の出現前の時期となる。6世紀の住居址では、H－3・7・8・10・11・16号住居址が鬼高Ⅰ期に、H－5・6・17・20・22号住居址が鬼高Ⅱ期に該当する。6世紀初頭のH－11号住居址は、模倣杯が出始めの時期となる。

竈を造る方向は、東壁10軒・西壁2軒・北壁1軒である。例えば、5世紀末から6世紀前半の住居址において、H－3・7・10・11・15・16号住居址（東壁）、H－8・9号住居址（西壁）というように竈を造る方向が異なる。竈採用の初期段階はその設置位置が定型化されなかったのであろうか。

また、5世紀末のH－15号住居址は、東壁に張り出し部分を造り、その張り出し部分に竈を造っている。竈の近くの住居址の壁は焼けた形跡はない。住居壁から離してU字状に粘土を巻く初期の竈の造り方が確認できる。6世紀初頭のH－10号住居址も同様に住居壁をあまり掘り込まず、馬蹄形に粘土を巻いた竈の造りをしている。

竈の構築は粘土を主体としてなされていた。H－6・9・11・17・20号住居址は土器で袖を補強していた。H－11号住居址の竈の支柱には土器が使用され、土器の内側には石が置かれていた。

竈採用の初期段階におけるこうした様相から、住居壁から離してU字状に粘土を巻く竈の造り方と同時に、形式的に完成された形でも採用されたとみることができよう。竈の造り方の変化を考えるうえでも貴重な調査区となった。

住居址の柱穴は、4本柱が主流をしめる。しかし、H－3・16号住居址は5本、H－10号住居址は1本、H－1・18・22号住居址は無柱穴である。その他の住居址は切り合いや、調査範囲が少ないために柱穴の数は明確ではない。

H－23号住居址は、焼失家屋と思われ、焼けた垂木が検出された。垂木の間隔は、約30cmであり、住居の上屋構造を知るうえで貴重な資料を得られた。

Tab. 3　住居址一覧

号数	規模（m）			主軸方向	竈等			出土遺物等			備考
	東西	南北	深さ		位置	素材	規模(cm)	土師器	須恵器	その他	
1	4.06	(2.44)	0.34	N−10° −W	炉址(地床炉)90×63			坩2			未完掘 5前
2	2.92	(1.46)	0.19	N−16° −E	不明						未完掘 ?
3	5.66	4.86	0.81	N−60° −W	東壁中央	粘土	長135×幅107	杯(TK10)			6前
4	(0.74)	2.74	0.30	N−86° −W	なし						
5	(4.14)	3.64	0.89	N−63° −E	東壁中央南寄り	粘土		模倣杯	杯(MT85〜43)		6中
6	5.98	5.10	0.88	N−73° −E	北壁中央	粘土	長120×幅105	長胴甕	杯(TK43)	手捏1	一部未完掘
								高杯	土玉1	土製管玉1	6中
7	4.34	4.16	0.70	N−58° −E	東壁中央	粘土	長90×幅87	長胴甕		土玉1	未完掘
								甑、模倣杯7			6前
8	4.12	4.06	0.88	N−74° −E	西壁中央	土器芯	長116×幅108	長胴甕、小形甕		手捏1	6前
								模倣杯			
9	5.06	4.72	0.59	N−54° −W	西壁中央	土器芯	長112×幅93	内斜口辺杯			5末
								小形甕		土製勾玉1	
10	3.66	3.20	0.73	N−53° −E	東壁中央	土器芯	長122×幅72	長胴甕、模倣杯	壺・杯蓋	手捏4	6初
								内斜口辺杯	(MT15)	剣形3	
11	5.68	5.68	0.74	N−78° −E	東壁中央	土器芯	長148×幅120	長胴甕、小形甕			6初
								模倣杯、曽瓦		手捏1	
12	(2.12)	3.44	0.66	N−70° −E	不明						未完掘 ?
13	欠番										
14	欠番										
15	6.00	5.80	0.53	N−68° −E	馬蹄状	粘土	長60×幅36	坩、内斜口辺杯		模造品1	5末
16	4.78	4.56	0.72	N−68° −E	東壁中央	土器芯	長138×幅81	広口椀			6前
17	5.12	4.72	0.73	N−65° −E	東壁中央	土器芯	長128×幅94	模倣杯	広底壺	滑石臼玉	6中
								長胴甕			
18	4.88	4.48	0.30	N−85° −E	炉址（100×52）深さ10			坩、甕		手捏1	5後
								高杯			
19	(3.34)	4.96	0.42	N−55° −E	炉址（50×46）深さ6			坩			未完掘
								甕(十王台、樽)			4末
20	6.66	6.60	0.80	N−65° −E	東壁中央	土器芯	長120×幅90	長胴甕、甑	蓋杯、高杯、砥石		6中
								模倣杯	(MT85)		
21	5.80	5.24	0.83	N−58° −E	炉址(76×52) 深さ9			石田川、壺			4後
								器台		紡錘車	
22	2.74	(2.70)	0.54	N−66° −E	東壁中央	土器芯	長102×幅32	小形甕			未完掘
								模倣杯			6中
23	6.34	(6.16)	0.66	N−73° −E	不明			石田川	蓋杯、鉢、甕		未完掘
								甕	(TK47)		4後
24	(5.14)	5.58	0.69	N−67° −E	不明			高杯	把手付椀？		未完掘
								坩、甕			5後

中期後半から後期初頭を中心とした集落としては須恵器の出土量が県内他地域に比較して多い傾向がみられるのも本遺跡の特徴である。今回の調査区で形がわかる須恵器だけでもＴＫ47併行と思われるものが３点、ＭＴ15併行が２点、ＴＫ10併行が１点であり、５世紀末から６世紀初頭の時期に須恵器が多く入ってくる様相が認められる。土師器との共伴関係を詳細に検討する必要はあるが、この集落が須恵器生産集団と深く結びつき、それを他地域にさきがけて集落内に持ち込める背景には、大室古墳群を築造した勢力が関連していたことは想像に難くない。より資料を集積する中で大室古墳群の被葬者の実態を明確にするための１つの切り口となるであろう。

今まで内堀遺跡群では、古墳時代の住居址の検出数は前期が多かったが、今年度の調査区では、中・後期の住居址が15軒検出された。今までの前期を中心とした集落の広がりが丘陵裾部を中心としているのに対し、中・後期の集落の広がりはやや標高の下がった低平地縁辺に移動する様相が確認できた。すなわち調査した範囲で占地をみていくと前期の住居址は標高137.25ｍの「流れ山」の頂上部から今回調査した標高128ｍの平坦地まで広範囲に広がりをみせる。その範囲は東西で200ｍを超える。東側の範囲を広げたことになる。さらに南北も北の沖積地に広がる下縄引Ｉ遺跡の集落と本遺跡の集落は同一の集落になる可能性が高いため、東西と同様200ｍを超える範囲になるものと思われ、更に東に区域が延長されるものと思われる。それに比較して中期や後期の集落の区域は東側に偏った傾向がみられる。しかし、「風のわたる丘【流れ山】」から東に延びる斜面については発掘調査を実施しているが、東に存在するもう一つの「流れ山」である五料山の西斜面や南斜面にも多くの住居址が存在するため、中・後期の住居址は今後その数が増えるものと期待されていた。今年度の調査で、中・後期の住居址が検出されたことで、五料山の西斜面の住居址の状況を一部確認することができた。

Ｄ区の水路を挟んだ西側は、調査期間等の制約があり、また、表土掘削の途中から五料沼の水が湧き出してきたために、平成10年度の調査となった。水路の東側の住居址の検出状況や、西側の土器片の出土状況から住居址の検出が予想される。古墳時代の住居址については、Ｄ区の水路の西側の調査によってより明確になるものと思われる。

また、Ｄ区の南東コーナー部では、最大で数メートルに及ぶ盛土がなされており、五料沼を造る際に盛られたものと思われる。ローム土と褐色土が交互に盛られていた。

参　考　文　献

桑原　昭・園部守央　1988　『内堀遺跡群』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団

園部守央・加部二生　1989　『内堀遺跡群II』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団

園部守央・鈴木雅浩　1990　『内堀遺跡群III』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前原　豊・伊藤　良　1991　『内堀遺跡群IV』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団

伊藤　良・前原　豊・戸所慎策　1993　『内堀遺跡群V』　前橋市教育委員会

関口　孝・前原　豊・戸所慎策　1994　『内堀遺跡群VI』　前橋市教育委員会

前原　豊・戸所慎策　1995　『内堀遺跡群VII』　前橋市教育委員会

前原　豊・新井真典　1996　『内堀遺跡群VIII』　前橋市教育委員会

前原　豊・宮内　毅　1997　『内堀遺跡群IX』　前橋市教育委員会

飯塚　誠・杉浦つや子ほか　1981　『西大室遺跡群I』　前橋市教育委員会

加部二生・前原　豊「内堀遺跡群下縄引遺跡」『東日本における古墳出現過程の検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会

江部和彦・前原照子ほか　1983　『西大室遺跡群IV』前橋市教育委員会

千田幸生ほか　1986　『梅木遺跡』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団

小島純一ほか　1987　『粕川村の遺跡』　群馬県粕川村教育委員会

小島純一　1988　『堤頭遺跡』　群馬県粕川村教育委員会

小島純一　1990　『西迎遺跡』　群馬県粕川村教育委員会

前原　豊・伊藤　良　1992　『後二子古墳・小二子古墳』　前橋市教育委員会

前原　豊・伊藤　良・戸所慎策　1993　『前二子古墳』　前橋市教育委員会

前原　豊・戸所慎策　1995　『中二子古墳』　前橋市教育委員会

前原　豊・宮内　毅　1997　『小二子古墳』　前橋市教育委員会

石塚久則ほか　1980　『塚廻り古墳群』　群馬県教育委員会

右島和夫　1992　『神保下條遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

中島洋一　1988　『酒巻古墳群』　行田市教育委員会

中島洋一　1989　『酒巻15号墳・稲荷通遺跡』　行田市教育委員会

田原本町埋蔵文化財調査年報4　1994　田原本町教育委員会

「笹鉾山古墳出土の形象埴輪について」　1994　田原本町教育委員会

櫻井久之　「馬と人物のはにわ」『韓火』38号(財)大阪市文化財協会

内堀4号墳の発掘調査においては、白石太一郎氏（国立歴史民俗博物館）、右島和夫氏（(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団）にご教示をいただいた。出土した埴輪や土器の復原作業においては、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の関邦一氏、徳江秀夫氏、松村和男氏にご教示をいただいた。

Tab. 4　内堀4号墳計測表　　（ ）は現存値、［ ］は復原値である。

		東	西	南	北
周堀	1 外縁標高	131.42m	131.58m	130.65m	132.68m
	2 底面標高	130.60m	130.40m	130.04m	130.89m
	3 周堀深さ	0.82m	1.18m	0.61m	1.79m
	4 周堀の幅	2.80m	2.60m	2.30m	4.70m
	5 外肩角度	28°	36°	14°	29°
下段墳丘	6 下端標高	131.36m	130.65m	130.16m	131.34m
	7 下段高さ	0.68m	0.73m	1.07m	0.48m
	8 下段の幅	1.26m	0.70m	1.80m	0.72m
	9 FA層標高	131.70m	—	131.23m	132.46m
	10 下段角度	29°	50°	48°	33°
下段平坦面	11 下端標高	132.04m	131.28m	131.23m	131.82m
	12 上端標高	132.09m	131.80m	131.70m	131.96m
	13 平坦面高	0.05m	0.52m	0.47m	0.14m
	14 平坦面幅	0.88m	2.10m	2.60m	0.80m
	15 平坦面角度	4°	15°	13°	11°
上段墳丘	16 上端標高	(132.70m)	(132.40m)	(132.10m)	(132.56m)
	17 上段高さ	(0.61m)	(0.60m)	(0.40m)	(0.60m)
	18 上段幅	(0.56m)	(1.30m)	(0.90m)	(0.90m)
	19 上段角度	23°	26°	19°	34°
	20 墳頂標高	—	—	—	—

Tab. 5　溝状遺構観察表（D区さくら草の湿原）

遺構名	位置	形状(断面)	幅	深さ	覆土	備考
W－1	X138－Y77・78G	台形	20cm	13cm	1層	耕作痕か
W－2	X135・136－Y75・76G	台形	20	15	1層	耕作痕か
W－3	X135・136－Y75・76G	台形	30	9	1層	耕作痕か
W－4	X135－Y74・75G	台形	25	8	1層	耕作痕か
W－5	X128・129－Y58～66G	不明	—	—	—	平成10年度調査

Tab. 6　土坑観察表（B区内堀4号墳）

遺構名	位置	形状	長径	短径	深さ	備考
D－1	X43－Y127G	長方形	94cm	60cm	61cm	縄文時代

Tab. 7　土坑観察表（D区さくら草の湿原）

遺構名	位置	形状	長径	短径	深さ	備考
D－1	X137－Y73G	楕円形	82cm	70cm	26cm	
D－2	X135－Y71G	楕円形	42	35	20	臼玉出土
D－3	X135－Y70・71G	楕円形	65	42	41	
D－4	X135－Y70G	楕円形	50	35	18	
D－5	X137－Y76G	楕円形	110	75	50	
D－6	X135－Y66G	円形	84	80	23	

Tab. 8　内堀4号墳円筒埴輪観察表

番号	器形	大きさ 口径 器高 底径	器厚 口縁 胴部 基部	透孔	突帯	2条 ①突帯分類 1条 ②突帯厚 ②基部～長	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	ハケ目 本/2cm	成形調整	①基部 ②外面 ③内面	備考
1	普通円筒 A	19.5 31.0 12.0	0.8 1.1 2.0	○ 3.7	①E ②0.4 ③27.5 ①A ②0.4 ③17.0		①中粒 ②良好 ③明褐色 ④ほぼ完形	14		①－ ②縦ハケ→突帯貼付、口縁部横ナデ。 ③口縁部横ハケ、胴部縦方向のナデ。	口縁部内面に 横方向に1本 の篦記号 4区250
2	普通円筒 B	18.0 34.0 12.1	0.8 1.4 2.1	○ 4.4	①E ②0.4 ③27.5 ①E ②0.4 ③17.5		①中粒 ②良好 ③橙色 ④ほぼ完形	11		①－ ②縦ハケ→突帯貼付、口縁部横ナデ。 ③斜め方向のハケ→横ナデ、胴部斜め方向のナデ。	内面透孔の上 部に縦方向に 1本の篦記号 4区150
3	普通円筒 C	17.0 34.7 11.0	0.8 1.2 2.0	○ 5.5	①E ②0.4 ③27.0 ①E ②0.5 ③15.2		①中粒 ②良好 ③にぶい赤褐色 ④2/3	9		①－ ②縦ハケ→突帯貼付、口縁部横ナデ。 ③口縁部横ナデ、胴部縦方向のナデ。	内面透孔の上 部に縦方向に 1本の篦記号
4	普通円筒 D	－ － (11.8)	－ 1.1 1.5	○か	①E ②0.3 ③28.5 ①E ②0.4 ②16.4		①中粒 ②良好 ③橙色 ④1/4	11		①左回り ②縦ハケ→突帯貼付。 ③斜め方向のハケ→縦方向のナデ。	
5	普通円筒 E	－ － 10.8	－ － 2.0	○か	①D ②0.5 ③17.0		①中粒 ②良好 ③明赤褐色 ④1/3	7		①－ ②縦ハケ→突帯貼付。 ③縦方向のナデ、一部に篦削り	
6	普通円筒 F	－ (3.25) －	1.0 1.0 1.8	○ [3.4]	①E ②0.5 ③25.5 ①E ②0.4 ③16.0		①細粒 ②良好 ③明赤褐色 ④1/5	14		①－ ②縦ハケ→突帯貼付→口縁部横ナデ。 ③斜め方向のハケ→縦方向のナデ	

註）1．口縁部…口唇部～突帯、基底部…基部～突帯、胴部…口縁部と基底部との間。器厚はそれぞれの部分の真ん中で計測した。

2．透孔の欄にある○は透孔の形を表す。その次に表している数値は、透孔の最大径または最大幅である。

3．突帯は、下から1条・2条とした。突帯はその断面の形によって下の図のようにA～Eの5種類に分類した。

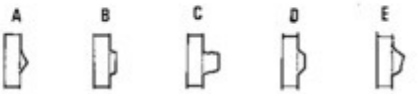
A…断面がくの字のようになっているもの。

B…断面が□または凹状のもの。

C…Bのなかで特に突帯の出っ張りの大きいもの（1cm前後）。

D…断面が台形状のもの。

E…正五角形を線対称軸で2等分したような断面をもつもの。



4．突帯の厚さは、突帯の一番出っ張っている部分とその上の側面との距離で表した。基部から各突帯までの長さは、突帯の中央から基部までの距離で表した。

5．胎土は、細粒（0.9mm以下）・中粒（1.0～1.9mm）・粗粒（2.0mm以上）、焼成は良好・普通・不良の3段階評価をした。また、色調は埴輪外面を観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原1995）によるものである。

6．基部の成形の右回りは時計回り、左回りは逆時計回りである。

7．長さの単位はcmである。現存値を（　）、復原値を［　］で示した。

Tab. 9　内堀4号墳形象埴輪観察表

番号	推定される原位置	種類・器形	①胎土　②焼成　③色調　④残存　⑤特徴　⑥大きさ	備考
7	下段平坦面	人物A	①中粒　②良好　③明赤褐色　④腕欠損。顔一部欠損。⑤頭部は中央から左右に髪を振り分ける。美豆良は側頭部に棒状の粘土を貼り付けて表現している。その上部に刺落痕があることから、結い紐を表現する粘土紐があったと思われる。顔面は丁寧にナデられ、左目と頬に赤色塗彩がなされる。頸飾りは幅の狭い粘土帯を貼り付け、その下に円形の粘土をつけて表現されている。また頸飾りの上には径7㎜の貫通しない小孔があけられている。衣服の表現は、腰帯とラッパ状に開く裾のみで、部位によって異なる調整がなされ、胴部は不定方向の細かいハケ、腰帯はやや荒い横ハケ、裾部上部は荒い斜め方向のハケ、裾部端部は横ナデである。左腰には大小2本の大刀と「逆6の字」状の鞘を貼り付ける。基部には突帯はつかず、底部から高さ22.6cmに縦長の楕円形の透孔が穿たれている。また胴部の数カ所に指紋がみられる。　⑥79.6cm。	1001
8	下段平坦面	人物B	①粗粒　②良好　③明赤褐色④ほぼ完形⑤美豆良は五角柱で長さ4cm。美豆良の後ろに切り込みによって耳が表現されている。鼻には線刻によって鼻孔が表現される。両腕は短く、左手をわずかに上に向ける。背中には粘土紐を貼り付けて鏃が表現される。刃の部分を右側に向けている。その造りは写実的である。基底部から22cmの位置に突帯が巡り、縦長の楕円形の透孔が穿たれる。顔面は横ハケの後ナデ、そのほかは縦ハケを残す。出土位置から南側の馬形埴輪の馬飼人の可能性が高い。　⑥53.8cm。	1002
9	下段平坦面	人物C	①中粒　②良好　③橙色　④基底部から腰部、左腕　⑤基底部から25cmの位置に突帯を巡らせ、側面に一対の透孔があく。突帯の上7cmのところに断面三角形の粘土紐を貼り付け、腰帯を表現する。背中には粘土紐を貼り付けて鏃を表現する。鏃の刃は左側に向けている。人物Bの鏃と比べると、造りは雑である。左腕は中実で、根元が肩に差し込まれて接続する。出土位置から北側の馬形埴輪の馬飼人の可能性が高い。　⑥（42.5cm）	1004
10	下段平坦面	人物D	①中粒　②良好　③橙色　④腰部より下を欠く　⑤髪の毛は厚さ3.5cmの粘土板を後頭部に垂直に貼り付け、つぶし島田を表現している。顔面は目、口を切り込み、鼻は粘土を貼り付け、線刻で鼻孔を表現している。耳は中心のくぼんだ楕円形の粘土を貼り付けられ、そのくぼみには線刻がなされる。耳の上部には径5㎜の円形の粘土が5つ貼り付けられている。また耳のしたには幅1cmの粘土帯を径3.5cmの環状にしてつくった耳環が垂れる。頸部にはボタン状の粘土を密に押し付けて、一連の首飾りを表現する。首飾りの後ろは結ばれて左右に垂れているような表現になっている。両腕は中実の差し込み式で、手のひらを内側に向けて水平に挙げている。手首には円形の粘土で腕飾りが表現されている。手は親指のみが独立し、ほかの指は線刻で分けられる。胸部には1.5～2cmの粘土塊を貼り付け、乳房を表現していて、残存部分には衣服の表現はない。顔面、頸部、腕部でハケの後ナデられているほかは縦ハケを残す。　⑥（34.8）	
11	下段平坦面	人物E	①中粒　②良好　③にぶい橙色　④頭部から頸部　⑤美豆良は長さ約10cmの棒状粘土を貼り付けることによって表現されている。先端は前方向に曲げられ、その後ろに突起状の粘土塊をつけることにより、逆Tの字状になっている。また美豆良の2カ所に粘土板を貼り付けて結い紐を表現している。目、口は切り込みで、鼻には線刻によって鼻孔が、美豆良の後ろ側には切り込みで耳の孔をそれぞれ表現している。頭には頭巾を被っている様である。頸部にはボタン状の粘土を密に押し付けた首飾りをかける。顔面、美豆良のみナデによる整形で、他は縦ハケを残す。また、目の下から頬、美豆良にかけて赤色塗彩がなされる。	
12	下段平坦面	人物F	①中粒　②良好　③にぶい橙色　④頭部から頸部　⑤頭頂部には粘土板を斜めに貼り付け、つぶし島田を表現する。目、口を切り込みで、鼻孔、耳の孔の表現はない。額には篦による線刻と刺落痕があることから櫛の表現があったと思われる。側頭部には耳環がつけられ、その上部は円形の粘土が貼り付けられ飾られる。頸部には幅1cmの粘土帯が巻かれ、その下に径1.5cmのボタン状粘土が押しつけられ首飾りを表現している。顔面は丁寧にナデられ、後頭部はハケメを残す。　⑥（21.6）	
13	下段平坦面	人物G	①中粒　②良好　③にぶい橙色　④基部～裾部　⑤基部は底部から24cmに円形の透孔が穿たれ、突帯を巡らさずに裾部につながる。裾部の左脇には幅約2cmの板状の粘土によって大刀が表現される。基部の内面は縦方向のナデ、外面は縦ハケ、裾部は横ナデ、大刀は弱くナデられ、ハケメを残す。　⑥（34.5）	2BTr 369 人物Eと同一
14	下段平坦面	人物H	①中粒　②良好　③にぶい赤褐色　④顔面鼻・顎の一部　⑤口は切り込み、鼻は人物Fに似て鼻孔はない。調整は横ハケの後ナデられている。　⑥（7.0）	
15	下段平坦面	人物胴部	①中粒　②良好　③橙色　④背中、裾の一部、右腕　⑤腕は中実で、根元が肩部に差し込まれる。腕は下がる。肩から腕、裾部にかけてナデられているほかは粗いものと細かいものの2種類のハケメを残す。　⑥(28.7)	
16	下段平坦面	人物胴部	①中粒　②良好　③にぶい橙色　④右肩から背中　⑤胴部内面は縦方向のナデであるが、輪積痕をよく残す。外面は粗いハケと細かいハケの2種類のハケメを残す。⑥（20.9）	

番号	推定される原位置	種類・器形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存 ⑤特徴 ⑥大きさ	備考
17	下段平坦面	人物右腕	①中粒 ②良好 ③橙色 ④指先を欠く ⑤中実で、根元が肩に差し込まれるようになっている。親指のみが独立している。丁寧にナデられている。 ⑥(12.1)	1004人物Cと同一
18	下段平坦面	人物胴部	①中粒 ②良好 ③にぶい橙色 ④指先を欠く ⑤中実で差し込み式。指先を欠いているが、その断面から、手の甲に幅8㎜の粘土紐を5本接合して指先を表現していると思われる。調整はナデられているが所々にハケメを残す。 ⑥(9.0)	18と同一か
19	下段平坦面	人物左手	①中粒 ②良好 ③にぶい橙色 ④指先を欠く ⑤親指は独立し粘土塊を貼り付けてつくられていると思われる。他の指は、手の甲に4本の粘土紐を接合してつくられる。調整はハケの後雑にナデられている。 ⑥(7.0)	人物Aと同一
20	墳頂部か	人物左手	①中粒 ②良好 ③明赤褐色 ④手首から指先まで ⑤手のひらとなる部分に4本の粘土紐と親指となる粘土を貼り付け、手の甲になる部分に中心のくぼんだ円盤状の粘土を貼り付けて籠手を表現している。表面は丁寧にナデられ、籠手の縁に沿って赤色塗彩がなされる。	
21	墳頂部か	盾A	①細粒 ②良好 ③にぶい橙色 ④基部、盾部1/3欠損 ⑤盾部の形状は下から2/3のところに小突起をもち、そこから下に緩やかに弓状に弧を描く。盾部の成型方法は下2/3が基礎となる円筒の側面に粘土板を鱗状に取り付けるのに対し、上1/3は1枚の粘土板を半截した円筒に取り付けている。円筒部の上端は開放しているが、補強のために幅2㎝の粘土紐が粘土板と円筒部を結ぶように付けられている。表面の調整は円筒部は縦ハケ、右鱗は横ハケ、左鱗は縦ハケがそのまま残され、その後両側の鱗には鋸歯文、円筒部分にはハシゴ状の線刻がなされる。裏面の調整は雑で、左鱗は横ハケ、円筒部、右鱗は縦ハケで、指頭圧痕も確認できる。 ⑥(45.8)	
22	墳頂部か	盾B	①細粒 ②良好 ③橙色 ④破片 ⑤円筒部は盾ハケ、ヒレ部は横ハケを残し、盾Aと同様の線刻が施される。	
23	墳頂部か	靫A	①中粒 ②良好 ③明赤褐色 ④基部下部を欠く⑤靫部は基部からつながる筒形の本体を曲げて2方向に積み上げ、片方を閉塞し、もう片方に板状の粘土を差し込み「6の字」状にする。板状の部分には線刻がなされ、靫部本体との接合部分には幅2㎝の粘土帯が貼り付けられ、さらにその上には一文字の線刻がなされた突起が取り付けられる。靫部本体には斜上方から穿たられた径3㎝の孔がある。孔の位置は中心からずれる。基部には縦ハケの後、3条の断面三角形の突帯が貼り付けられ、3条目の突帯の下のみ横ハケが施される。 ⑥ (54.0)	
24	墳頂部か	靫B	①中粒 ②良好 ③明赤褐色 ④基部下部を欠く ⑤成型方法は靫Aと同じ。靫部は靫Aよりひとまわり大きい。板を本体の接合部には粘土帯が貼り付けられ、その上に突起がある。突起には線刻はない。靫部の上部には径2.8㎝の孔が斜め上方から穿たれる。基部と靫部を画する突帯はE類の断面で、基部の調整は縦ハケのみである。 ⑥(31.0)	
25	墳頂部か	靫C	①中粒 ②良好 ③橙色 ④破片 ⑤基部と靫部を分ける突帯は断面三角形で、靫部の調整は不定方向のハケメを残している。	
26	墳頂部か	靫D	①中粒 ②良好 ③橙色 ④板部 ⑤表、裏、両側面に長軸方向のハケ、表面に4つの線刻。⑥ (7.8)	
27	墳頂部か	靫E	①中粒 ②良好 ③明赤褐色 ④破片 ⑤板の先端を靫部分には本体に差し込んで接合する。接合部には幅3㎝の粘土帯を貼り付ける。その上に剥落痕があり、靫A、Bと同じ突起がついていたと思われる。	
28	墳頂部か	大刀A	①中粒 ②良好 ③明赤褐色 ④勾金部、鞘部分より下を欠く ⑤鞘と把を分ける部分には断面三角形の突帯を2本めぐらす。把は長さ17.5㎝で、径は把頭寄りで6.5㎝、把口で8㎝、断面円錐形である。把頭は台形の粘土板を把本体の上端に角度をつけて置き、その周辺に粘土を積めて接合する。またその中央には勾金を支えるように粘土塊が貼り付けられている。勾金は把頭と把口の接合部分のみが残存し、両端ともV字状につくられ、三輪玉が長軸に直交して貼り付けられる。把口側の接合部には粘土紐が1本右側に垂れる。全体的にナデられているが、把と把頭の板にハケメを部分的に残す。 ⑥ (34.0)	
29	墳頂部か	大刀B	①中粒 ②良好 ③赤褐色 ④把口と勾金の下端 ⑤勾金の下端はV字状で、裏側に粘土を詰めて基部である円筒に接合し、三輪玉が貼り付けられる。またその接合部には2本の粘土紐が巻かれ、右側に垂れる。大刀部と基部を画する突帯はE類の断面である。勾金が接合する反対側の基部には径1.7㎝の円形の孔が穿たれる。 ⑥(9.0)	
30	墳頂部か	大刀C	①中粒 ②良好 ③橙色 ④勾金部 ⑤長軸に直交させて三輪玉を3つ貼り付ける。両端には粘土紐が長軸に直交して貼り付けられる。調整はハケの後丁寧にナデられている。⑥(18.1)	
31	墳頂部か	鰭A	①細粒 ②良好 ③黄橙色 ④鰭部、基部の上端 ⑤円筒形に造った矢筒の本体に断面三角形の鰭を取り付け、矢筒の最下部に幅約3㎝の粘土帯を貼り付ける。基部には円形の透孔が穿たれる。矢筒部分は縦ハケ、鰭部は横ハケで格子状の線刻がなされる。帯は横ハケで、右から左への綾杉文が線刻される。 ⑥(18.5)	

番号	推定される層位	種類・器形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存 ⑤特徴 ⑥大きさ	備考
32	墳頂部か	輪B	①中粒 ②良好 ③にぶい橙色 ④鰭の表現部 ⑤鰭は板状の粘土の上に6本の粘土紐を貼り付け、その上部に逆V字状に刻みを入れて三角形逆刺鰭を表現する。その付け根には、径1.5cmのボタン状粘土を貼り付け矢筒部分上端の装飾を表現する。粘土板の裏側には補強のために断面三角形の粘土紐を両端と中央に貼り付ける。 ⑥(20.0)	
33	墳頂部か	輪C	①細粒 ②良好 ③橙色 ④鰭の表現部 ⑤鰭は板状の粘土の上に6本の粘土紐を貼り付け、その上部に逆V字状の刻みを入れて三角形逆刺鰭を表現。粘土板の裏側には補強のために断面三角形の粘土紐を両端と中央に貼り付ける。 ⑥ (17.8)	
34	墳頂部か	輪D	①細粒 ②良好 ③橙色 ④左翼部上半部 ⑤左隅にボタン状粘土を貼り付ける。表面は細かく、裏側は粗い斜め方向のハケメで、表側には斜め方向の線刻がなされる。 ⑥(17.5)	
35	墳頂部か	輪E	①細粒 ②良好 ③橙色 ④翼部の一部、矢筒部前面 ⑤楕円形の矢筒部に翼部を貼り付ける。翼部表面は細かい斜め方向のハケ、裏面は粗い横ハケ、矢筒部は細かい縦ハケの後ナデられる。⑥(13.0)	
36	墳頂部か	輪F	①細粒 ②良好 ③にぶい赤褐色 ④右翼上部 ⑤表面の貼り付け部は縦ハケの後ナデ、翼部は細かい横ハケ、裏面は粗い横ハケで、翼部には斜め方向の線刻があり、鋸歯文になると思われる。⑥(17.6)	
37	墳頂部か	輪G	①細粒 ②良好 ③橙色 ④左鰭部1/3 ⑤表面は斜め方向のハケ、付け根に近いところは横ハケ、裏面は不定方向のハケで、表面には線刻によって鋸歯文が施される。 ⑥(19.5)	
38	墳頂部か	輪H	①細粒 ②良好 ③橙色 ④鰭の表現部の破片 ⑤鰭は板状の粘土の上に粘土紐を貼り付け、その上部に逆V字状の刻みを入れて三角形逆刺鰭を表現する。粘土板の裏側には断面三角形の補強のための粘土紐が貼り付けられる。⑥ (10.5)	
39	墳頂部か	輪I	①細粒 ②良好 ③橙色 ④鰭の表現部の破片（輪Hと同じ部位） ⑤鰭の表現部は板状の粘土の上に粘土紐を貼り付け、その上部に逆V字状の刻みを入れて三角形逆刺鰭を表現する。粘土板の裏側には断面三角形の補強のための粘土紐が貼り付けられる。 ⑥ (12.5)	
40	墳頂部か	輪J	①細粒 ②良好 ③にぶい橙色 ④矢筒部の破片 ⑤縦ハケの後格子状の線刻がなされる。⑥(6.5)	
41	墳頂部か	輪K	①細粒 ②良好 ③にぶい赤褐色 ④右翼部の破片 ⑤表面には横ハケの後鋸歯文が、裏面には縦ハケがなされる。 ⑥(6.2)	輪Fと同一か
42	墳頂部か	形象基部	①細粒 ②良好 ③にぶい赤褐色 ④基部～突帯 ⑤基部左回り。外面縦ハケ→突帯貼付。内面縦方向のナデ。 ⑥(20.4)	
43	下段平坦面	馬A	本文参照	1003
44	下段平坦面	馬B	本文参照	1005

註） 観察項目の記述内容はTab. 8を参照。

Tab. 10 内堀4号墳出土遺物観察表

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
1	S区	須恵杯蓋	[13.8]	4.0	①細粒 ②良好 ③青灰 ④1/3	外面横転ナデ後回転箆削り。内面横転ナデ。	287	
2	1Bトレ	須恵杯身	12.5	3.6	①細粒 ②良好 ③青灰 ④3/4	外面横転ナデ、回転箆削り。内面横転ナデ。	8E11 64	
3	2Bトレ	須恵壺か	[12.5]	(3.5)	①細粒 ②良好 ③暗青灰④破片	外面横転ナデ、カキメ。内面横転ナデ、自然釉。	腹土	
4	S区D−3G	須恵高杯	[14.0]	(3.4)	①細粒 ②良好 ③青灰 ④破片	外面横転ナデ、波状文、自然釉。内面横転ナデ。	腹土	
5	1区	杯	13.9	4.0	①細粒 ②良好 ③黒④ほぼ完形	外面横ナデ、箆削り。内面横ナデ。	367ほか	
6	1区	杯	13.5	4.1	①中粒 ②良好 ③にぶい橙④4/5	外面横ナデ、箆削り。内面横ナデ。	394ほか	
7	1区	杯	12.2	4.0	①中粒 ②良好 ③にぶい橙④3/4	外面横ナデ、箆削り、指押さえ。内面横ナデ、墨書。	361ほか	
8	2区	杯	10.1	3.4	①細粒 ②良好 ③にぶい褐④2/3	外面横ナデ、箆削り。内面ナデ。	122	
9	1区	高台付皿	12.6	5.3	①細粒 ②良好 ③にぶい褐④4/5	外面横転ナデ、回転糸切り。高台後付け。内面横転ナデ。	415ほか	
10	2Bトレ	須恵壺	[19.8]	28.2	①細粒 ②良好 ③青灰 ④3/4	外面横描波状文、平行タタキ目文。内面横ナデ、青海波文。	195ほか	
11	S区ほか	須恵壺	[52.8]	(14.3)	①中粒 ②良好 ③焼灰 ④破片	外面沈線、横ナデ、横描波状文。内面横ナデ。	腹土	
12	S区ほか	須恵壺	−	−	①中粒 ②良好 ③灰 ④破片	外面沈線、平行タタキ目文。内面青海波文。	腹土	

註） 観察項目の記述内容はTab. 12を参照。

Tab. 11　D区遺物観察表

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
1	H－1	坩	10.0	9.0	①細粒②良好③赤褐　④ほぼ完形	外面篦削り後、上半部ナデ。内面ナデ。	7	
2	H－1	坩	9.3	9.8	①細粒②良好③明赤褐　④4/5	外面篦削り後、上半分ナデ。内面ナデ。	1	
3	H－1	台付椀	[15.3]	(6.2)	①纖粒②良好③赤褐　④椀部1/2	外面篦削り後ナデ、一部磨き。内面ハケ後底部磨き。	4	
4	H－3	須恵杯身	[13.1]	(4.4)	①細粒②良好③灰④破片	外面轆轤ナデ、回転篦削り。内面轆轤ナデ。	覆土	
5	H－5	杯	[13.8]	(6.8)	①細粒②良好③にぶい橙　④1/3	外面篦削り。内面横ナデ。	7	
6	H－5	須恵杯蓋	[14.3]	(4.3)	①細粒②良好③灰④1/3	外面回転篦削り、偏軸ナデ。内面轆轤ナデ。	覆土	H-3・H-6と接合
7	H－6	須恵杯蓋	[14.2]	4.4	①細粒②良好③灰④1/3	外面回転篦削り、偏軸ナデ。内面轆轤ナデ。	覆土	
8	H－6	高　杯	[18.0]	(7.0)	①纖粒②良好③褐灰④杯部1/3	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ。	覆土	
9	H－6	甕	21.0	(22.0)	①細粒②良好③橙④口縁～胴部	外面横ナデ、篦削り。内面ナデ。	2	
10	H－7	杯	[11.3]	(5.1)	①細粒②良好③赤褐④1/2	外面指頭調整後下半篦削り。内面ナデ後磨き。	覆土	
11	H－7	杯	12.6	5.0	①細粒②良好③明赤褐④2/3	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ。	2	
12	H－7	杯	12.6	5.3	①細粒②良好③明赤褐④4/5	外面横ナデ、指押さえ、篦削り。内面横ナデ。	9	
13	H－7	杯	11.8	5.8	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ。焼成後底部穿孔。	14	
14	H－7	杯	12.7	5.1	①細粒②良好③赤褐④完形	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ。	13	
15	H－7	杯	11.9	5.3	①細粒②良好③明赤褐①完形	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ。	15	
16	H－7	杯	[16.0]	6.3	①細粒②良好③明赤褐①2/5	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ。	3ほか	
17	H－7	杯	(12.7)	4.4	①細粒②良好③にぶい橙③1/3	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ。	覆土	
18	H－7	甕	24.0	30.3	①細粒②良好③にぶい橙④4/5	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、ナデ。	1ほか	
19	H－7	甕	20.3	33.8	①細粒②良好③にぶい褐④2/3	外面横ナデ、篦削り。粗粒土付着。内面指ナ	11	
20	H－8	杯	(15.3)	[4.5]	①細粒②良好③にぶい黄橙④破片	横位横ナデ、篦削り。内面ナデ。	覆土	
21	H－8	杯	(14.8)	[4.5]	①細粒②良好③にぶい黄橙④破片	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ後入念な磨き	覆土	内面黒色
22	H－8	甕	11.0	(7.3)	①纖粒②良好③橙④口縁部	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ	覆土	
23	H－8	甕	(19.0)	[8.6]	④纖粒②良好③にぶい橙　④口縁部1/2	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ。	覆土	
24	H－9	杯	12.2	5.4	①纖粒②良好③明赤褐④4/5	外面横ナデ、篦削り。内面ナデ後放射状磨き。	覆土	
25	H－9	杯	12.5	5.8	①細粒②良好③明褐④4/5	外面横ナデ、篦削り後ナデ。内面横ナデ。	17	
26	H－9	杯	[13.5]	6.7	①細粒②良好③明赤褐④1/2	外面横ナデ、篦削り後上半磨き。内面横ナデ、ナデ後粗い磨き。	覆土	
27	H－9	杯	[14.5]	4.9	①纖粒②良好③橙④2/3	外面横ナデ、指頭押圧後篦削り。内面ナデ。	6	
28	H－9	小　甕	[12.0]	10.1	①細粒②良好③明赤褐④4/5	外面横ナデ、ナデ後下半篦削り。内面横ナデ	覆土	
29	H－9	甕	17.0	29.1	①纖粒②良好③にぶい橙④1/2	外面横ナデ、篦削り後ナデ。内面横ナデ、ナデ。	2ほか	
30	H－9	甕	16.1	(15.1)	①細粒②良好③橙④口縁部2/3	外面横ナデ、ナデ。内面横ナデ、ナデ。	27	右袖
31	H－10	須恵杯蓋	[11.8]	(4.0)	①細粒②良好③褐灰④1/4	外面轆轤ナデ後回転篦削り。内面轆轤ナデ。	覆土	H－9と接合
32	H－10	杯	11.8	5.5	①細粒②良好③明褐④4/5	外面横ナデ、篦削り後弱いナデ。内面粗い磨き。	6ほか	
33	H－10	杯	12.3	5.8	①細粒②良好③赤褐④4/5	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ。	覆土	
34	H－10	須恵壺	(8.1)	[10.0]	①細粒②良好③灰④2/3	外面轆轤ナデ、櫛描波状文、列点文、胴部自然釉。内面轆轤ナデ後底部突き出し。	3ほか	H－9と接合
35	H－10	椀	12.3	7.3	①細粒②良好③赤褐④4/5	外面横ナデ、篦削り、ハケ目。内面横ナデ。	P1覆土	
36	H－10	甕	17.3	29.4	①細粒②良好③明褐④ほぼ完形	外面横ナデ、篦削り後ナデ、胴部下位の接合部と底部に削り。内面横ナデ、ナデ。	1	
37	H－11	杯	[9.6]	5.2	①細粒②良好③にぶい黄褐④2/3	外面横ナデ、篦削り後弱いナデ。内面横ナデ。	覆土	
38	H－11	杯	10.2	6.0	①細粒②良好③赤褐④完形	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、篦削り後磨き。	2	
39	H－11	杯	[15.6]	(5.7)	①細粒②良好③明赤褐④破片	同上	覆土	
40	H－11	杯	(13.6)	[5.0]	①細粒②良好③明赤褐④破片	外面横ナデ、篦削り後底部のみ弱いナデ。内面横ナデ、ナデ後磨き。	覆土	
41	H－11	杯	11.8	5.5	①纖粒②良好③明赤褐④2/3	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ。	覆土	
42	H－11	杯	(13.0)	6.2	①纖粒②良好③明赤褐④2/3	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ。	覆土	
43	H－11	小　甕	－	(7.0)	①纖粒②良好③にぶい橙④1/3	外面篦削り。内面指押さえ、ナデ。	8	

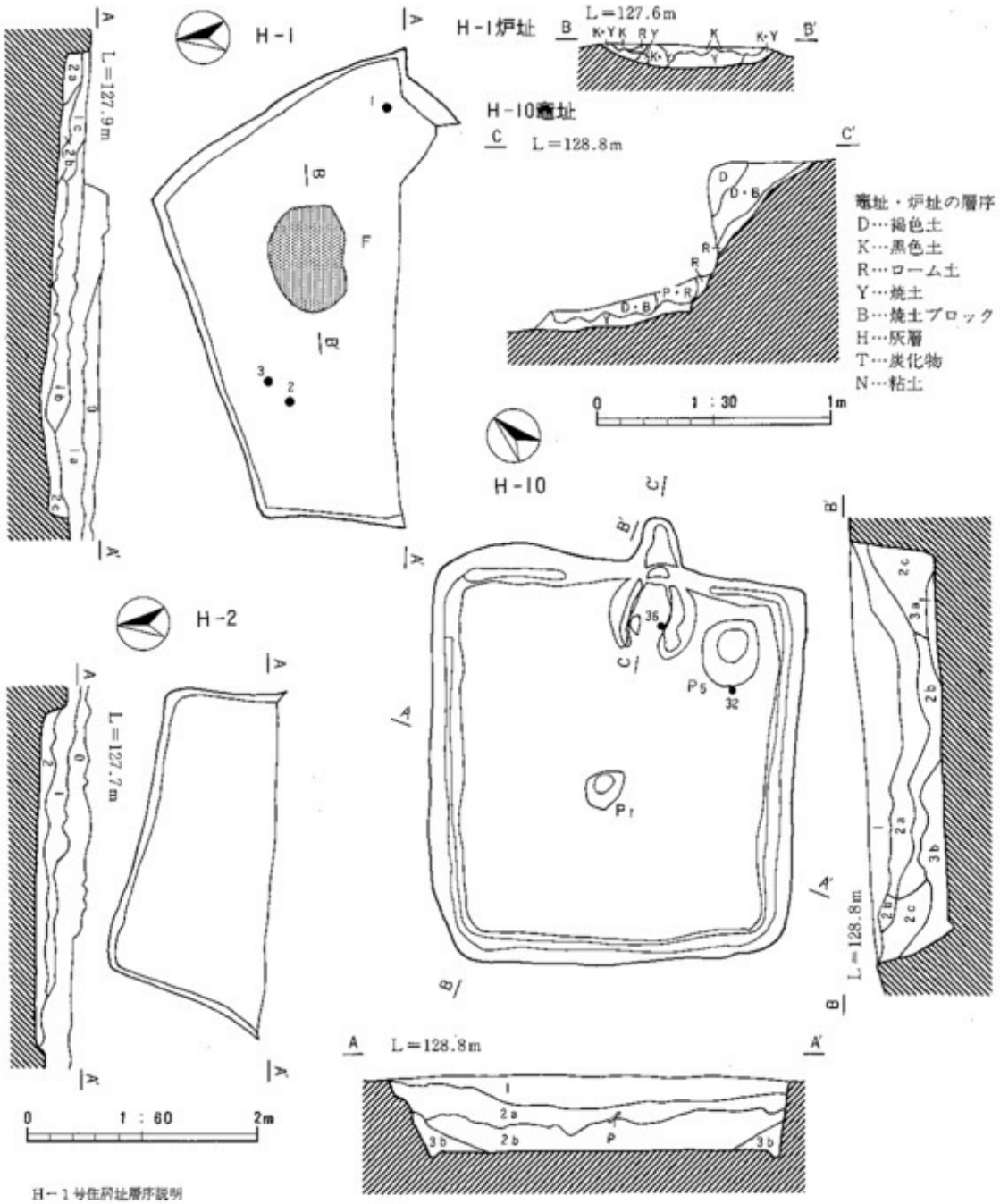
番号	出土位置	器形	大きさ 口径	器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
44	H－11	小 甕	[11.5]	(14.0)	①細粒②良好③にぶい黄橙④2/3	外面横ナデ、ナデ。内面荒削り後磨き。	1	
45	H－11	小 甕	[12.0]	16.0	①細粒②良好③にぶい赤褐④2/3	外面横ナデ、荒削り後ナデ、上半ハケ。内面ハケ後横ナデ、ナデ。	14	支柱
46	H－11	小 甕	[11.5]	11.3	①細粒②良好③にぶい褐 ④2/3	外面横ナデ、荒削り後ナデ。内面横ナデ、ナデ。	6	
47	H－11	甑	26.8	28.8	①細粒②良好③橙④4/5	内外とも横ナデ、荒削り後ナデ。	3	
48	H－11	甕	17.0	24.9	①細粒②良好③にぶい橙 ④ほぼ完形	外面横ナデ、ナデ後ハケ。内面横ナデ、荒削り。	13	
49	H－11	甕	14.9	31.8	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ、ナデ。	4	
50	H－11	甕	[18.5]	(9.2)	①細粒②良好③黄橙④口縁部破片	外面横ナデ後磨き。内面風化により不明。	覆土	
51	H－15	杯	9.5	5.9	①細粒②良好③赤褐④2/3	外面横ナデ、器壁調整後下半荒削り。内面ナデ。	覆土	
52	H－15	杯	12.0	5.7	①細粒②良好③にぶい赤褐④1/2	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ、磨き。	覆土	
53	H－15	杯	15.8	[5.5]	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ、磨き。	覆土	
54	H－15	坩	9.2	9.6	①細粒②良好③明褐④4/5	外面横ナデ、荒削り後下半弱いナデ。内面横ナデ、胴部指頭によるナデ、押さえ。	2	
55	H－16	広口壺	[16.4]	(7.2)	①細粒②良好③灰黄褐④口縁部1/2	外面横ナデ、荒削り。内面ナデ。	覆土	
56	H－17	杯	10.4	4.0	①細粒②良好③にぶい黄褐④完形	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ、ナデ。	1	
57	H－17	杯	14.8	3.3	①細粒②良好③にぶい黄褐④ほぼ完形	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ後磨き。	15	
58	H－17	杯	14.8	3.7	①細粒②良好③にぶい黄橙④ほぼ完形	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ後磨き。	2	
59	H－17	杯	12.2	4.3	①細粒②良好③橙赤褐④4/5	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ。	10	
60	H－17	須恵高台椀	13.5	4.9	①細粒②良好③灰黄④4/5	内外面とも横撫ナデ。底部回転糸切り。	8	流入、内面に墨書
61	H－17	須恵高台椀	14.6	4.9	①細粒②良好③にぶい黄橙④1/2	内外面とも横撫ナデ。底部回転糸切り。	3	流入
62	H－17	須恵広口壺	—	(10.0)	①細粒②良好③灰④1/5	内外面とも横撫ナデ。	覆土	
63	H－17	甕	16.8	(19.5)	①細粒②良好③明赤褐④2/3	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ、ナデ。	27	左袖
64	H－17	甕	17.2	(19.5)	①細粒②良好③にぶい橙①2/3	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ、ナデ。	28	
65	H－17	甕	18.7	(9.5)	①細粒②良好③にぶい橙④口縁部のみ	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ、ナデ。	29	左袖
66	H－18	坩	9.1	8.7	①細粒②良好③明赤褐④ほぼ完形	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ、荒削り、指ナデ指押さえ。	20	
67	H－18	高 杯	[15.0]	(7.1)	①細粒②良好③明赤褐④杯部のみ	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ。	21	
68	H－18	高 杯	[17.6]	(5.9)	①細粒②良好③明褐④杯部のみ	外面横ナデ、荒削り、杯部底部ハケ。内面横ナデ、ハケ。	23	
69	H－18	高 杯	[19.5]	(8.1)	①細粒②良好③明褐④杯部2/3	外面横ナデ、ハケ後荒削り。内面横ナデ、ハケ。	12ほか	
70	H－18	甕	15.5	(18.7)	①細粒②良好③にぶい黄褐④1/2	外面横ナデ、荒削り後上半のみナデ。内面横ナデ、荒削り後底部のみナデ。	24ほか	
71	H－19	坩	—	(9.0)	①細粒②良好③にぶい橙④胴部のみ	外面磨き。内面指頭による押さえ。	覆土	
72	H－19	壺	[16.8]	(10.5)	①細粒②良好③橙④口縁部のみ	外面ナデ後波状文。内面磨き。	覆土	樽式系
73	H－19	甕	4.1	(14.9)	①細粒②良好③にぶい黄橙①1/3	外面口唇部竹管押圧による刺み、口縁部波状文→縦方向スリット、頸部隆帯→RLの縄文、胴部縦方向スリットと波状文を交互に施文。内面ナデ。	1	十王台式系
74	H－20	杯	11.9	(3.5)	①細粒②良好③にぶい赤褐④1/5	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ。	覆土	
75	H－20	杯	[12.8]	(3.9)	①細粒②良好③黒褐⑤破片	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ。	覆土	
76	H－20	杯	14.0	(4.3)	①細粒②良好③にぶい黄橙④2/3	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ。	覆土	
77	H－20	杯	13.4	(4.7)	①細粒②良好③にぶい黄橙④1/3	外面横ナデ、荒削り後磨き。内面入念な磨き。	覆土	内面黒色
78	H－20	須恵杯身	[13.5]	(2.8)	①細粒②良好③灰④破片	内外面とも横撫ナデ。	覆土	
79	H－20	須恵高杯	—	(16.0)	①細粒②良好③灰黄④破片	内外面とも横撫ナデ。	覆土	
80	H－20	甕	19.3	14.2	①細粒②良好③にぶい黄褐④4/5	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ、荒削り後ナデ粗い磨き。	45	右袖
81	H－20	甕	19.5	37.8	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ、ナデ。	47	左袖
82	H－20	杯	[11.2]	3.5	①細粒②良好③明赤褐④1/4	外面横ナデ、荒削り。内面横ナデ、ナデ。	覆土	
83	H－21	器 台	8.6	10.1	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外面磨き。内面上半磨き。脚部荒削り後ナデ。透孔6単位12個。	2	
84	H－21	小 甕	9.8	11.2	①細粒②良好③橙④3/4	外面横ナデ、荒削り後上部にナデ。内面ナデ。口縁折り返し。	7	
85	H－21	台付甕	—	(7.0)	①細粒②良好③にぶい褐④1/4	外面ハケメ。内面横方向ハケメ。	覆土	石田川式

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	器高	①胎 土 ②焼 成 ③色 調 ④残 存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備 考
86	H－21	甕	20.2	(11.2)	①細粒②良好③橙④口縁部のみ	外面篦削り後磨き。内面横ナデ後磨き。	覆土	
87	H－22	杯	11.5	3.8	①細粒②良好③にぶい黄褐④4/5	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ。	11	
88	H－22	小 甕	[11.0]	12.1	①細粒②良好③にぶい黄褐④4/5	外面横ナデ、篦削り。内面ナデ。	覆土	
89	H－22	甕	15.0	(13.5)	①粗粒②良好③褐④口縁～胴部	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、ナデ。	15ほか	
90	H－23	甕	[9.0]	(15.6)	①細粒②良好③にぶい橙④1/4	外面磨き。内面ハケ。	覆土	
91	H－23	台付甕	[14.0]	(18.5)	①細粒②良好③明赤褐④1/3	外面横ナデ、刷毛目。内面横ナデ、押さえ、ナデ。	12	石岡川式
92	H－23	須恵杯身	10.7	(5.1)	①細粒②良好③灰④1/3	外面轆轤ナデ、回転篦削り。内面轆轤ナデ。	覆土	流入
93	H－23	須恵甕	－	(6.9)	①細粒②良好③黄灰④底部破片	外面タタキ。内面ナデ、押さえ。	表土	流入
94	H－23	須恵甕	[12.4]	(3.0)	①細粒②良好③灰④破片	外面轆轤ナデ、波状文。内面轆轤ナデ。	覆土	流入
95	H－24	須恵鉢	－	(3.3)	②細粒②良好③暗灰④底部破片	外面轆轤ナデ、篦削り、波状文。把手剥落痕。	覆土	底部に篦記号
96	H－24	坩	8.4	9.1	①細粒②良好③にぶい橙④完形	外面横ナデ、篦削り後ナデ、ド半篦削り。内面ナデ、押さえ。	11	
97	H－24	高 杯	[15.2]	13.2	①細粒②良好③橙④完形	外面杯部横ナデ、ハケ。脚部ハケ後篦削り。内面杯部横ナデ、ハケ。脚部ハケ。	4ほか	
98	H－24	高 杯	[14.5]	13.7	①細粒②良好③明褐④完形	外面杯部横ナデ、ハケ。脚部ハケ後篦削り、横ナデ。内面杯部横ナデ、篦ナデ。脚部ナデ。	2	
99	H－24	高 杯	[14.3]	14.1	①細粒②良好③にぶい黄褐④ほぼ完形	外面杯部横ナデ、ハケ。脚部篦削り、横ナデ。内面杯部横ナデ、ハケ。脚部ハケ、横ナデ。	1	
100	H－24	高 杯	[18.0]	15.5	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外面杯部ハケ。脚部ハケ、横ナデ。内面杯部横ナデ。脚部篦削り、横ナデ。	3	
101	H－24	高 杯	23.5	19.0	①細粒②良好③にぶい赤褐④4/5	外面杯部横ナデ、ナデ、磨き。脚部篦削り内面杯部横ナデ、ハケ、磨き。脚部篦削り、磨き。	6	
102	H－24	高 杯	[15.3]	13.2	①細粒②良好③橙④杯部のみ	内外面とも横ナデ。	4(H－5)	
103	H－24	高 杯	[19.3	(7.5)	①細粒②良好③明赤褐④杯部のみ	外面横ナデ、ハケ。内面ナデ後ハケ。	2(H－5)	
104	H－24	甕	－	(9.9)	①細粒②良好③にぶい黄褐④胴部 底部	外面篦削り。内面ナデ。	37(H－5)	
105	H－6	土 玉	《長1.7・幅1.8・厚1.1・重2.7》①緻密②良好③黒褐④ほぼ完形⑤ナデ。				6	
106	H－6	土製管玉	《長1.3・幅0.8・厚0.8・重0.9》①細粒②良好③黒褐④破片⑤ナデ。				3	
107	H－7	土 玉	《長1.1・幅1.1・厚0.9・重1.0》①細粒②良好③黒④完形⑤磨き。				12	
108	H－9	土製勾玉	《長3.8・幅1.1・厚1.1・重4.7》①細粒②良好③にぶい黄褐④2/3⑤ナデ。				覆土	
109	H－6	手捏土器	6.3	6.2	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	内外面ともナデ。	4	
110	H－8	手捏土器	4.3	2.8	①細粒②良好③橙④完形	内外面ともナデ。	覆土	
111	H－10	手捏土器	5.5	[1.6]	①細粒②良好③橙④4/5	内外面ともナデ。	覆土	
112	H－10	手捏土器	4.5	[1.5]	①細粒②良好③にぶい褐④4/5	内外面ともナデ。	覆土	
113	H－10	手捏土器	3.9	2.2	①細粒②良好③橙④4/5	内外面ともナデ。	覆土	
114	H－10	手捏土器	－	(2.2)	①細粒②良好③明黄褐④3/5	内外面ともナデ。	覆土	剣形
115	H－11	手捏土器	6.5	(2.8)	①細粒②良好③にぶい黄褐④破片	内外面とも強いナデ。口縁指頭による横ナデ。	覆土	剣形
116	H－18	手捏土器	4.3	2.3	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	内外面ともナデ。	覆土	剣形
117	H－21	紡錘車	《径5.5・厚1.2・重46.0・孔径0.6》①細粒②良好③にぶい赤褐④完形⑤磨き。				覆土	
118	H－10	石製模造品	①2.6②1.7③(0.2)④2.2⑤2/3⑥滑石				覆土	
119	H－10	石製模造品	①3.5②1.9③0.5④5.0⑤ほぼ完形⑥滑石				覆土	
120	H－10	石製模造品	①3.0②1.9③0.4④3.3⑤ほぼ完形⑥滑石				覆土	
121	H－15	石製模造品	①4.5②2.2③0.6④8.3⑤ほぼ完形⑥滑石				1	
122	H－17	臼 玉	①1.3②1.3③0.3④0.9⑤完形⑥滑石				7	
123	D－2	臼 玉	①1.3②1.3③0.3④0.6⑤完形⑥滑石				表土	
124	H－20	砥 石	①(3.4)②2.6③1.1④17.8⑤破片⑥粗粒安山岩				撹土	
125	H－1	石 鏃	②2.4②1.7③0.4④1.0⑤完形⑥黒曜石				覆土	凹基無茎鏃
126	H－6	石 鏃	①2.7②1.4③0.4④0.9⑤基部欠損⑥安山岩				覆土	平基無茎鏃
127	H－21	石 鏃	①3.9②1.9③0.5④2.4⑤完形⑥黒曜石				覆土	平基有茎鏃
128	X135 Y87	石 斧	①13.2②6.2③2.8④952⑤完形⑥頁岩				撹土	

Tab.12　縄文土器観察表

番号	区	出土位置	器形	①胎土②焼成③色調④残存⑤文様・整形方法	登録番号	備考
1	A区	X40－Y118G	深鉢	①繊維②良好③にぶい橙④胴部⑤内外面貝殻条痕文。	覆土	早期末期
2	A区	X45－Y119G	深鉢	①繊維②良好③にぶい橙④胴部⑤内外面貝殻条痕文。	覆土	早期末期
3	A区	X40－Y119G	深鉢	①繊維②良好③にぶい褐④胴部⑤羽状縄文。0段多条。	覆土	前期初頭
4	A区	X42－Y119G	深鉢	①繊維②良好③明黄褐④胴部⑤縄文LR。0段多条。	覆土	前期初頭
5	A区	X37－Y118G	深鉢	①繊維②良好③にぶい橙④胴部⑤縄文RL。	覆土	前期初頭
6	A区	X43－Y120G	深鉢	①繊維②良好③にぶい黄褐④胴部⑤羽状縄文。	覆土	前期初頭
7	A区	X41－Y119G	深鉢	①繊維②良好③にぶい黄褐④口縁⑤口縁・隆帯に刻み。	覆土	花積下層
8	A区	X40－Y119G	深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤沈線。	覆土	諸磯b
9	B区	M－4・1区	深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤内外面とも貝殻条痕文。	覆土	早期末～前期初
10	B区	M－4・1区	深鉢	①繊維②良好③にぶい黄褐④胴部⑤沈線。	覆土	早期末期
11	B区	M－4・2区	深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤外面貝殻条痕文。	55	早期末～前期初
12	B区	M－4・1区	深鉢	①繊維②良好③にぶい橙④胴部⑤沈線。	333	田戸下層
13	B区	M－4・2区	深鉢	①繊維②良好③にぶい褐④胴部⑤外面貝殻条痕文。	覆土	早期末～前期初
14	B区	M－4・2区	深鉢	①繊維②良好③にぶい赤褐④胴部⑤内外面とも貝殻条痕文。	275	早期末～前期初
15	B区	M－4・2区	深鉢	①繊維②良好③褐灰④口縁⑤縄文LR、口唇部にも縄文RL。	61ほか	前期初頭
16	B区	M－4・3区	深鉢	①細粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤縄文RL。	覆土	前期初頭
17	B区	M－4・2区	深鉢	①繊維②良好③にぶい褐④胴部⑤縄文RL、0段多条。	80	前期初頭
18	B区	M－4・3区	深鉢	①繊維②良好③にぶい黄橙④胴部⑤縄文RL。	24	前期初頭
19	B区	M－4・1区	深鉢	①細粒②良好③橙④胴部⑤縄文RL。	382	前期初頭
20	B区	M－4・3区	深鉢	①繊維②良好③にぶい黄褐④胴部⑤縄文LR。	37	前期初頭
21	B区	M－4・3区	深鉢	①繊維②良好③にぶい黄褐④胴部⑤縄文RL。	291	前期初頭
22	B区	M－4・2区	深鉢	①細粒②良好③橙④把手⑤沈線。	覆土	称名寺2
23	B区	M－4・4区	深鉢	①中粒②良好③にぶい褐④口縁⑤沈線、縄文LR。	239	堀之内
24	B区	M－4・S区	深鉢	①中粒②良好③にぶい黄橙④口縁⑤沈線、縄文LR。	覆土	前期初頭
25	C区	—	深鉢	①細粒②良好③橙④口縁⑤半裁竹管による平行沈線、口唇部に刻み。	6	田戸上層
26	C区	—	深鉢	①細粒②良好③にぶい橙④口縁⑤半裁竹管による連続爪形文、縄文RL。	22	諸磯b
27	C区	—	深鉢	①細粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤半裁竹管による連続爪形文、縄文RL。	24	諸磯b
28	C区	—	深鉢	①中粒②良好③褐④胴部⑤半裁竹管による連続爪形文。	28	諸磯b
29	C区	—	深鉢	①中粒③良好③にぶい褐④胴部⑤半裁竹管による連続爪形文、隆帯に刻み。	29	諸磯b
30	D区	H － 21	深鉢	①細粒②良好③灰黄褐④口縁⑤平行沈線、刻み。	覆土	加曽利BⅠ

註）1．縄文土器の観察項目は、①胎土②焼成③色調④残存⑤文様・整形方法の順で記載した。
2．石器・石製品の観察項目は、①最大長②最大幅③最大厚④重さ⑤残存⑥石材の順で記載した。
3．①胎土は細粒（0.9㎜以下）、中粒（1.0～1.9㎜），粗粒（2.0㎜以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合には鉱物名を記載。
②焼成は極良、良好、不良の3段階評価。
③色調は土器外面を観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原1995）によった。
④大きさの単位は㎜、gであり、現存値を（　）、復原値を［　］で示した。その他の小片については所属部位を記載した。



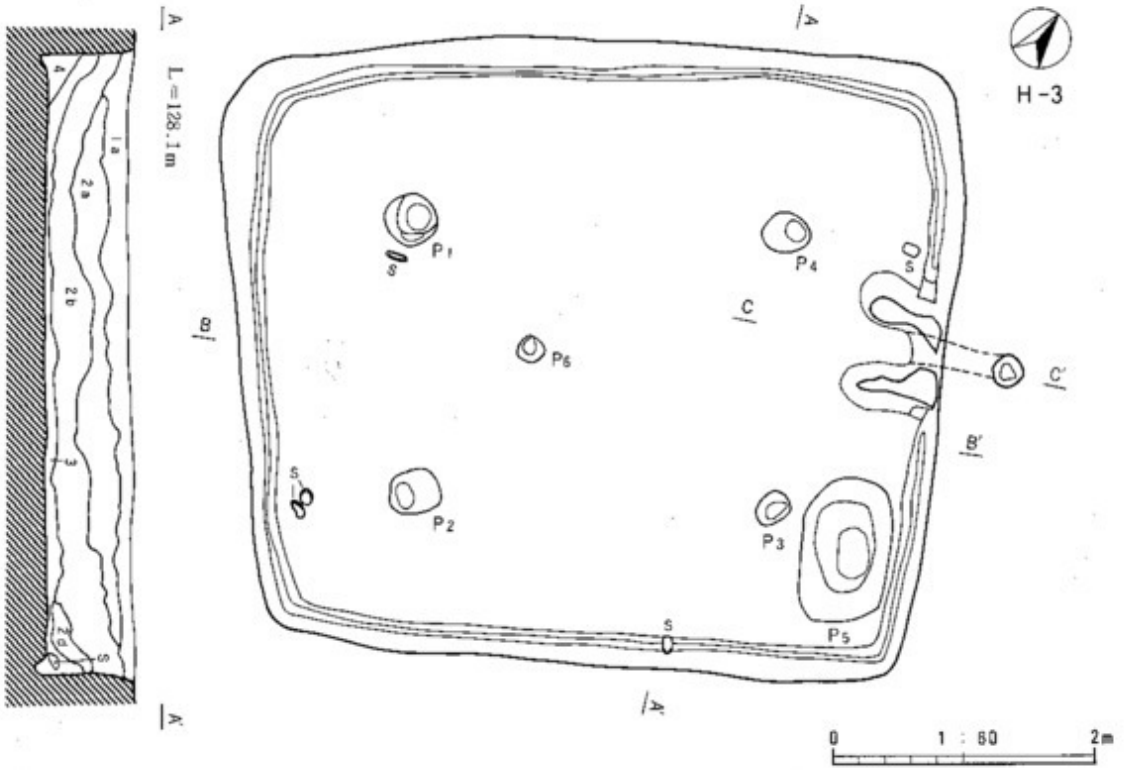
H－1号住居址層序説明

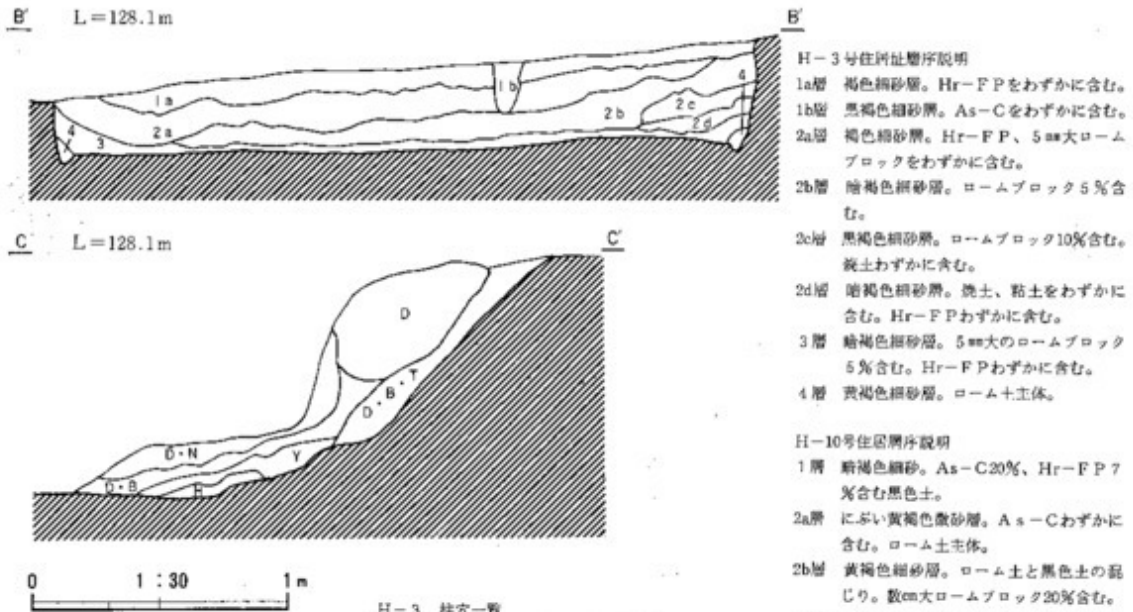
0層　黒褐色細砂層。As－B含む黒色土。盛土。
1a層　暗褐色細砂層。As－C20%、Hr－FPわずかに含む。
1b層　黒褐色細砂層。As－C20%含む。黒色土。
1c層　暗褐色細砂層。As－C30%、Hr－FPわずかに含む。
2a層　黄褐色漸砂層。ローム土主体。わずかに黒色土含む。
2b層　褐色漸砂層。ローム土と黒色土の混じり。
2c層　褐色漸砂層。ローム土主体。As－C、黒色土わずかに含む。

H－2号住居址層序説明

0層　黒褐色細砂層。As－B含む黒色土。盛土。
1層　暗褐色細砂層。As－Cわずかに含む。黒色土。
2層　褐色漸砂層。ローム土主体。As－C、黒色土わずかに含む。

Fig. 34　D区H－1・2・10号住居址





H－3号住居址層序説明

1a層　褐色細砂層。Hr－ＦＰをわずかに含む。
1b層　黒褐色細砂層。As－Cをわずかに含む。
2a層　褐色細砂層。Hr－ＦＰ、5㎜大ロームブロックをわずかに含む。
2b層　暗褐色細砂層。ロームブロック5％含む。
2c層　黒褐色細砂層。ロームブロック10％含む。焼土わずかに含む。
2d層　暗褐色細砂層。焼土、粘土をわずかに含む。Hr－ＦＰわずかに含む。
3層　暗褐色細砂層。5㎜大のロームブロック5％含む。Hr－ＦＰわずかに含む。
4層　黄褐色細砂層。ローム土主体。

H－10号住居層序説明

1層　暗褐色細砂。As－C20％、Hr－ＦＰ7％含む黒色土。
2a層　にぶい黄褐色微砂層。As－Cわずかに含む。ローム土主体。
2b層　黄褐色細砂層。ローム土と黒色土の混じり。数cm大ロームブロック20％含む。
2c層　暗褐色細砂層。As－C5％含むローム土と黒色土の混じり。2cm大ロームブロックわずかに含む。
3a層　褐色細砂層。ローム土と黒色土の混じり。焼土10％含む。
3b層　にぶい黄褐色細砂層。ローム土主体。

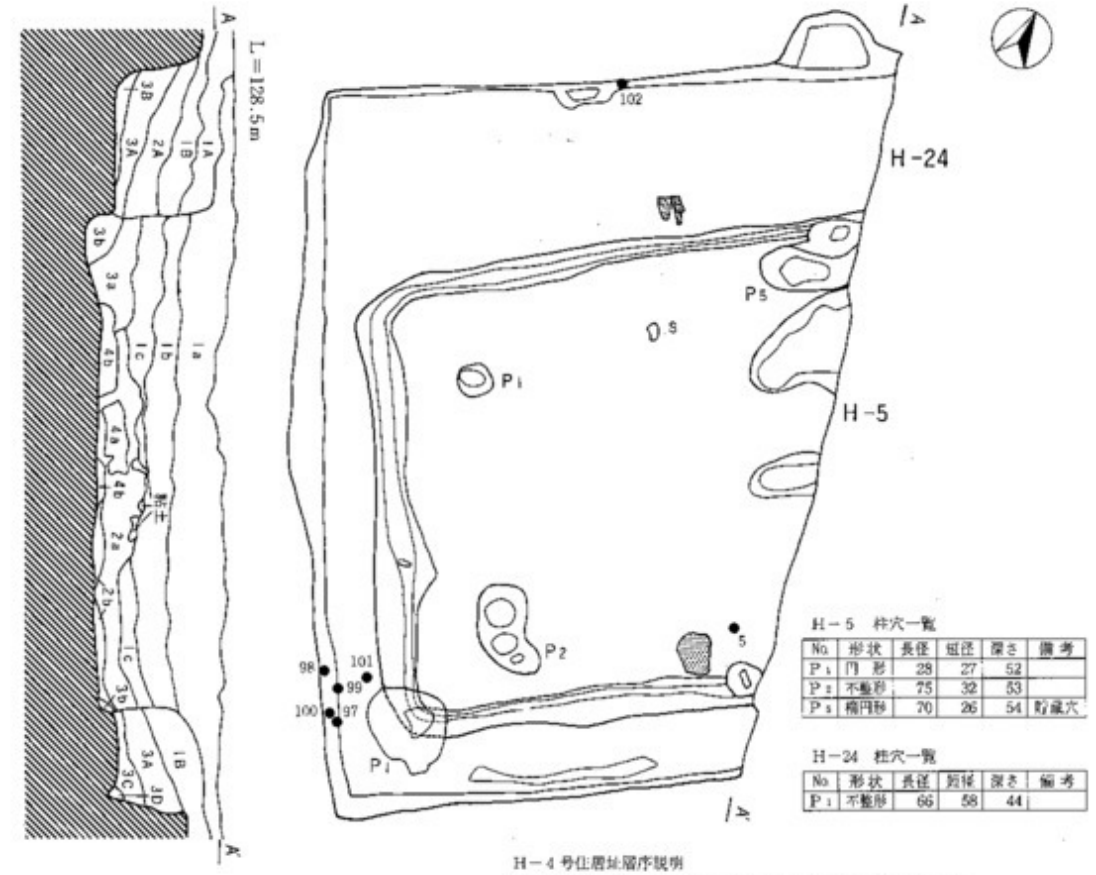
H－10　柱穴一覧（単位：cm）

No.	形状	長径	短径	深さ	備考
P1	楕円形	45	39	16	
P5	長方形	58	48	57	貯蔵穴

H－3　柱穴一覧

No.	形状	長径	短径	深さ	備考
P1	円形	40	40	37	
P2	楕円形	40	33	58	
P3	楕円形	28	22	54	
P4	楕円形	47	32	33	
P5	長方形	111	58	69	貯蔵穴
P6	円形	22	20	21	

Fig. 35　D区H－3号住居址



H－5　柱穴一覧

No.	形状	長径	短径	深さ	備考
P1	円形	28	27	52	
P2	不整形	75	32	53	
P3	楕円形	70	26	54	貯蔵穴

H－24　柱穴一覧

No	形状	長径	短径	深さ	備考
P1	不整形	66	58	44	

H－4号住居址層序説明

1a層　暗褐色細砂層。As－C20%、Hr－FP10%含む。黒色土。
1b層　黒褐色細砂層。As－C20%、Hr－FP5%、ロームブロックわずかに含む。
2層　黄褐色微砂層。ローム土主体。ロームブロックわずかに含む。

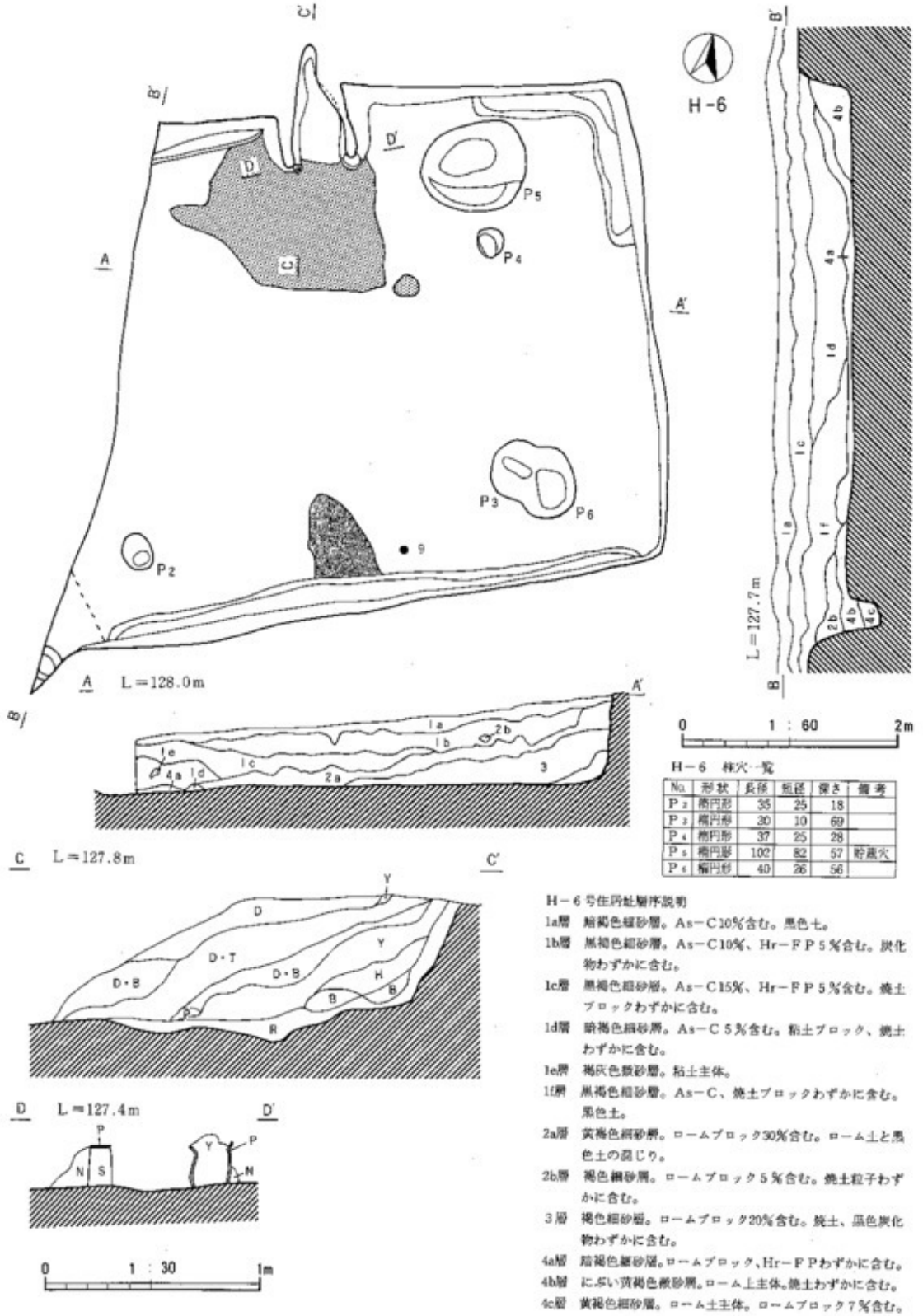
H－5号住居址層序説明

1a層　暗褐色細砂層。As－C20%、Hr－FP10%含む。黒色土。
1b層　黒褐色細砂層。As－C・Hr－FP5%含む。黒色土。
1c層　褐色細砂層。As－C5%、Hr－FP10%含む。ロームブロック5%含む黒色土。
2a層　暗褐色細砂層。ロームブロック10%含む。As－C、Hr－FPわずかに含む。
2b層　暗褐色細砂層。As－C10%含む。ローム土と黒色上の混じり。
3a層　暗褐色細砂層。ロームブロック含む、ローム上と黒色土の混じり。
3b層　黄褐色微砂層。ローム土主体。黒色上わずかに含む。
4a層　褐灰色細砂層。粘土を主体とする、黒色上とローム上の混じり。
4b層　にぶい黄橙色微砂層。粘土主体。ローム上を含む。

H－24号住居址層序説明

1A層　暗褐色細砂層。As－C20%、Hr－FP10%含む。黒色土。
1B層　黒褐色細砂層。As－C・Hr－FP5%含む。黒色土。
2A層　黒色細砂層。As－Cわずかに含む。黒色土主体。
3A層　褐色細砂層。ローム土主体。わずかに黒色土含む。
3B層　黄褐色微砂層。ローム土主体。ロームブロック20%、焼上わずかに含む。
3C層　黒色細砂層。ローム土と黒色土の混じり。焼土、炭化物わずかに含む。
3D層　黄褐色微砂層。ローム土主体。黒色土わずかに含む。

Fig. 36　D区H－4・5・24号住居址



H－6　柱穴一覧

No.	形状	長径	短径	深さ	備考
P 1	楕円形	35	25	18	
P 2	楕円形	30	10	69	
P 4	楕円形	37	25	28	
P 5	楕円形	102	82	57	貯蔵穴
P 6	楕円形	40	26	56	

H－6号住居址層序説明

1a層　暗褐色軽砂層。As－C10%含む。黒色土。

1b層　黒褐色細砂層。As－C10%、Hr－FP5%含む。炭化物わずかに含む。

1c層　黒褐色細砂層。As－C15%、Hr－FP5%含む。焼土ブロックわずかに含む。

1d層　暗褐色細砂層。As－C5%含む。粘土ブロック、焼土わずかに含む。

1e層　褐灰色軽砂層。粘土主体。

1f層　黒褐色細砂層。As－C、焼土ブロックわずかに含む。黒色土。

2a層　黄褐色細砂層。ローム土ブロック30%含む。ローム土と黒色土の混じり。

2b層　褐色細砂層。ローム土ブロック5%含む。焼土粒子わずかに含む。

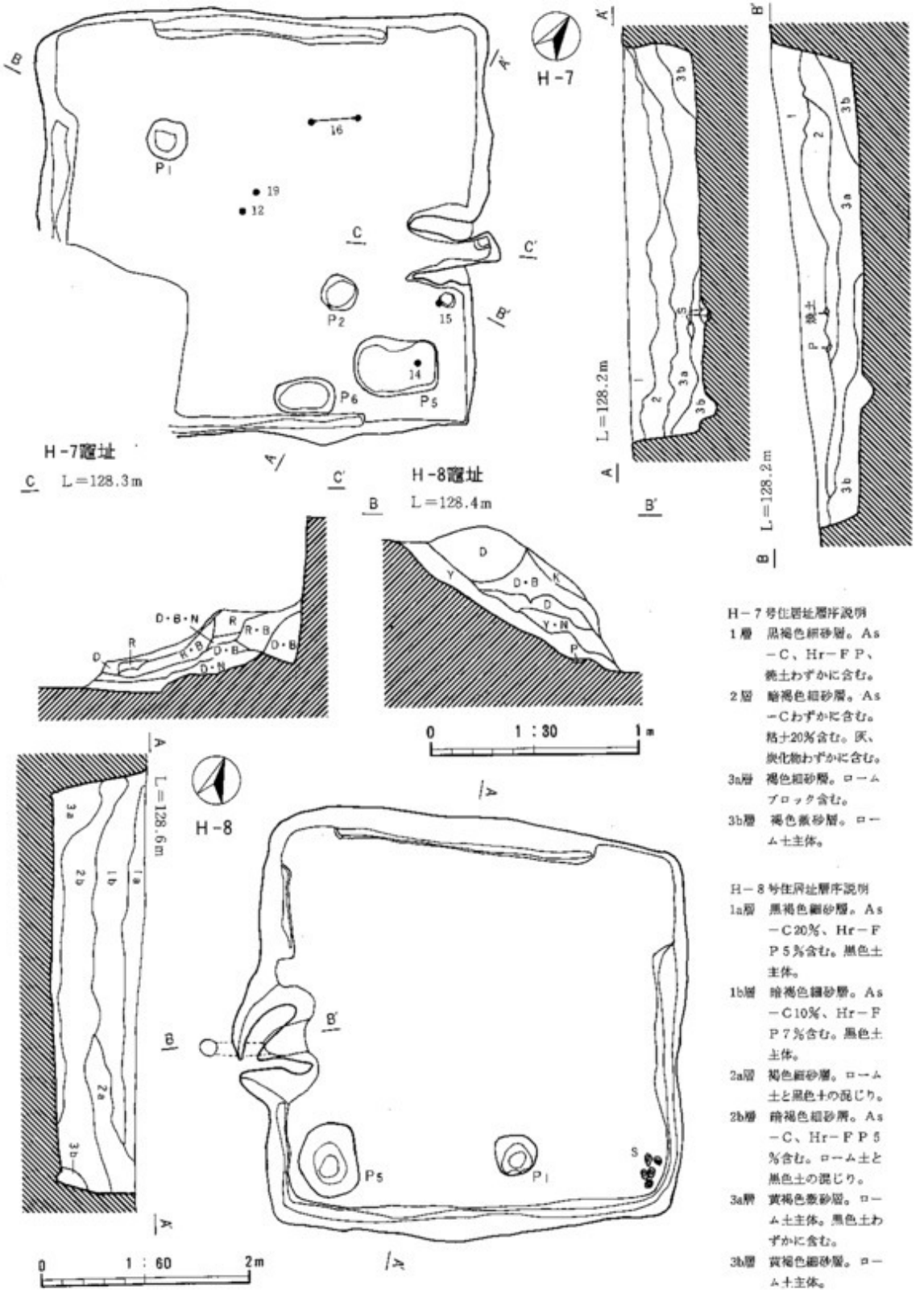
3層　褐色細砂層。ローム土ブロック20%含む。焼土、炭化物わずかに含む。

4a層　暗褐色軽砂層。ローム土ブロック、Hr－FPわずかに含む。

4b層　にぶい黄褐色軽砂層。ローム土主体。焼土わずかに含む。

4c層　黄褐色細砂層。ローム土主体。ローム土ブロック7%含む。

Fig. 37　D区H－6号住居址



H－7号住居址層序説明

1層　黒褐色細砂層。As－C、Hr－FP、焼土わずかに含む。

2層　暗褐色細砂層。As－Cわずかに含む。粘土20%含む。炭、炭化物わずかに含む。

3a層　褐色細砂層。ロームブロック含む。

3b層　褐色微砂層。ローム土主体。

H－8号住居址層序説明

1a層　黒褐色細砂層。As－C20%、Hr－FP5%含む。黒色土主体。

1b層　暗褐色細砂層。As－C10%、Hr－FP7%含む。黒色土主体。

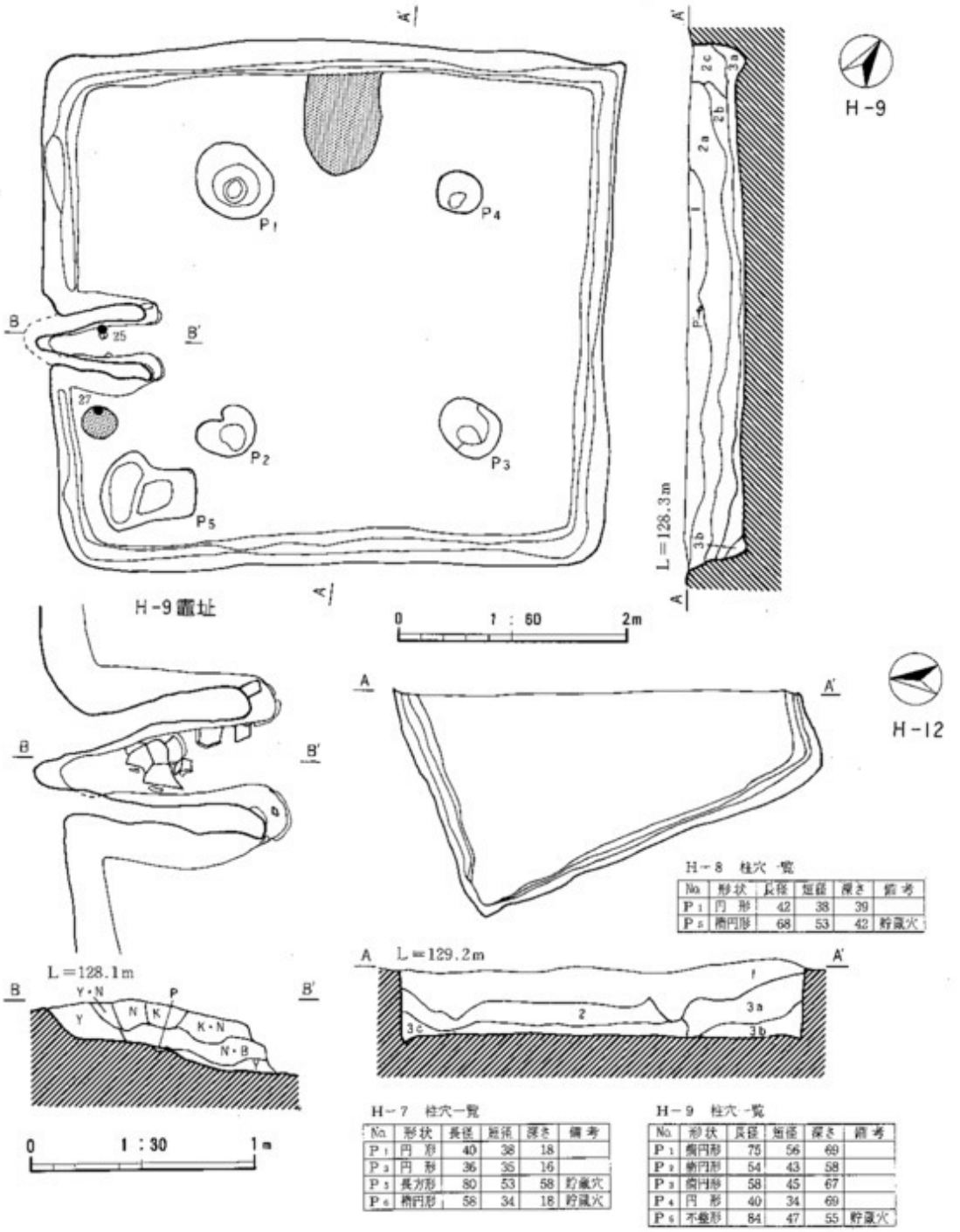
2a層　褐色細砂層。ローム土と黒色土の混じり。

2b層　暗褐色細砂層。As－C、Hr－FP5%含む。ローム土と黒色土の混じり。

3a層　黄褐色微砂層。ローム土主体。黒色土わずかに含む。

3b層　黄褐色細砂層。ローム土主体。

Fig. 38　D区H－7・8号住居址



H－8　柱穴一覧

No.	形状	長径	短径	深さ	備考
P 1	円　形	42	38	39	
P 5	楕円形	68	53	42	貯蔵穴

H－7　柱穴一覧

No.	形状	長径	短径	深さ	備考
P 1	円　形	40	38	18	
P 2	円　形	36	35	16	
P 3	長方形	80	53	58	貯蔵穴
P 5	楕円形	58	34	18	貯蔵穴

H－9　柱穴一覧

No.	形状	長径	短径	深さ	備考
P 1	楕円形	75	56	69	
P 2	楕円形	54	43	58	
P 3	楕円形	58	45	67	
P 4	円　形	40	34	69	
P 5	不整形	84	47	55	貯蔵穴

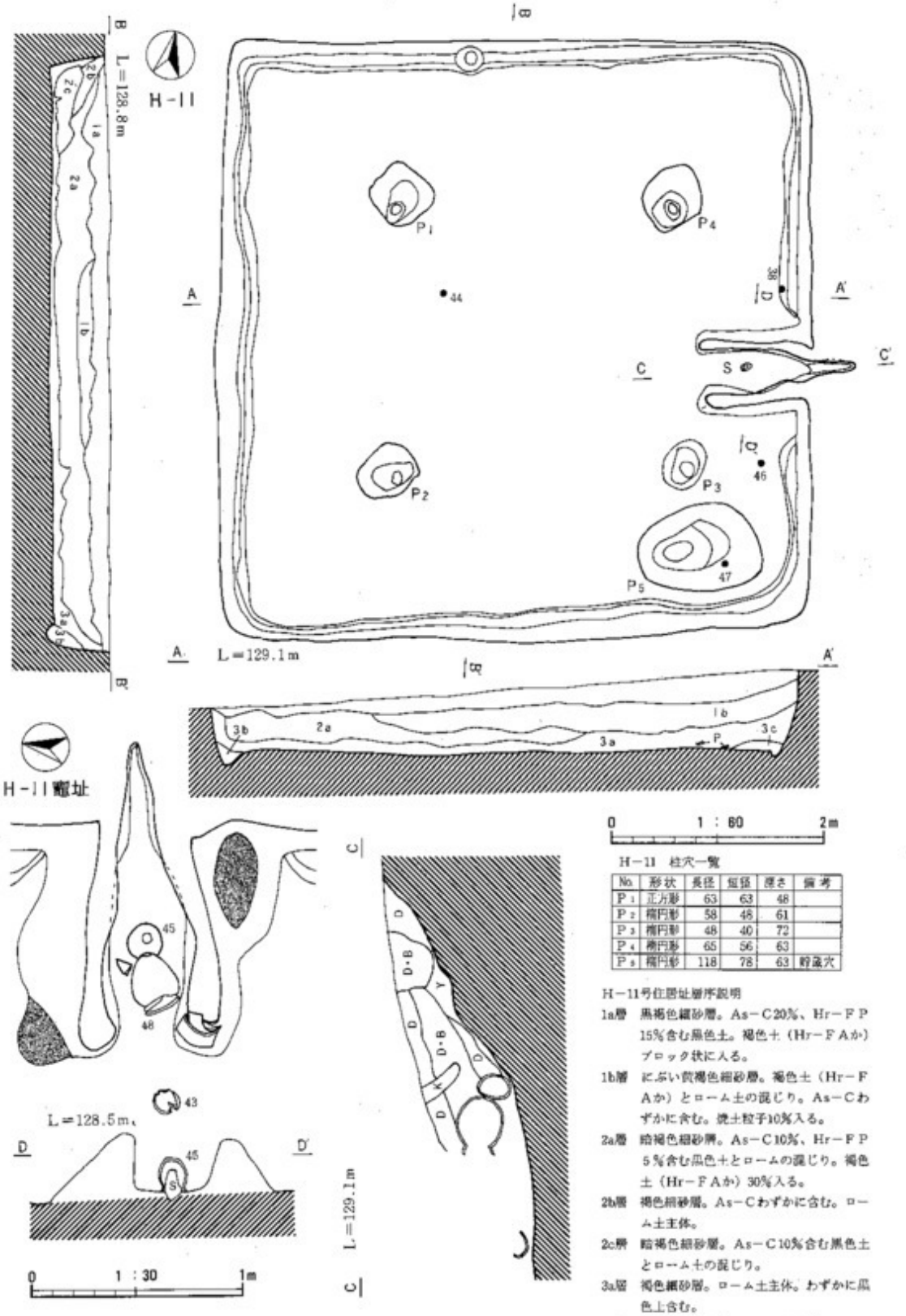
H－9号住居址層序説明

1層　黒褐色細砂層。As－C20%、Hr－FP10%含む。黒色土主体。
2a層　暗褐色細砂層。As－C10%、Hr－FPわずかに含む。ローム土と黒色土の混じり。
2b層　暗褐色細砂層。As－C5%、Hr－FPわずかに含む。ローム土と黒色土の混じり。
2c層　にぶい黄褐色微砂層。As－C20%含む、ローム土主体。わずかに黒色土含む。
3a層　褐色細砂層。As－Cわずかに含む、ローム土主体。わずかに黒色土含む。
3b層　黄褐色細砂層。ローム土主体。わずかに黒色土含む。

H－12号住居址層序説明

1層　黒褐色細砂層。ロームブロック7%含む、黒色土。
2層　褐色細砂層。ロームブロック10%含む。ローム土主体。
3a層　黄褐色微砂層。ローム土主体。わずかに黒色土含む。
3b層　褐色微砂層。ローム土主体。3a層より黒色土が多い。
3c層　黄褐色微砂層。ローム土主体。ロームブロックわずかに含む。

Fig. 39　D区H－9・12号住居址



H－11　柱穴一覧

No.	形状	長径	短径	深さ	備考
P 1	正方形	63	63	48	
P 2	楕円形	58	48	61	
P 3	楕円形	48	40	72	
P 4	楕円形	65	56	63	
P 5	楕円形	118	78	63	貯蔵穴

H－11号住居址層序説明

1a層　黒褐色細砂層。As－C20%、Hr－FP 15%含む黒色土。褐色土（Hr－FAか）ブロック状に入る。

1b層　にぶい黄褐色細砂層。褐色土（Hr－FAか）とローム土の混じり。As－Cわずかに含む。焼土粒子10%入る。

2a層　暗褐色細砂層。As－C10%、Hr－FP 5%含む黒色土とロームの混じり。褐色土（Hr－FAか）30%入る。

2b層　褐色細砂層。As－Cわずかに含む。ローム土主体。

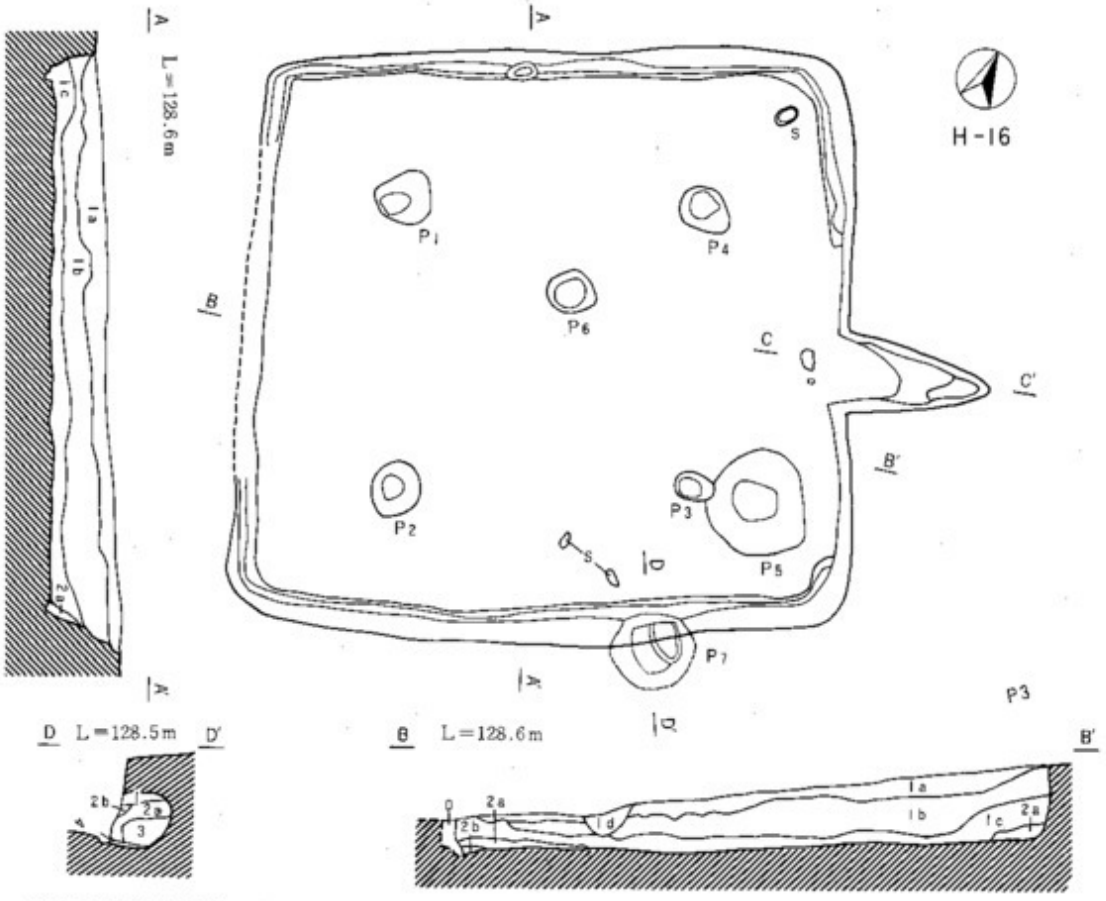
2c層　暗褐色細砂層。As－C10%含む黒色土とローム土の混じり。

3a層　褐色細砂層。ローム土主体。わずかに黒色土含む。

3b層　明黄褐色微砂層。ローム土主体。

3c層　褐色細砂層。わずかに黒色土、焼土含む。ローム土主体。

Fig. 40　D区H－11号住居址



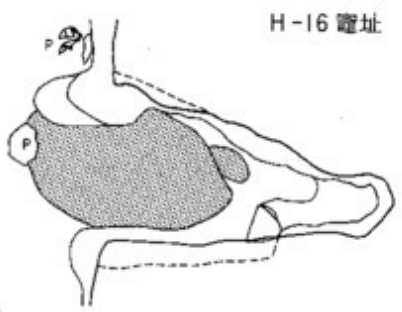
H−16号住居址P_7層序説明

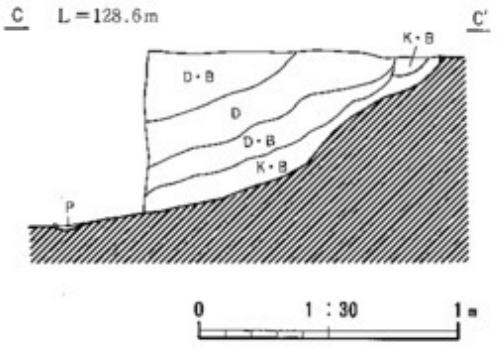
1層　黒褐色微砂層。
　　As−C 5％含む。
2a層　褐色微砂層。
　　ローム上主体。
2b層　暗褐色微砂層。
　　As−C 3％含む。
3層　黄褐色微砂層。
　　ローム土主体。
4層　暗褐色微砂層。
　　ロームブロック
　　3％含む。

0　1：60　2m

H−16　柱穴一覧

No	形状	長径	短径	深さ	備考
P1	楕円形	45	40	50	
P2	楕円形	45	37	41	
P3	楕円形	33	23	36	
P4	楕円形	43	35	37	
P5	楕円形	83	80	77	貯蔵穴
P6	楕円形	39	33	27	
P7	円　形	65	60	−	柱穴貯蔵穴





H−16号住居址層序説明

0層　黒褐色細砂層。耕作土。
1a層　褐色細砂層。As−C15％、Hr−FP7％含む。
1b層　暗褐色細砂層。As−C10％、Hr−FP10％含む。ロームブロック5％含む。
1c層　黒褐色細砂層。As−C、Hr−FP5％含む。ロームブロック20％含む。
1d層　にぶい黄褐色細砂層。As−C、Hr−FP5％含む。ロームブロック5％含む。
2a層　黒褐色細砂層。As−C、Hr−FPわずかに含む。ロームと黒色土の混じり。
2b層　褐色細砂層。ローム上と黒色土の混じり。

Fig. 41　D区H−16号住居址

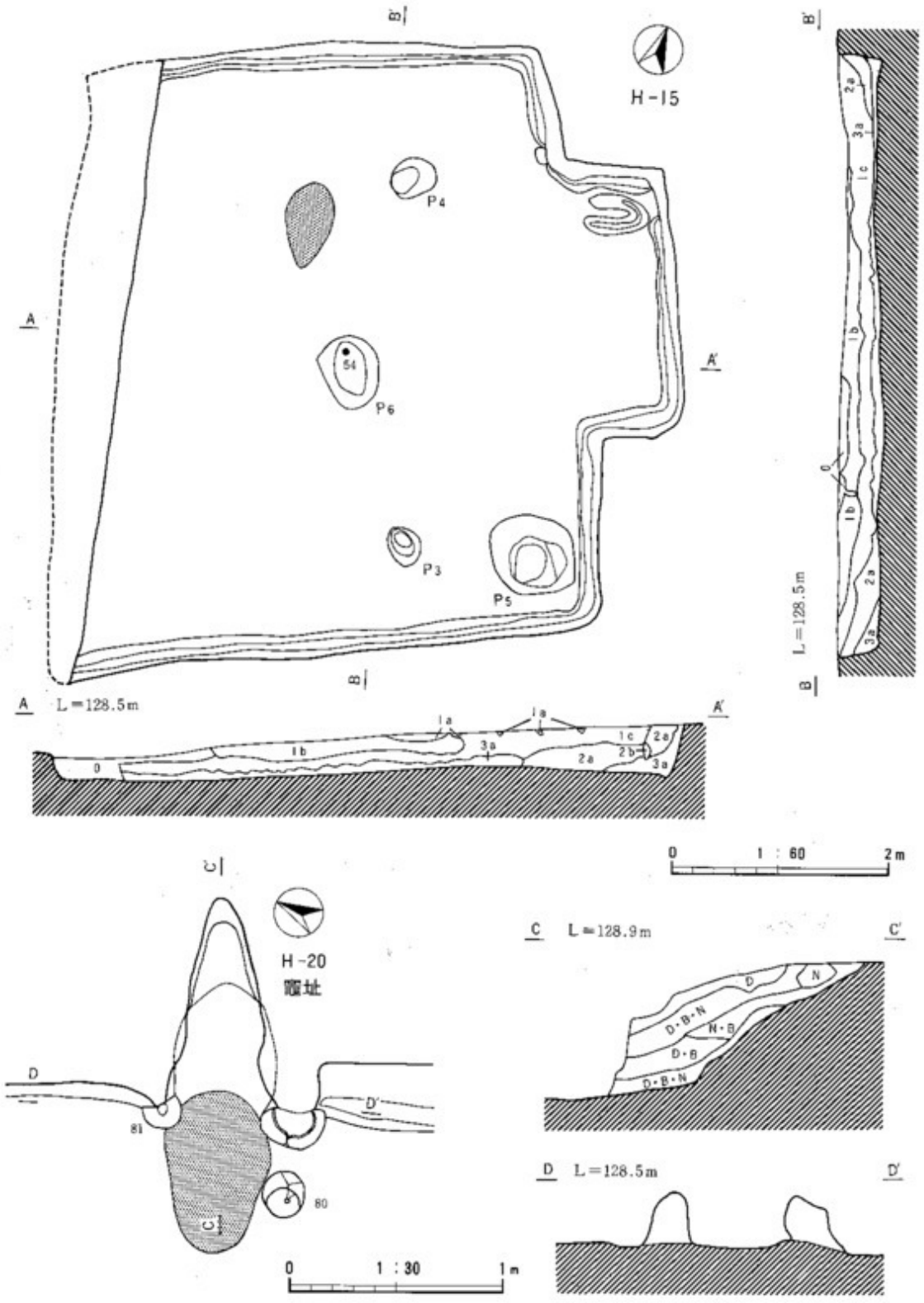
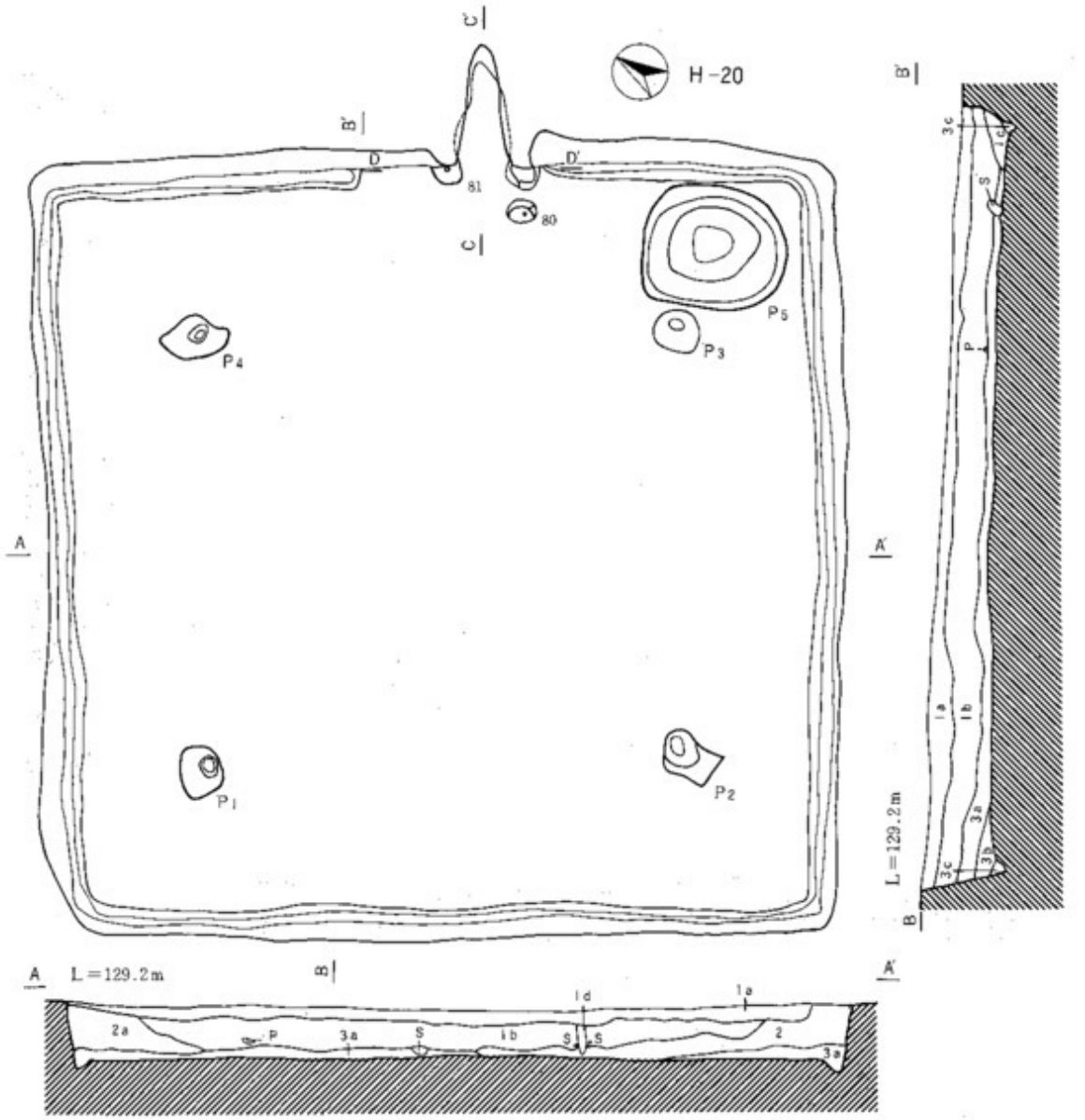


Fig. 42　D区H－15号住居址



0 1:60 2m

H-15 柱穴一覧

No.	形状	長径	短径	深さ	備考
P3	楕円形	37	31	46	
P4	楕円形	42	37	51	
P5	円 形	88	78	68	貯蔵穴
P6	楕円形	68	52	15	

H-20 柱穴一覧

No.	形状	長径	短径	深さ	備考
P1	台 形	44	34	53	
P2	不整形	53	37	64	
P3	楕円形	40	33	59	
P4	不整形	56	36	74	
P5	長方形	121	102	85	貯蔵穴

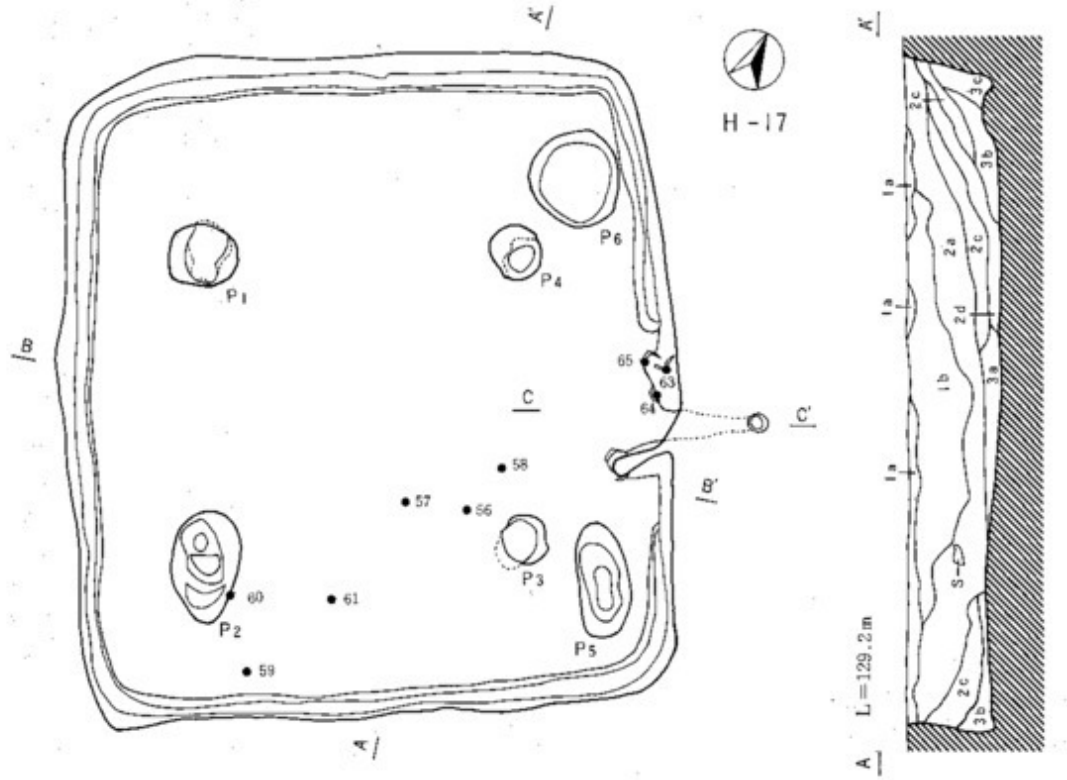
H-15号住居址層序説明

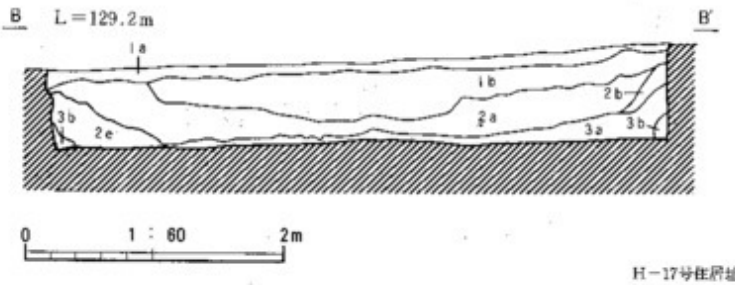
0層 耕作土。
1a層 褐色粗砂層。Hr-FA主体。Hr-FPと黒色土含む。
1b層 褐色細砂層。ローム土と黒色土の混じり。
1c層 黒褐色細砂層。As-C10%、Hr-FP5%含む黒色土主体。
2a層 にぶい黄褐色粗砂層。Hr-FA主体。As-Cわずかに含む。
2b層 暗褐色細砂層。木の根の跡。As-Cわずかに含む。
3a層 にぶい黄褐色細砂層。ローム土主体。
3b層 褐色細砂層。ローム土主体。As-C、ロームブロックわずかに含む。

H-20号住居址層序説明

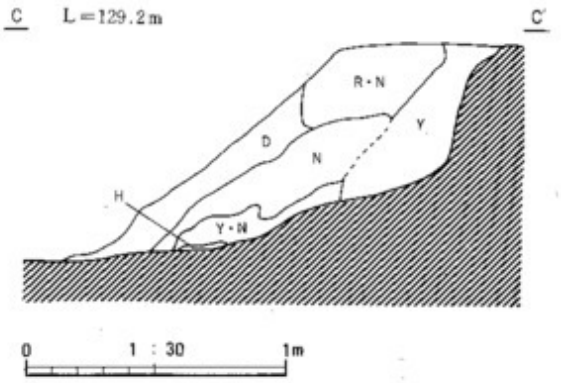
1a層 暗褐色細砂層。As-C20%、Hr-FP10%含む。
1b層 褐色細砂層。As-C30%、Hr-FP5%含む。
1c層 暗褐色細砂層。As-C10%、Hr-FPわずかに含む。
1d層 にぶい黄褐色微砂層。ローム土主体。木の根の跡か。
2層 褐色細砂層。黒色土とローム土の混じり。
3a層 黄褐色細砂層。ローム土主体。焼土20%含む。
3b層 褐色細砂層。ロームブロック20%含む。
3c層 褐色細砂層。ローム土と黒色土の混じり。

Fig. 43 D区H-20号住居址





0　1：60　2m



0　1：30　1m

H－17　柱穴一覧

No.	形状	長径	短径	深さ	備考
P1	楕円形	53	48	66	
P2	楕円形	86	53	75	
P3	楕円形	40	34	62	
P4	楕円形	42	34	68	
P5	楕円形	87	40	56	貯蔵穴
P6	円　形	75	68	26	貯蔵穴

H－17号住居址層序説明

1a層　暗褐色細砂層。As－C10%、Hr－FPわずかに含む。黒色土主体。

1b層　黒褐色細砂層。As－C20%、Hr－FP5%含む。ローム土と黒色土の混じり。

2a層　褐色細砂層。As－Cわずかに含む。ローム土と黒色土の混じり。

2b層　明褐色細砂層。As－C、Hr－FPわずかに含む。ローム土主体。焼土わずかに含む。

2c層　黒褐色細砂層。As－Cわずかに含む。黒色土主体。

2d層　褐色細砂層。As－Cわずかに含む。ローム土と黒色土の混じり。

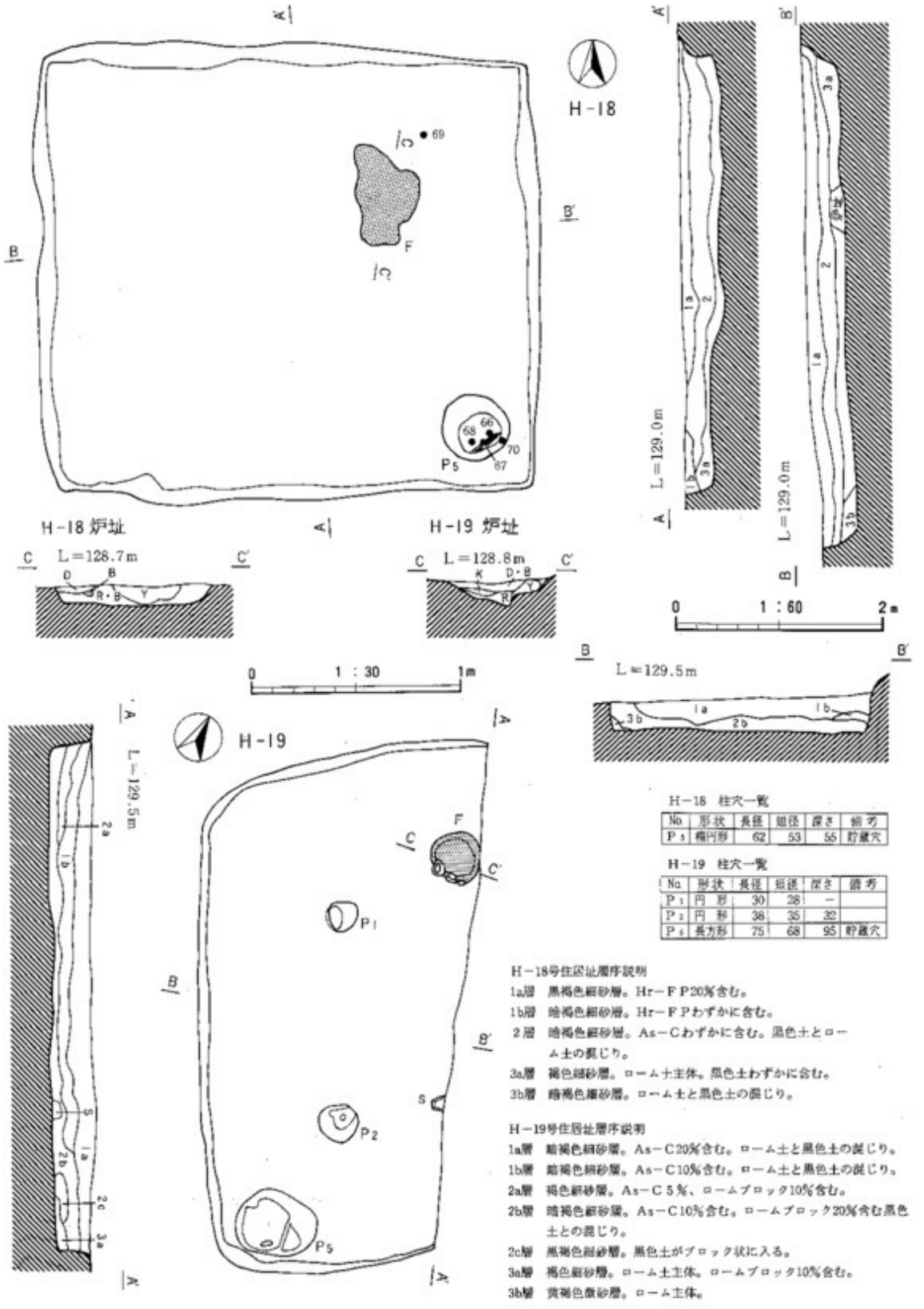
2e層　黒褐色細砂層。As－Cわずかに含む。ローム土と黒色土の混じり。

3a層　黄褐色細砂層。ローム土、ロームブロック主体。わずかに黒色土含む。

3b層　暗褐色細砂層。ローム土と黒色土の混じり。ロームブロックわずかに含む。

3c層　黄褐色微砂層。ローム土、ロームブロック主体。わずかに黒色土含む。

Fig. 44　D区H－17号住居址



H－18　柱穴一覧

No.	形状	長径	短径	深さ	備考
P 5	楕円形	62	53	56	貯蔵穴

H－19　柱穴一覧

No.	形状	長径	短径	深さ	備考
P 1	円形	30	28	—	
P 2	円形	38	35	32	
P 5	長方形	75	68	95	貯蔵穴

H－18号住居址層序説明

1a層　黒褐色細砂層。Hr－FP20%含む。
1b層　暗褐色細砂層。Hr－FPわずかに含む。
2層　暗褐色細砂層。As－Cわずかに含む。黒色土とローム土の混じり。
3a層　褐色細砂層。ローム土主体。黒色土わずかに含む。
3b層　暗褐色細砂層。ローム土と黒色土の混じり。

H－19号住居址層序説明

1a層　暗褐色細砂層。As－C20%含む。ローム土と黒色土の混じり。
1b層　暗褐色細砂層。As－C10%含む。ローム土と黒色土の混じり。
2a層　褐色細砂層。As－C 5%、ロームブロック10%含む。
2b層　暗褐色細砂層。As－C10%含む。ロームブロック20%含む黒色土との混じり。
2c層　黒褐色細砂層。黒色土がブロック状に入る。
3a層　褐色細砂層。ローム土主体。ロームブロック10%含む。
3b層　黄褐色細砂層。ローム主体。

Fig. 45　D区H－18・19号住居址

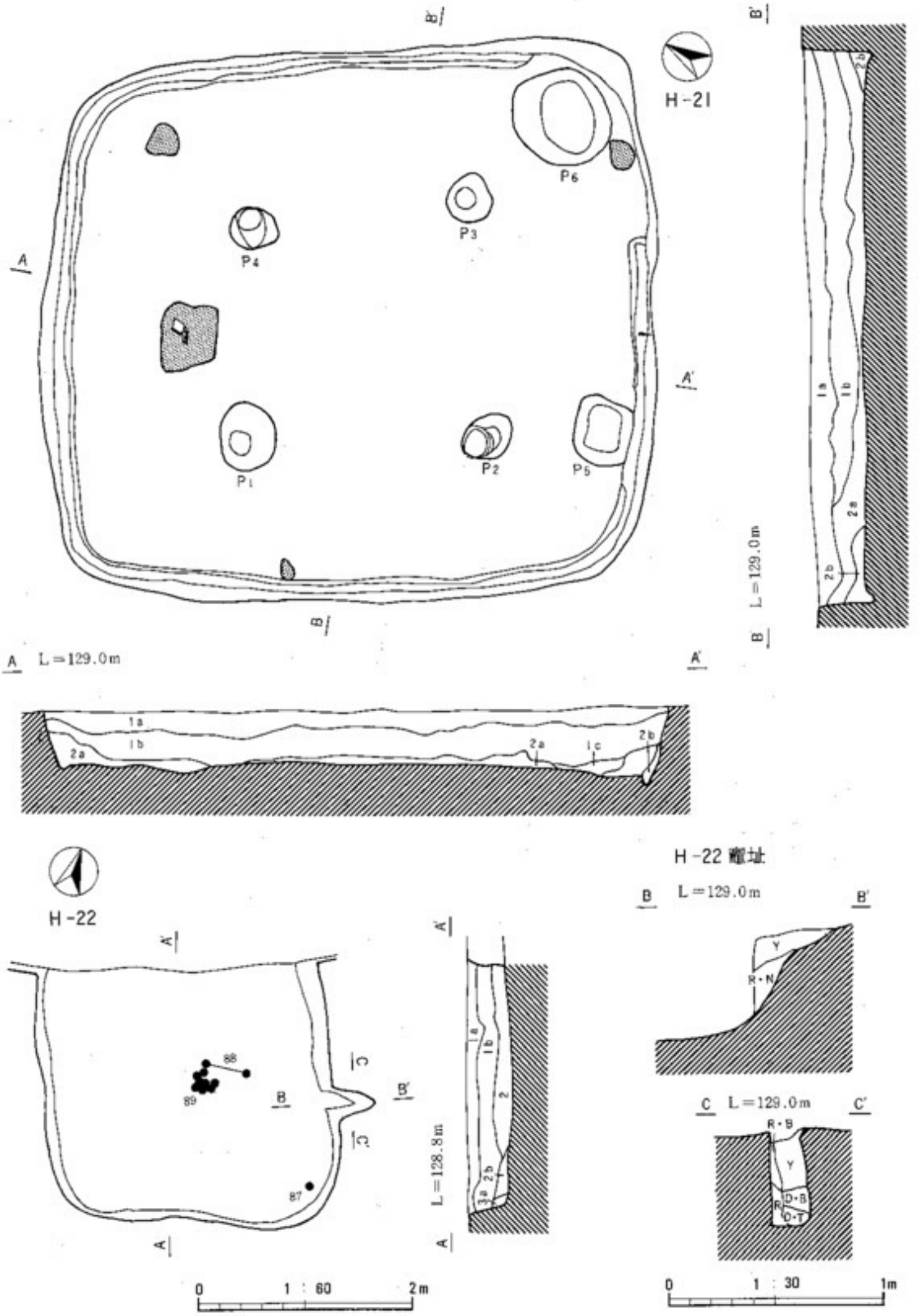
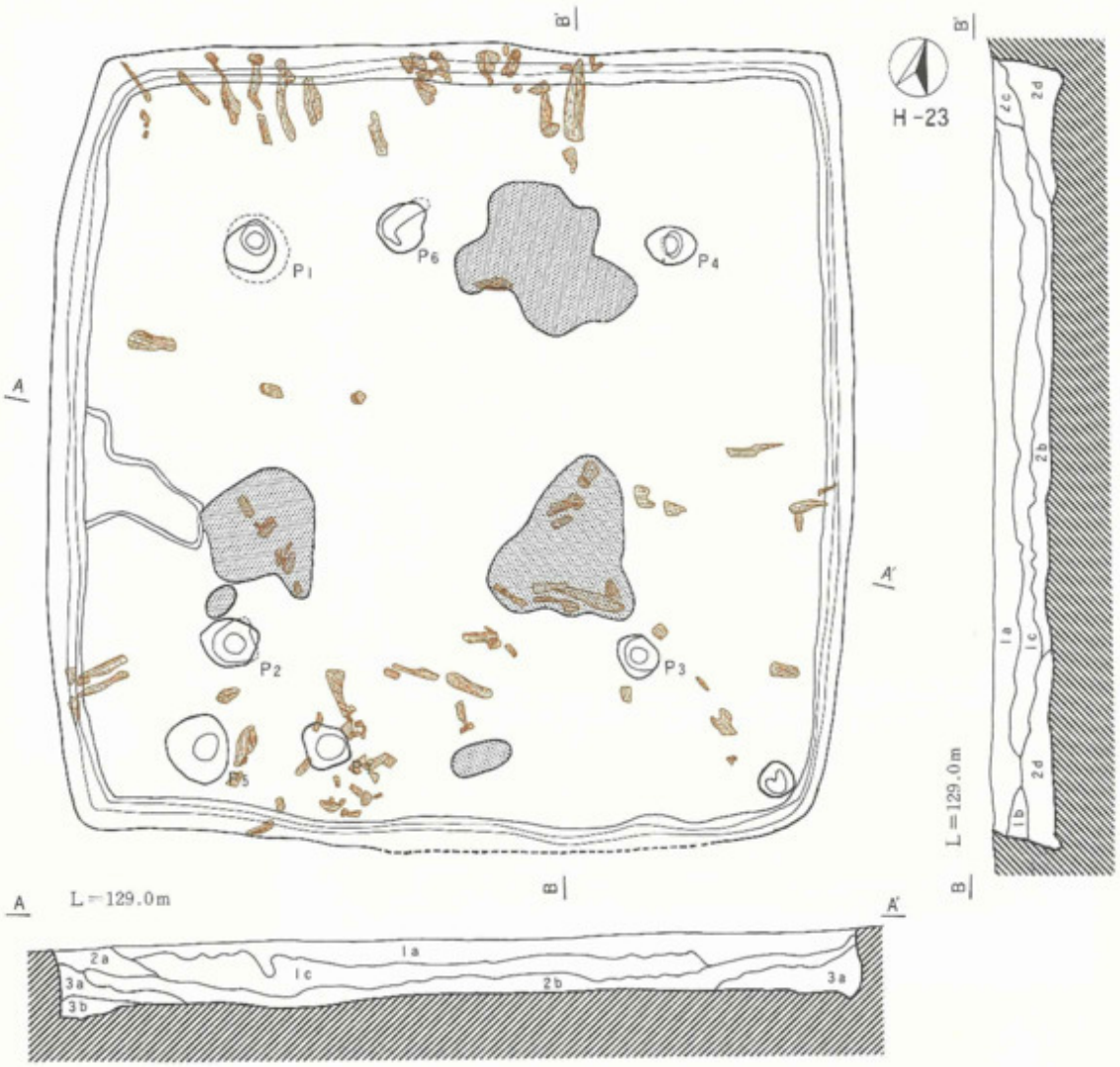


Fig. 46　D区H－21・22号住居址



H－21　柱穴一覧

No.	形状	長径	短径	深さ	備考
P 1	楕円形	58	50	60	
P 2	楕円形	50	38	58	
P 3	楕円形	46	40	64	
P 4	楕円形	44	38	61	
P 5	長方形	64	52	38	貯蔵穴
P 6	円　形	98	96	71	貯蔵穴

H－21号住居址層序説明

1a層　暗褐色細砂層。As－C30%、Hr－F P 5%含む。褐色土。

1b層　褐色微砂層。As－C10%含む。ローム土と黒色土の混じり。

1c層　暗褐色細砂層。As－C10%、ロームブロック20%含む。

2a層　黄褐色微砂層。ローム土主体。わずかに黒色土含む。

2b層　褐色微砂層。ローム土主体。

H－22号住居址層序説明

1a層　褐色細砂層。As－C15%、Hr－F P 5%含む。

1b層　暗褐色細砂層。As－C10%、Hr－F Pわずかに含む。黒色土主体。

2層　暗褐色細砂層。As－C 5%含む。黒色炭化物20%含む。

3a層　明褐色微砂層。黒色炭化物15%、赤褐色の焼土わずかに含む。

3b層　褐色細砂層。ローム土主体。黒色土わずかに含む。

H－23　柱穴一覧

No.	形状	長径	短径	深さ	備考
P 1	楕円形	41	36	79	
P 2	円　形	46	39	84	
P 3	楕円形	34	27	90	
P 4	楕円形	38	28	77	
P 5	円　形	50	48	74	貯蔵穴
P 6	楕円形	42	32	18	
P 7	楕円形	45	35	42	

0　1：60　2m

H－23号住居址層序説明

1a層　暗褐色細砂層。As－C10%含む。

1b層　褐色細砂層。As－C 5%、Hr－F P 5%含む。黒色土とローム土の混じり。

1c層　黒褐色細砂層。As－C30%、Hr－F P 5%含む。黒色土主体。

2a層　褐色細砂層。ロームブロック含むローム土と黒色土との混じり。

2b層　暗褐色細砂層。ローム土と黒色土の混じり。

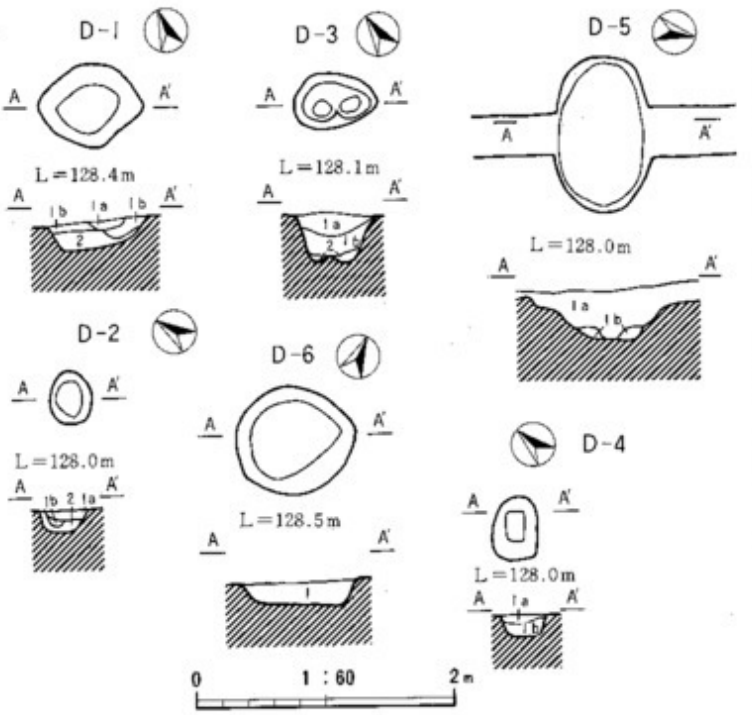
2c層　褐色細砂層。黒色土わずかに含む。

2d層　暗褐色細砂層。As－Cわずかに含む。

3a層　褐色細砂層。焼土ブロック、炭化物わずかに含む。

3b層　暗褐色細砂層。ロームブロック10%含む。ローム土と黒色土の混じり。

Fig. 47　D区H－23号住居址



D－1、2号土坑層序説明
1a層　黒褐色細砂層。As－C10%含む黒色土。
1b層　暗褐色細砂層。As－C20%含む。
2層　褐色細砂層。ローム土主体。

D－3号土坑層序説明
1a層　黒褐色細砂層。As－C10%、Hr－FPわずかに含む。
1b層　暗褐色細砂層。As－C10%含む。
2層　褐色粗砂層。ローム土主体。

D－4号土坑層序説明
1a層　暗褐色細砂層。褐色土主体
1b層　褐色礫砂層。ローム土主体。

D－5号土坑層序説明
1a層　暗褐色細砂層。As－C20%,Hr－FPわずかに含む

D－6号土坑層序説明
1層　暗褐色細砂層。As－Cをわずかに含む。

Fig. 48　D区D－1～6号土坑

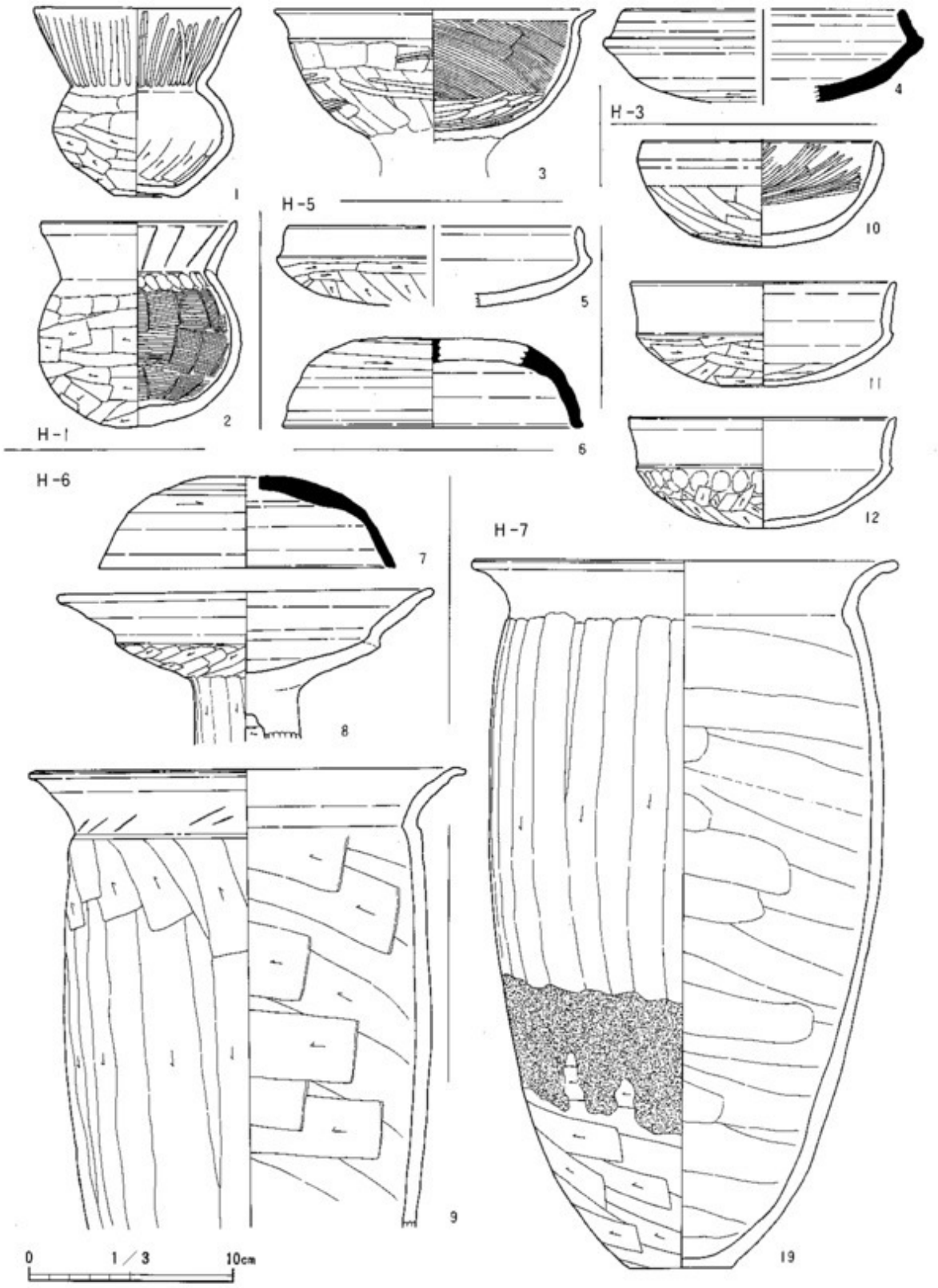


Fig. 49　D区H－1・3・5～7号住居址出土の土器

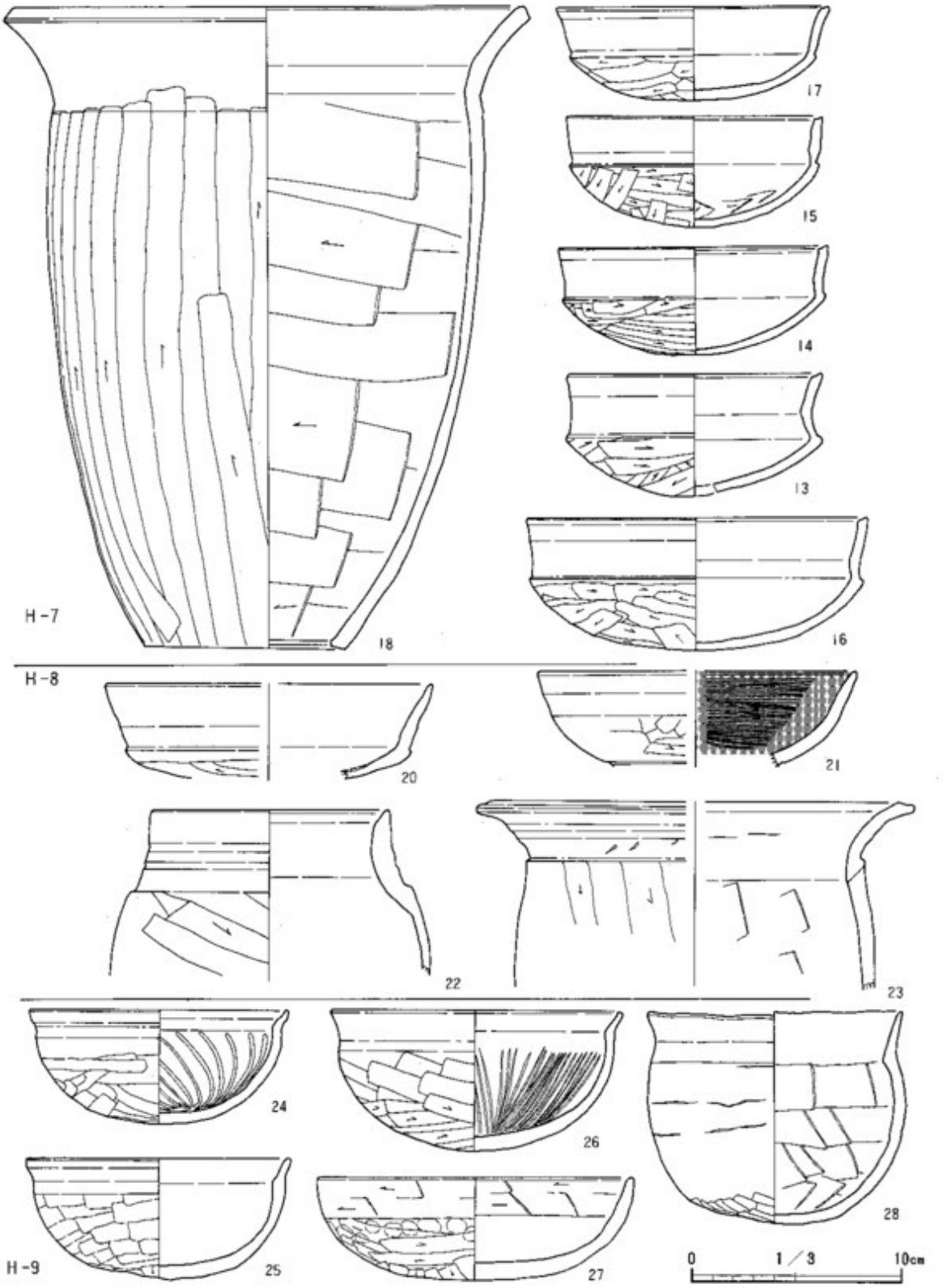


Fig. 50　D区H－7～9号住居址出土の土器

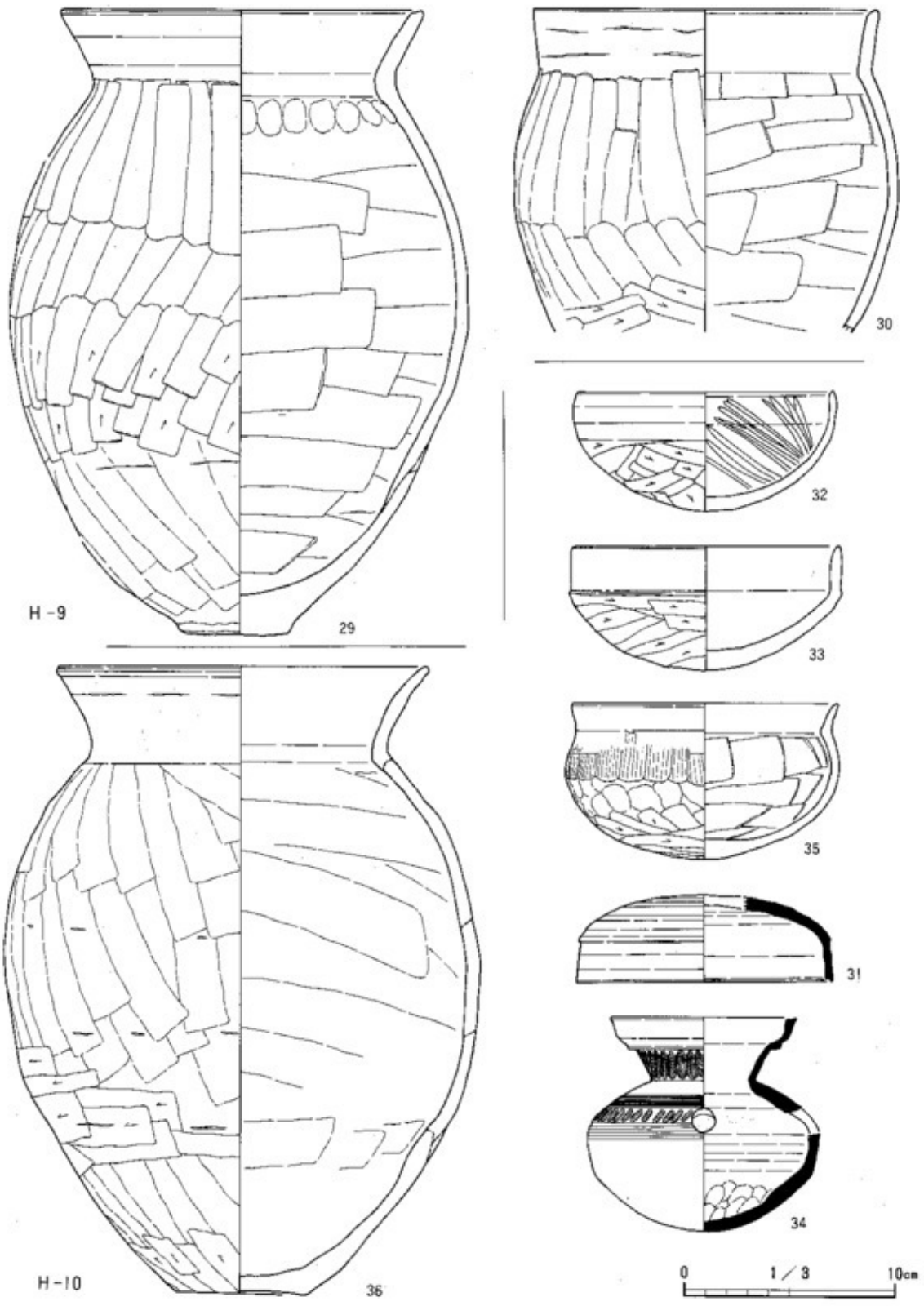


Fig. 51　D区H－9・10号住居址出土の土器

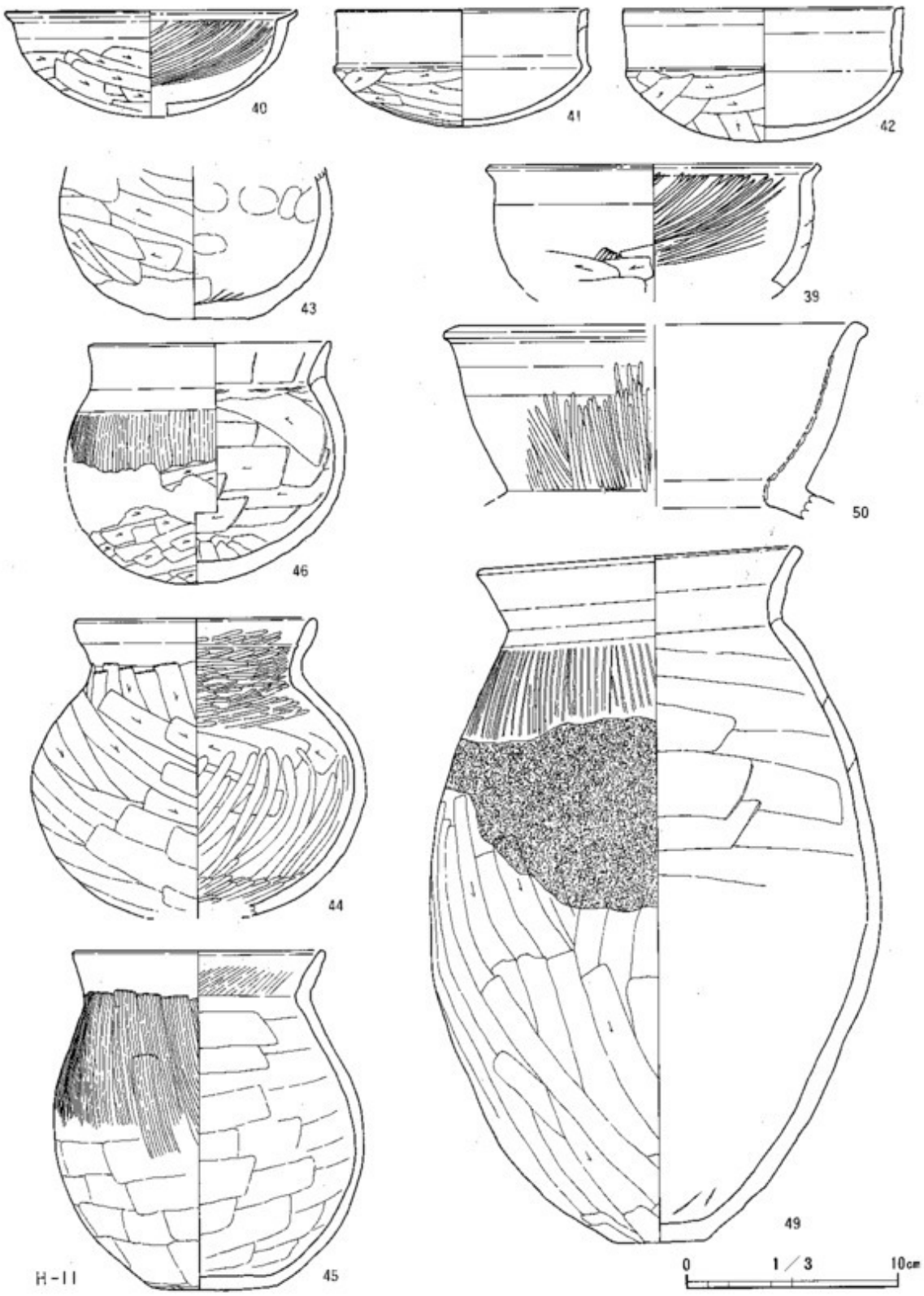


Fig. 52　D区H－11号住居址出土の土器

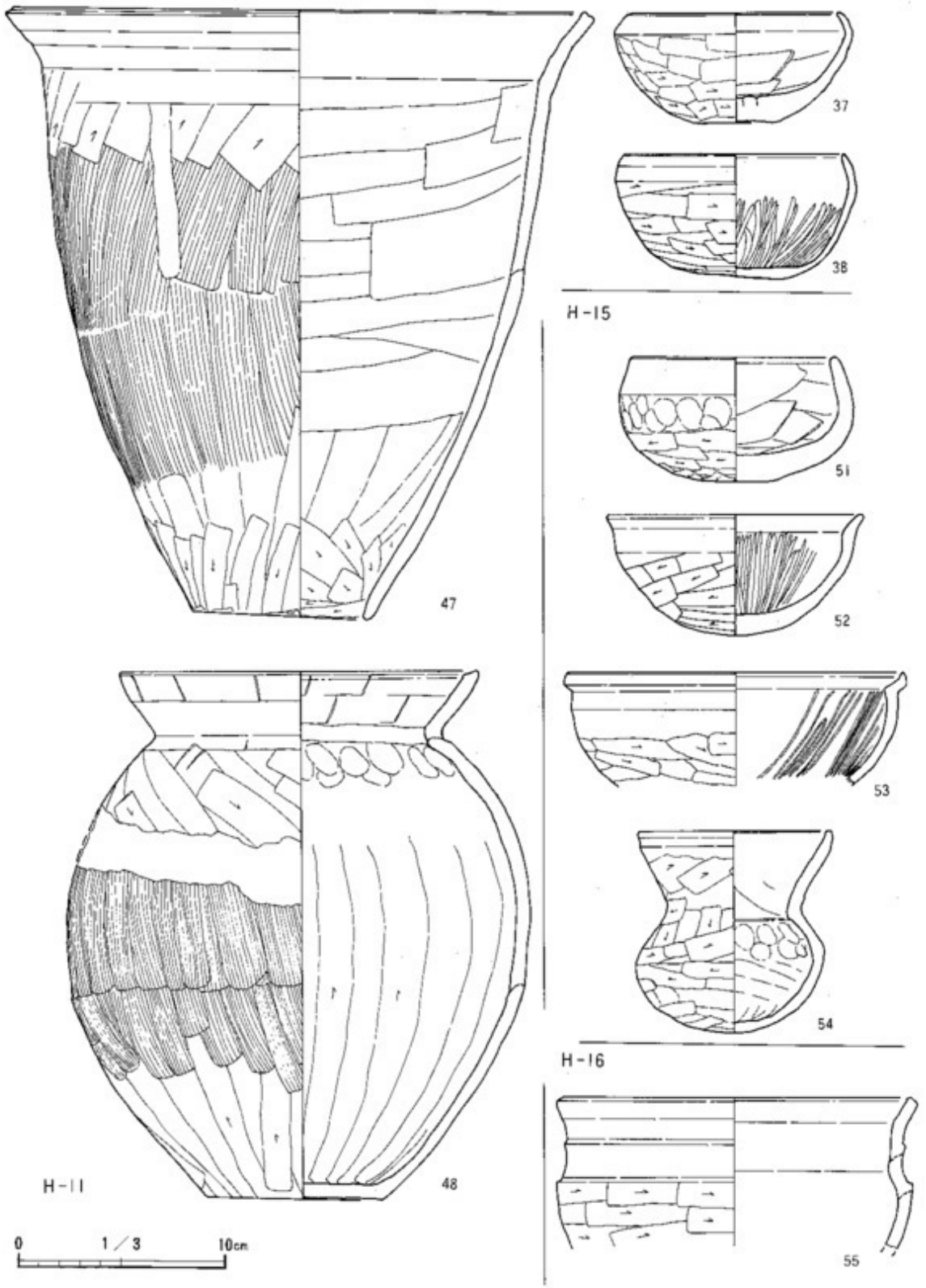


Fig. 53　D区H－11・15・16号住居址出土の土器

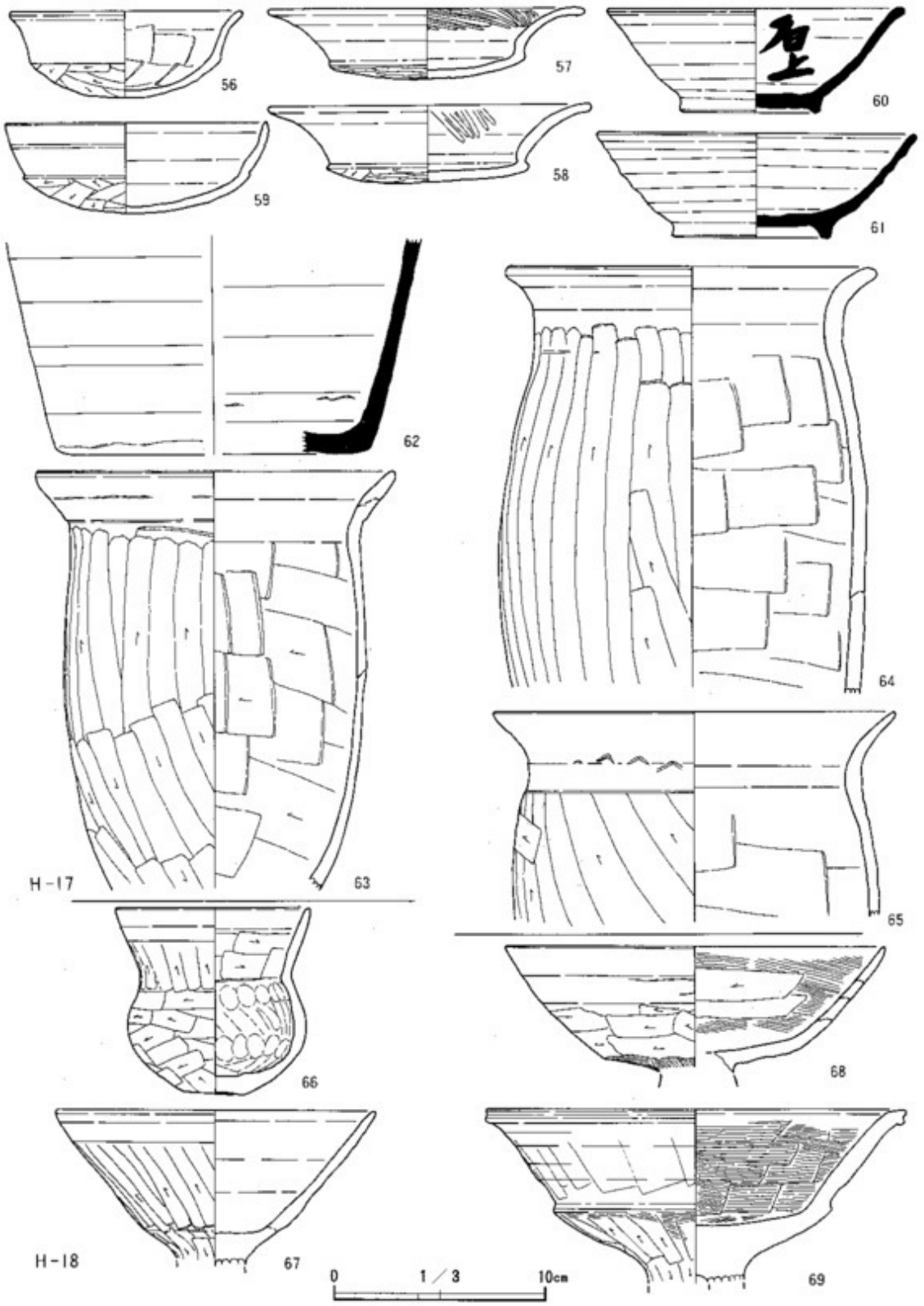


Fig. 54　D区H－17・18号住居址出土の土器

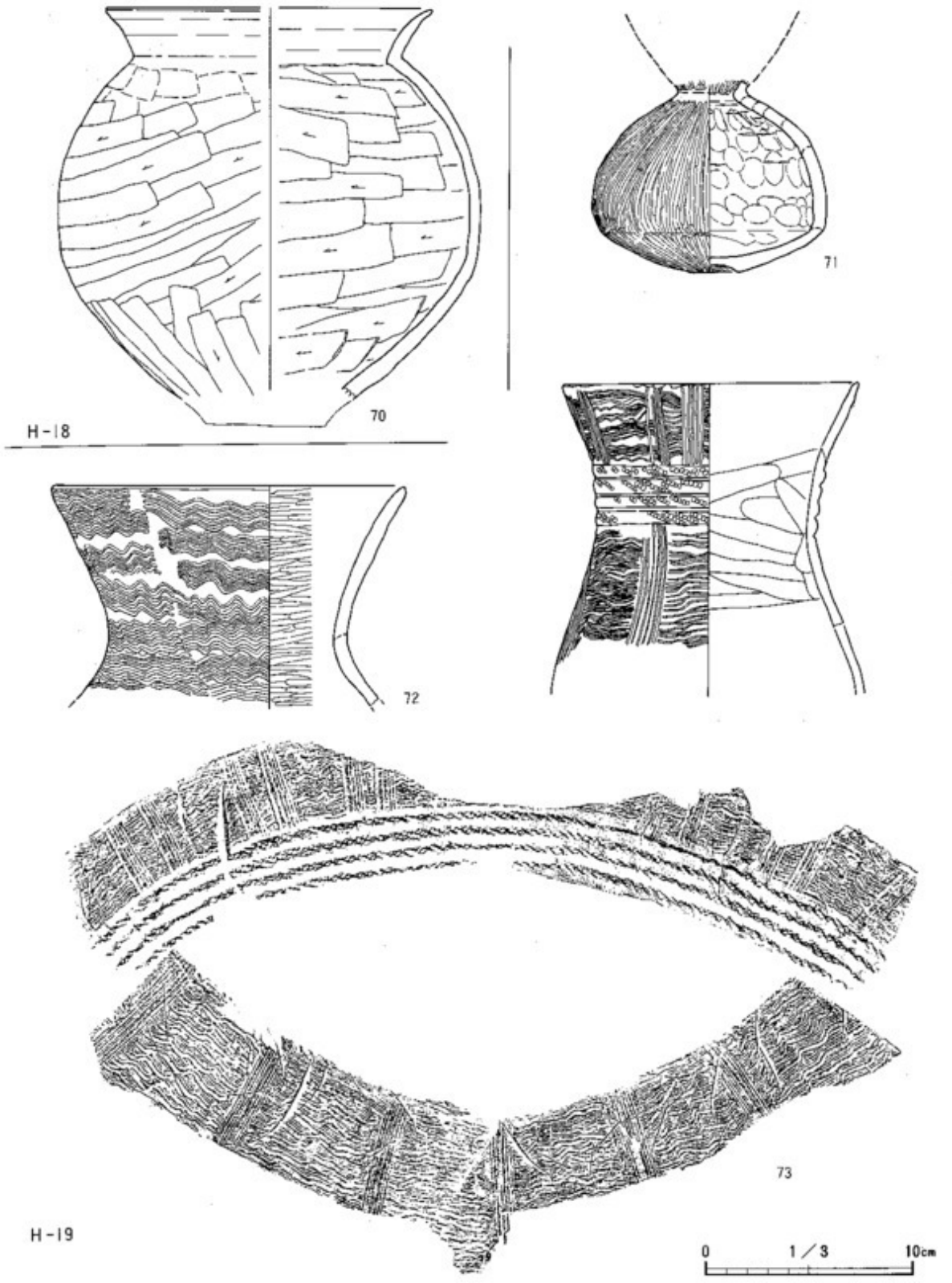


Fig. 55　D区H－18・19号住居址出土の土器

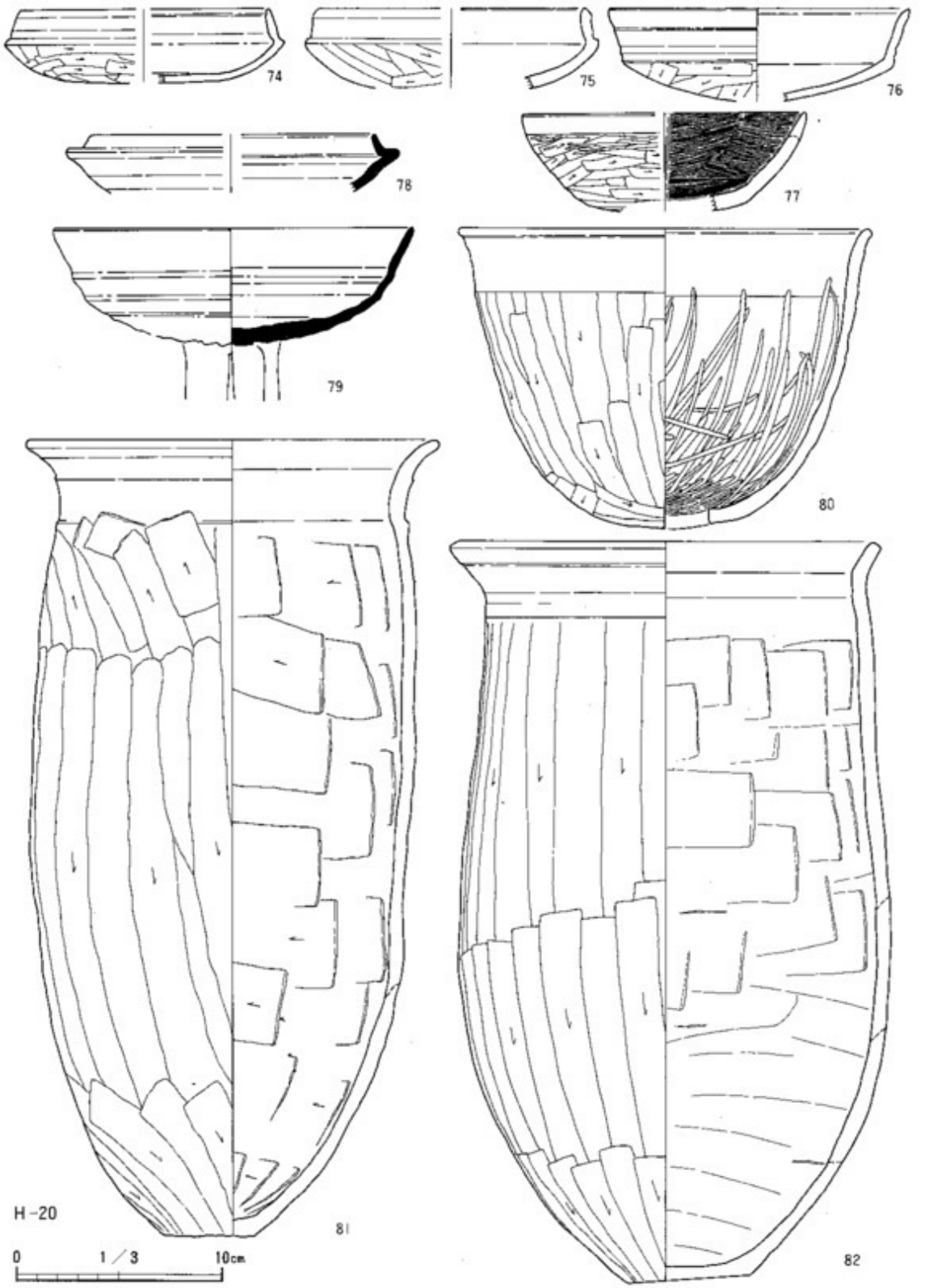


Fig. 56　D区H－20号住居址出土の土器

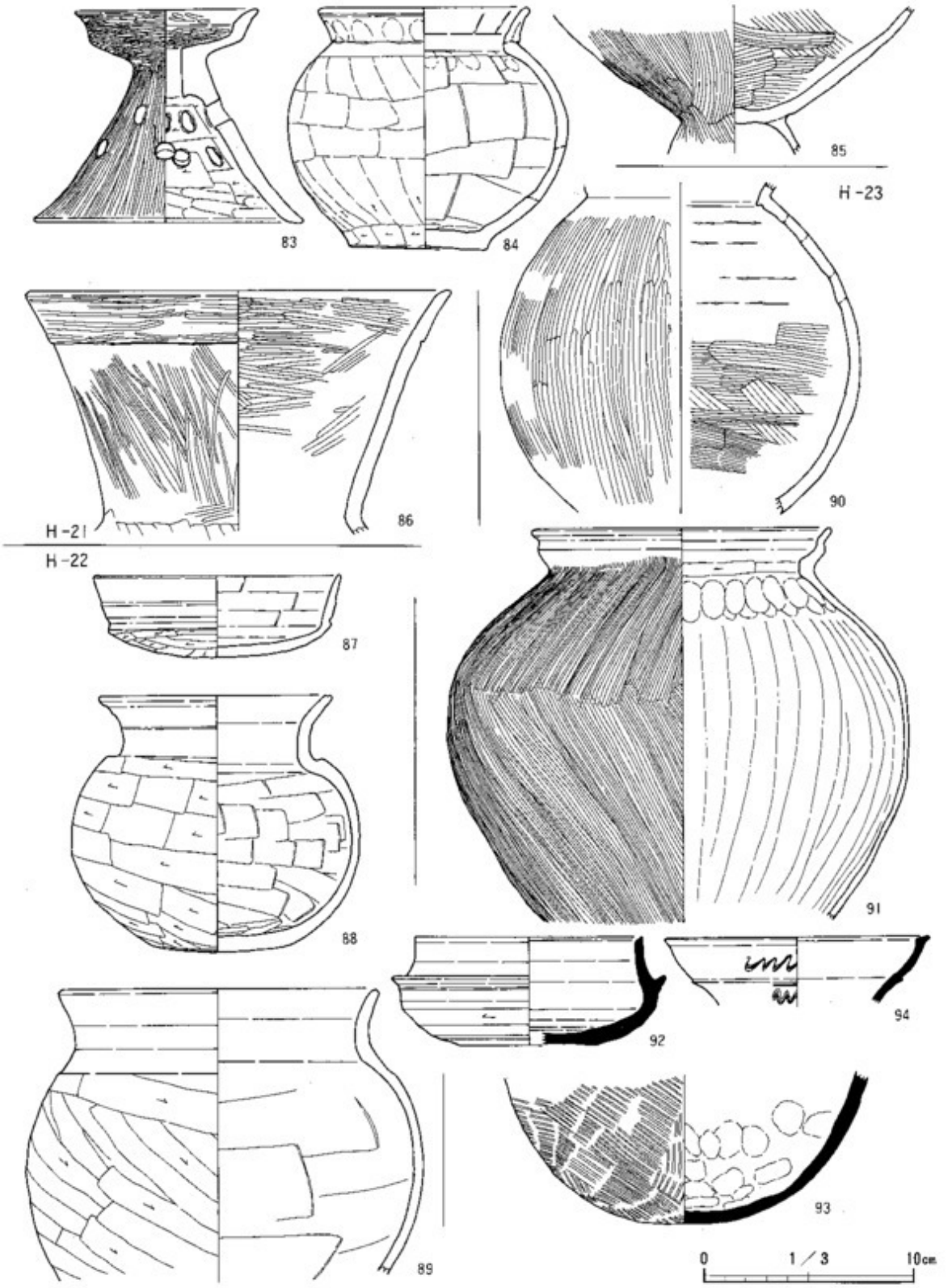


Fig. 57　D区H－21～23号住居址出土の土器

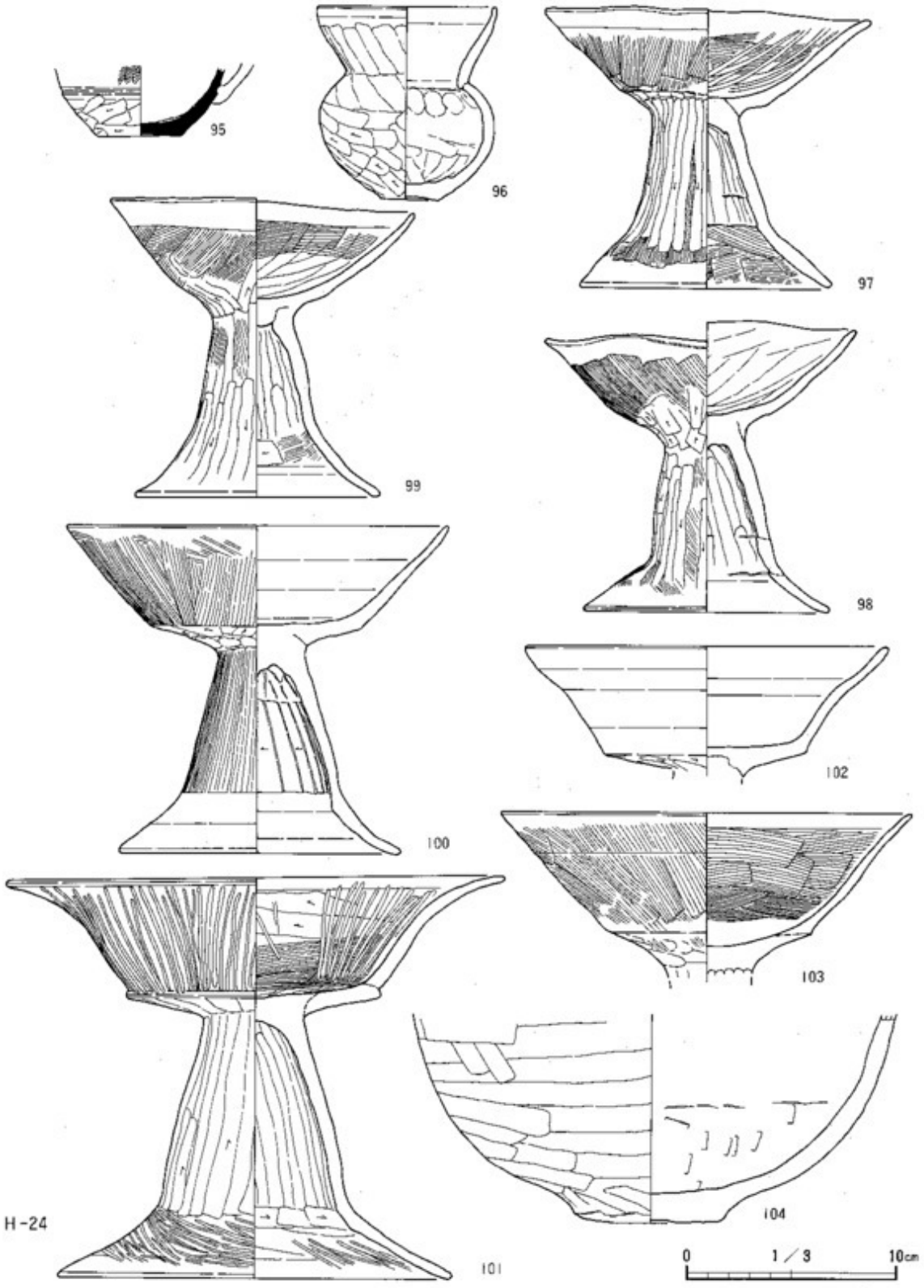


Fig. 58　D区H－24号住居址出土の土器

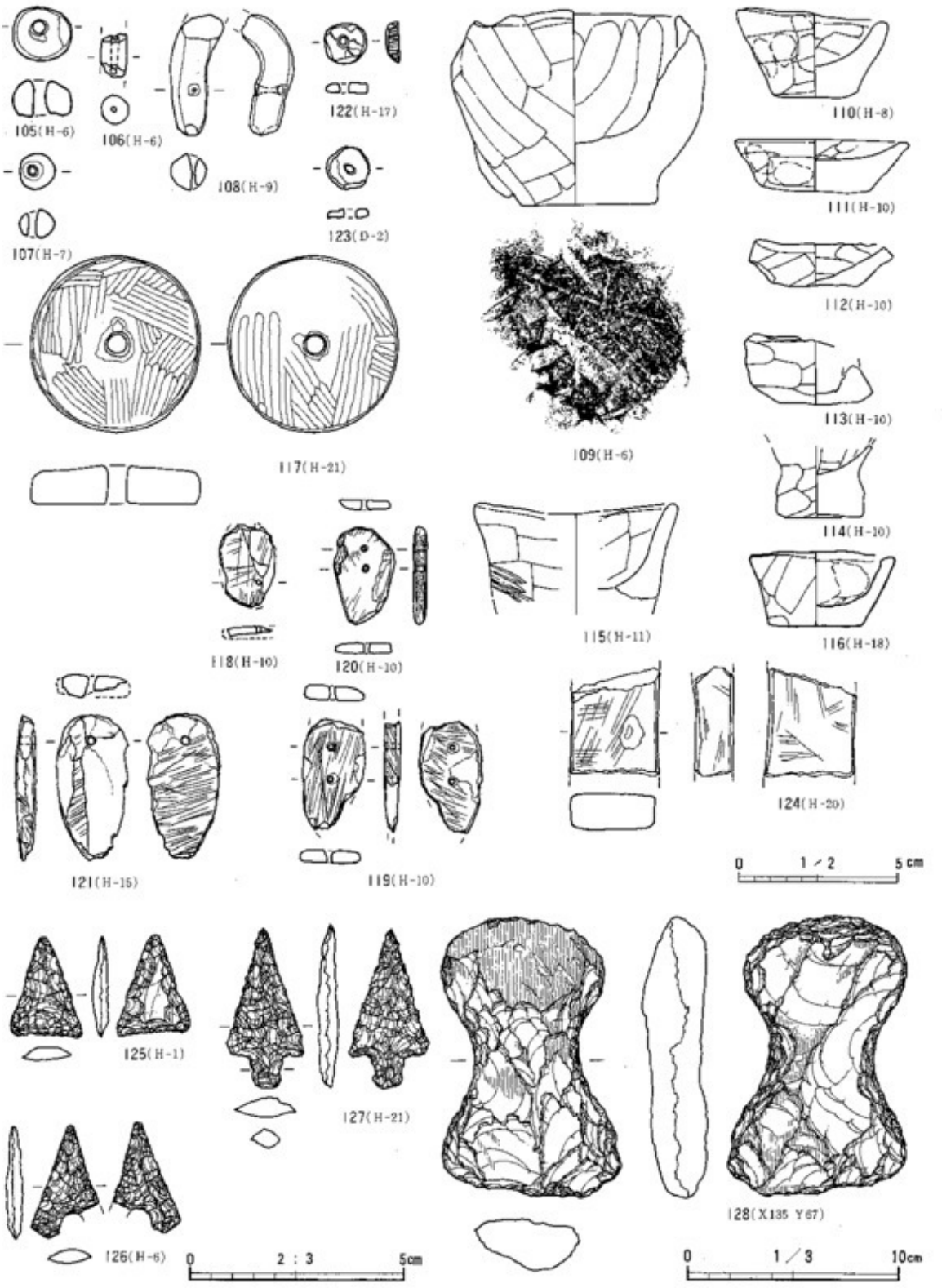


Fig. 59 D区出土の土製品・石器・石製品

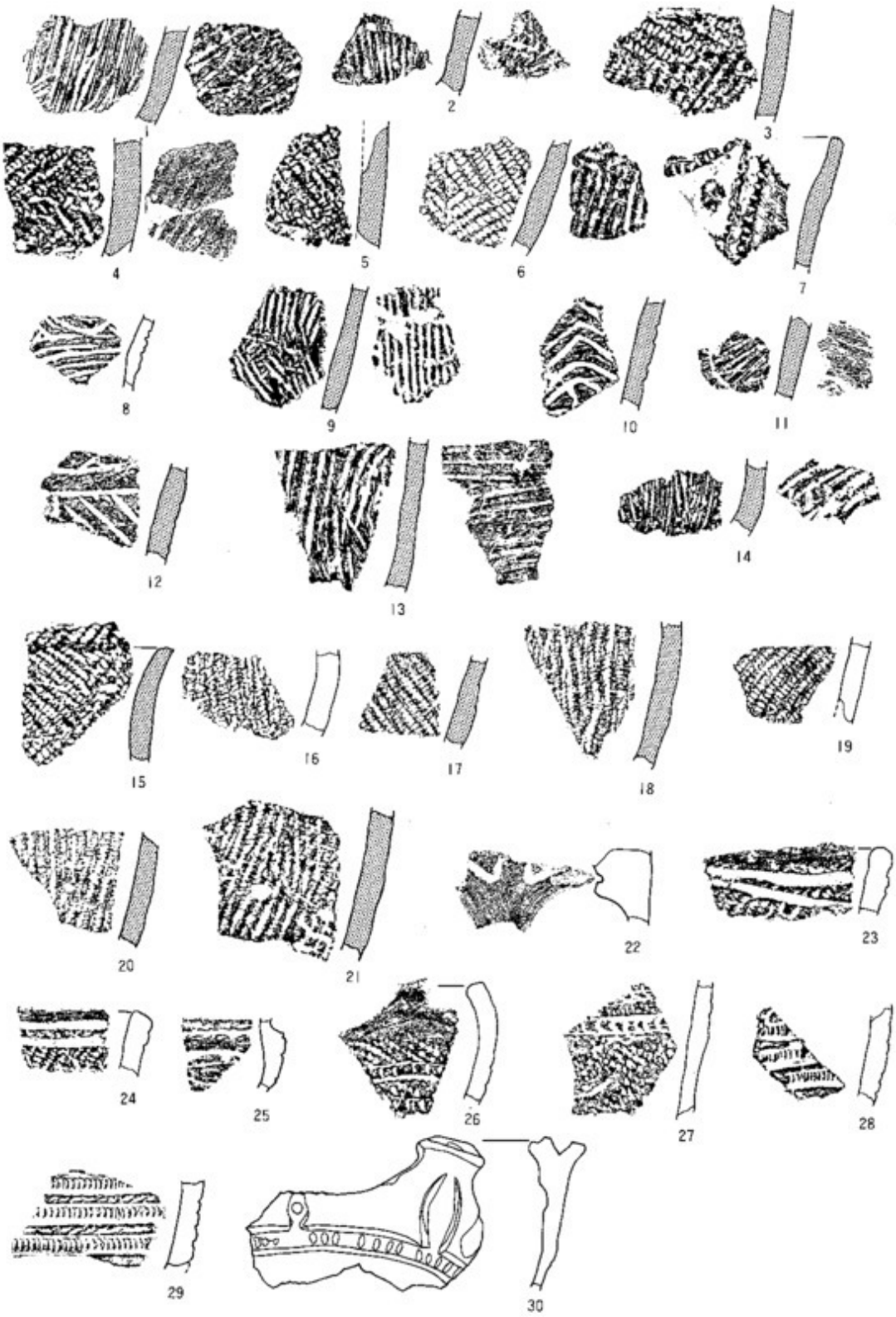
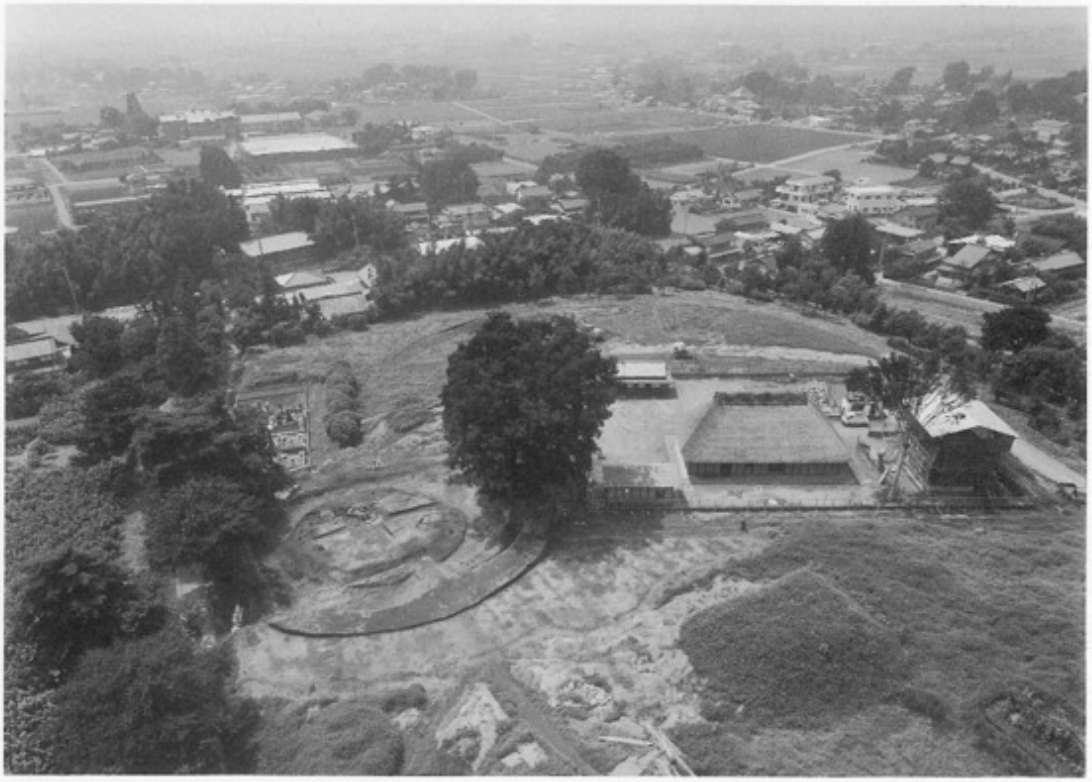


Fig. 60　繩文土器



1．A区（管理用道路）　B区（内堀4号墳）全景（北から空撮）

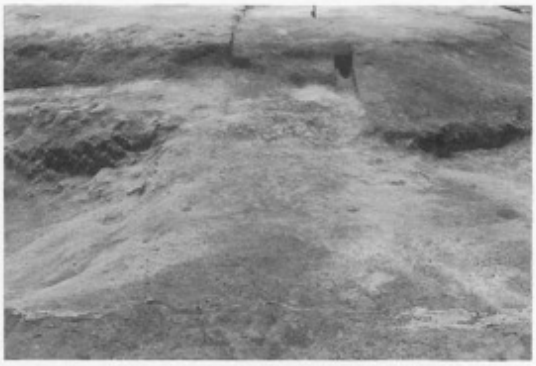
2．A区　東側（北から）

3．A区　西側（北東から）

4．C区　縄文時代調査面（北西から）

5．C区　旧石時代調査面（北西から）

1．B区　北側周堀（西から）



2．B区　渡り状施設（北から）

3．B区　南西側周堀（北西から）

4．B区　墳丘（南西から）

5．B区　南側墳丘（東から）

6．B区　取り出された玉石出土状態（東から）

7．B区　東側周堀（南から）

8．B区　形象埴輪出土状態（南から）

1．B区　南側人物、馬形埴輪出土状態①（西から）

2．B区　北側人物、馬形埴輪出土状態①（西から）

3．B区　南側人物、馬形埴輪出土状態②（東から）

4．B区　北側馬形埴輪出土状態②（東から）

5．B区　南側人物、馬形埴輪出土状態③（南から）

6．B区　北側人物、馬形埴輪出土状態③（南から）

7．B区　南側人物、馬形埴輪掘り方（南から）

8．B区　北側人物、馬形埴輪掘り方（南から）

1．B区　円筒埴輪１出土状態（西から）

2．B区　円筒埴輪２出土状態（南西から）

3．B区　人物埴輪７出土状態（南から）

4．B区　人物埴輪７出土状態（北東から）

5．B区　石室、埴輪列出土状態（真上から空撮）

1．B区　石室入り口（東から）

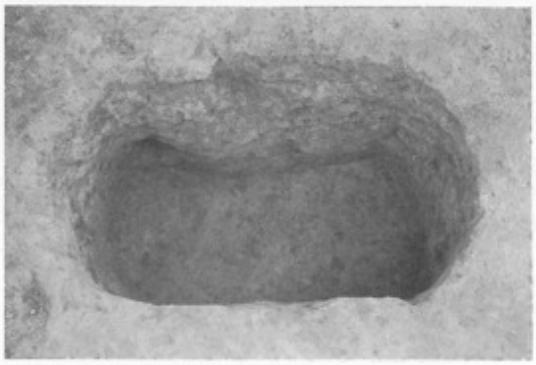
2．B区　石室　北側残存状態（南から）

3．B区　石室　西側残存状態（東から）

4．B区　石室　残存状態（南から）

5．B区　石室　残存状態（北から）

6．B区　埋め戻し後の状態（北から）



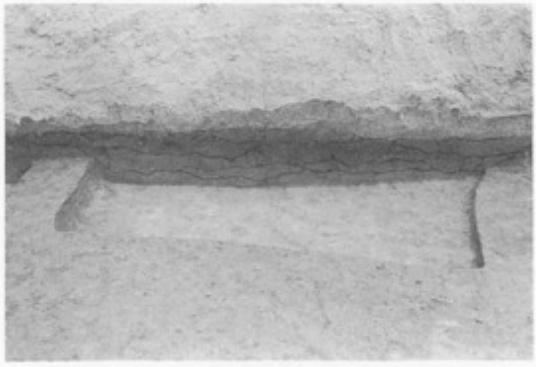
7．B区　土坑全景（北から）

8．記念撮影

1．D区（さくら草の湿原）全景（東から空撮）

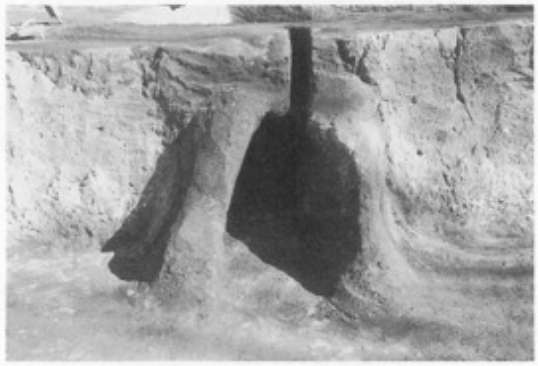
2．D区（さくら草の湿原）全景（真上から空撮）

1．H－1号　住居址（東から）



2．H－2号　住居址（南から）

3．H－3号　住居址（西から）



4．H－3号　住居址の竈（西から）

5．H－4号　住居址（西から）

6．H－5、24号　住居址（北から）

7．H－5、24号　住居址（南から）

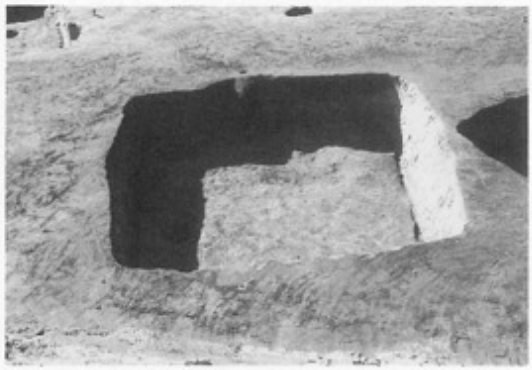
8．H－24号　遺物出土状態（西から）

1．H－6号　住居址（東から）

2．H－6号　住居址の竈（南から）

3．H－7号　住居址（北から）

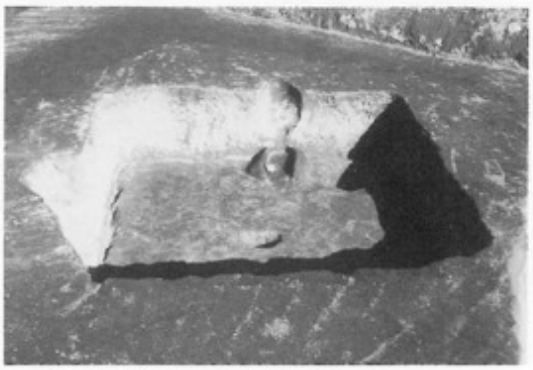
4．H－7号　住居址の竈（西から）



5．H－8号　住居址（東から）

6．H－9号　住居址（北から）

7．H－9号　住居址の竈（東から）

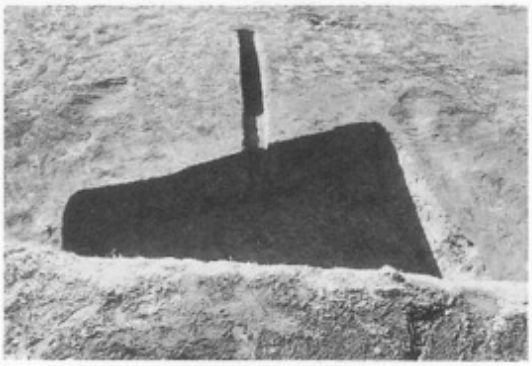


8．H－10号　住居址（西から）

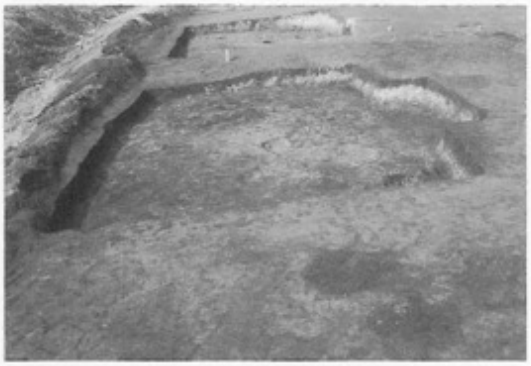
1．H－10号　住居址の竈（西から）

2．H－11号　住居址（西から）

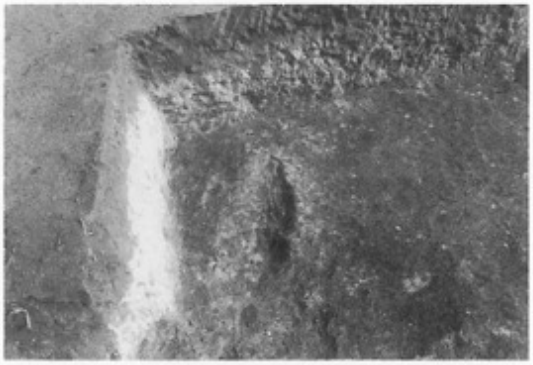
3．H－11号　住居址の竈（西から）



4．H－12号　住居址（東から）



5．H－15号　住居址（南から）



6．H－15号　住居址の竈（西から）

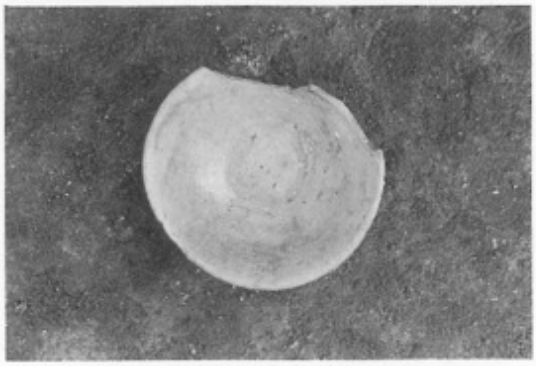
7．H－15号　遺物出土状態（南から）

8．H－16号　住居址（西から）

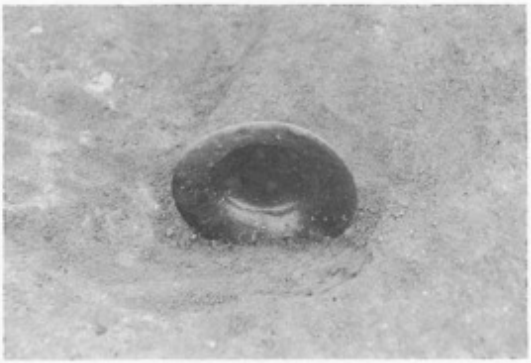
1．H－16号　住居址の竈（西から）

2．H－17号　住居址（西から）

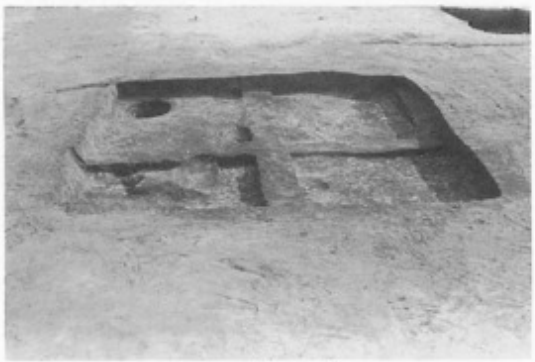
3．H－17号　住居址の竈（西から）



4．H－17号　遺物出土状態（北から）



5．H－17号　遺物出土状態（北から）



6．H－18号　住居址（北から）

7．H－19号　住居址（北から）

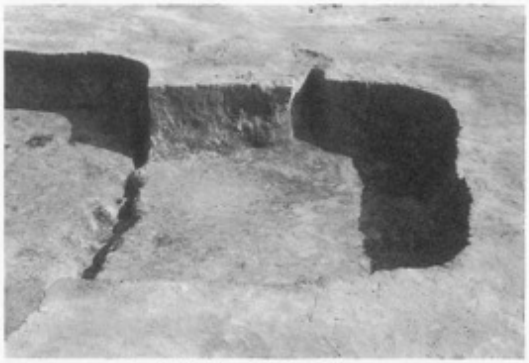
8．H－19号　遺物出土状態（南から）

1．H－20号　住居址（西から）

2．H－20号　住居址の竈（西から）

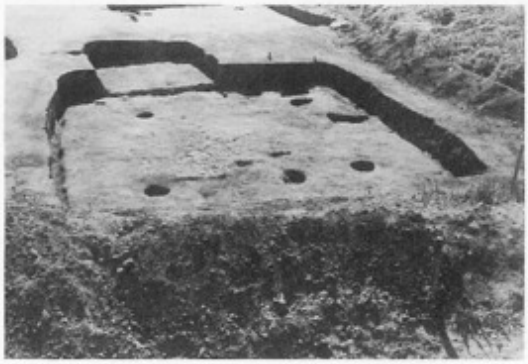
3．H－21号　住居址（北から）

4．H－21号　遺物出土状態（北から）



5．H－22号　住居址（西から）

6．H－23号　炭火物出土状態（南西から）



7．H－22、23号　住居址（北から）

8．E区、H－1号　住居址（東から）

PL. 12

43

左側面

後面

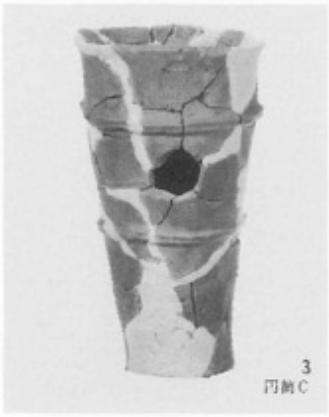
44

左側面

後面

1
円筒A

2
円筒B


3
円筒C

7
人物A正面

左側面

背面

8
人物B正面

右側面

背面

PL. 14

9
人物C背面

11
人物E正面

左側面

10
人物D正面

左側面

背面

12
人物F正面

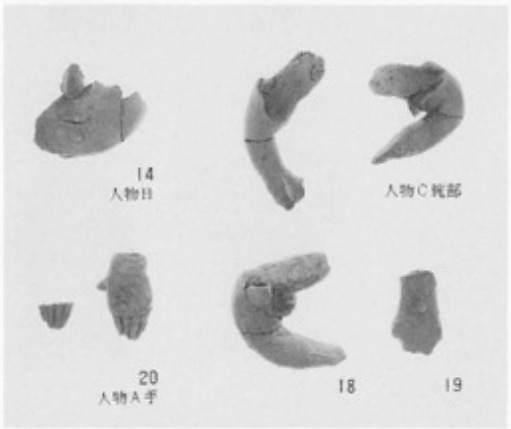
右側面

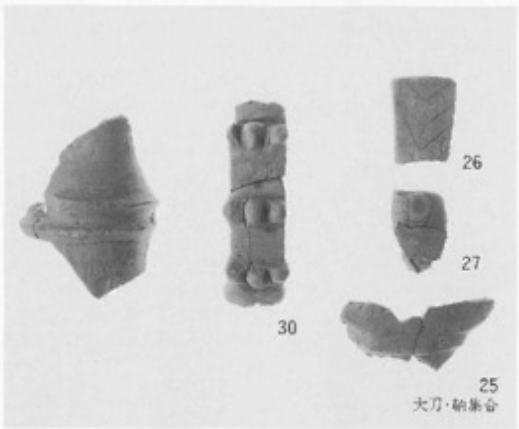
13
人物G

15
人物脚部

内面

16
人物胴部


14
人物B
人物C腕部
20
人物A手
18
19

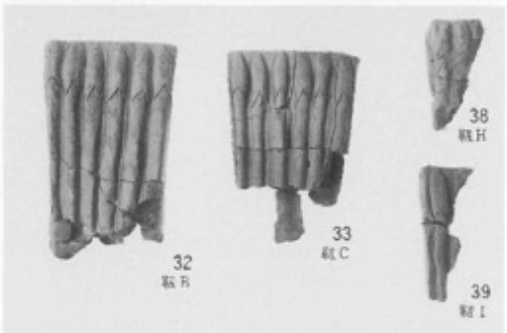

26
27
30
25
大刀・鞘集合

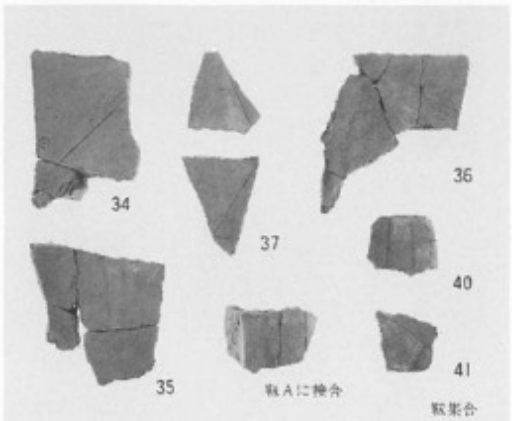
31
A正面

左側面

29
大刀B正面

底面


32
靴B
33
靴C
38
靴H
39
靴I


34
37
36
40
35
靴Aに接合
41
靴集合

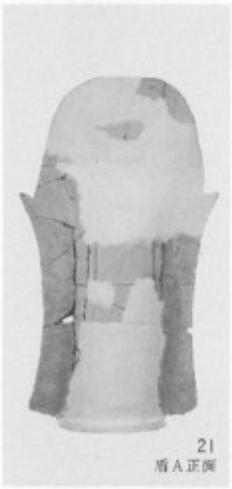
PL. 16

28
大刀A側面

正面

側面

23
耜A



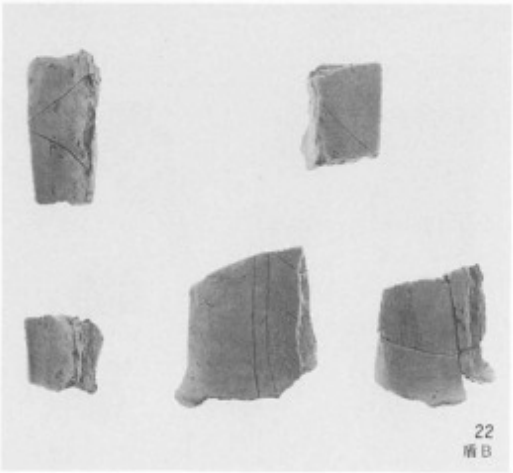
21
盾A正面

右側面

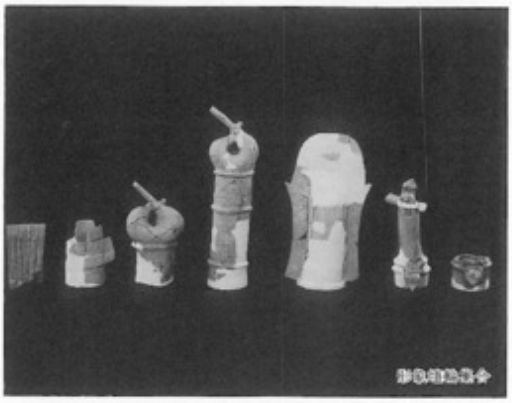
後面

24
耜B

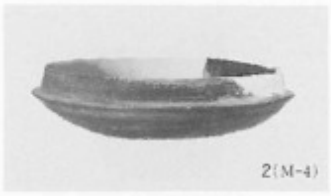
42
形象基部

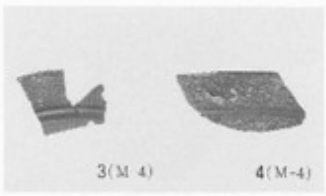


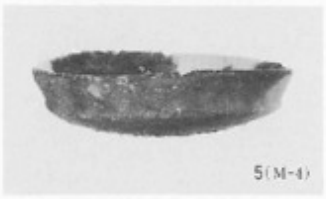
22
盾B

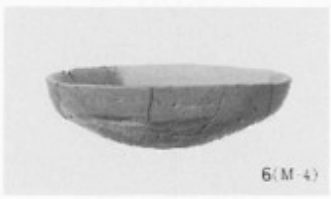


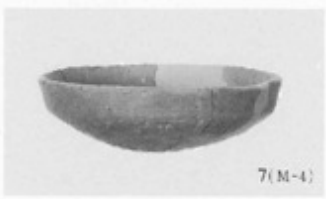
1(M-4)

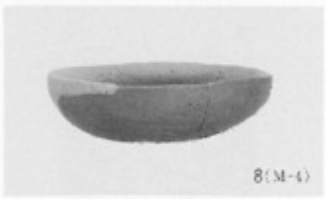

2(M-4)


3(M-4) 4(M-4)


5(M-4)

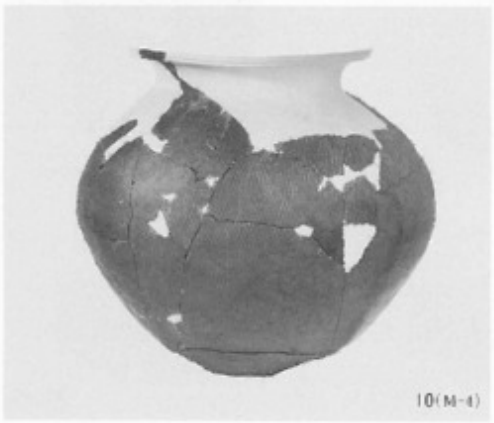

6(M-4)


7(M-4)

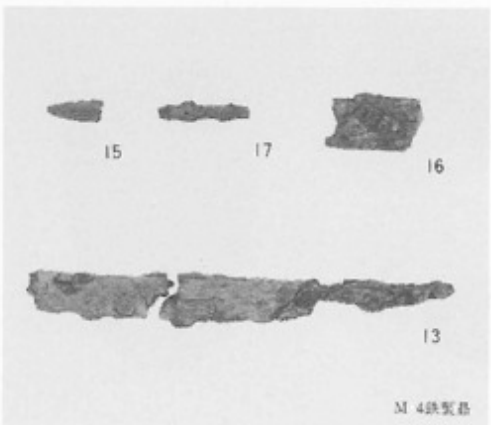

8(M-4)

9(M-4)

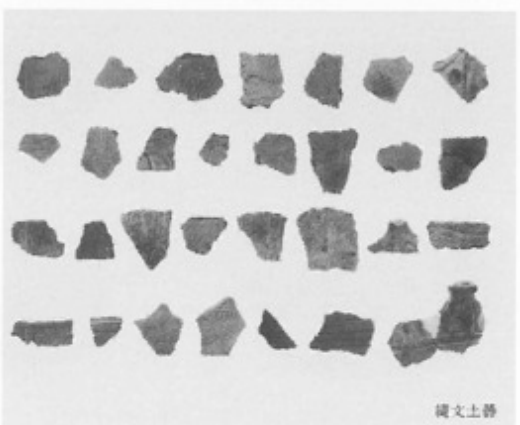
14(M-4敲刃片)


10(M-4)

11(M-4)



M-4鉄製品

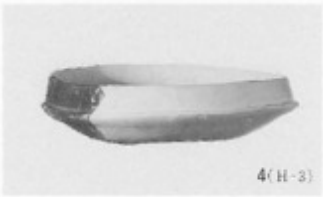

縄文土器

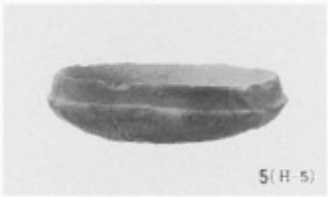
PL. 18

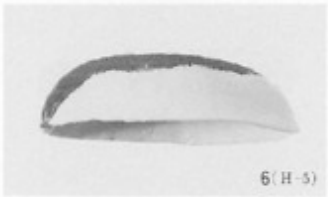
1(H-1)

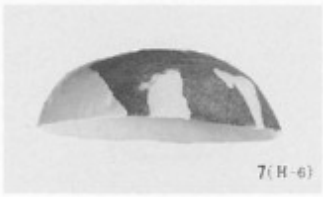
2(H-1)

3(H-1)


4(H-3)


5(H-5)


6(H-5)

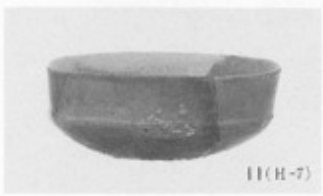

7(H-6)

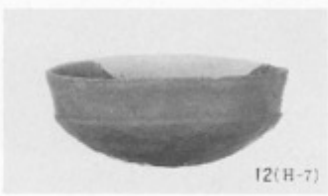
8(H-6)

9(H-6)

109(H-6)

10(H-7)


11(H-7)


12(H-7)

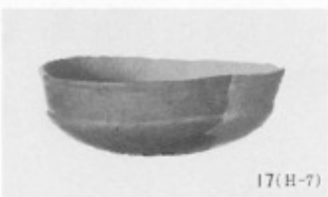
13(H-7)

14(H-7)

15(H-7)

18(H-7)

16(H-7)


17(H-7)

19(H-7)

20(H-8)

21(H-8)

22(H-8)

23(H-8)

24(H-9)

25(H-9)

26(H-9)

27(H-9)

29(H-9)

30(H-9)

28(H-9)

31(H-10)

32(H-10)

33(H-10)

34(H-10)

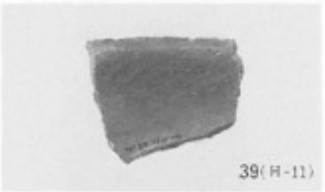
35(H-10)

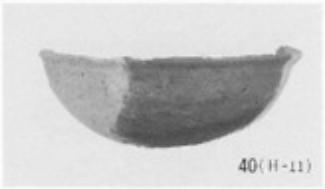
36(H-10)

PL. 20

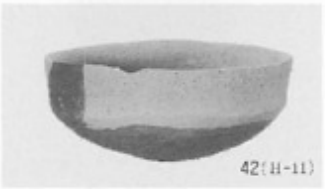
37(H-11)

38(H-11)


39(H-11)


40(H-11)

41(H-11)


42(H-11)

43(H-11)

46(H-11)

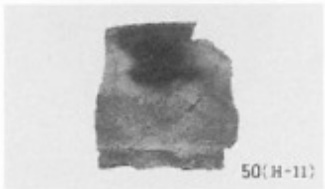
44(H-11)

45(H-11)

47(H-11)

48(H-11)

49(H-11)


50(H-11)

51(H-15)

52(H-15)

53(H-15)

54(H-15)

55(H-16)

56(H-17)

57(H-17)

58(H-17)

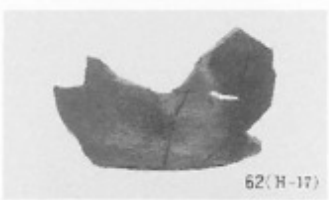
59(H-17)

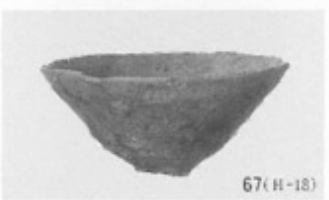
61(H-17)

60(H-17)

64(H-17)

63(H-17)


62(H-17)


67(H-18)

65(H-17)

70(H-18)

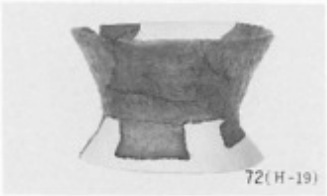
68(H-18)

69(H-18)

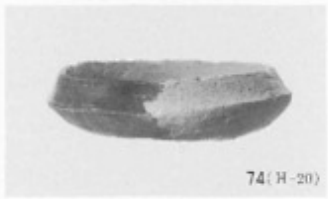
PL. 22

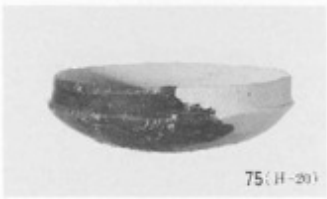
66(H-18)

71(H-19)

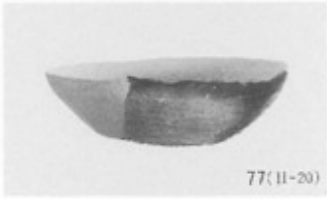

72(H-19)

73(H-19)

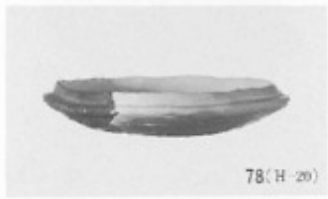

74(H-20)


75(H-20)

76(H-20)


77(H-20)

79(H-20)


78(H-20)

81(H-20)

82(H-20)

80(H-20)

83(H-21)

84(H-21)

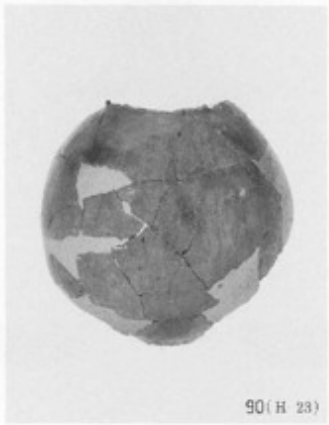
85(H-21)

86(H-21)

87(H-22)

88(H-22)

89(H-22)


90(H-23)

91(H-23)

92(H-23)

93(H-23)

94(H-23)

95(H-24)

96(H-24)

102(H-24)

97(H-24)

98(H-24)

99(H-24)

PL. 24

100(H-24)

101(H-24)

103(H-24)

104(II-24)

110(H-8)

111(II-10)

112(H-10)

113(H-10)

117(H-21)

105(H-6)

107(H-7)

106(II-6)

108(H-9)

114(II-10)

115(H-11)

128(X135Y67)

127(H-21)

126(H-6)

125(H-1)

119 (H-10) 118 (II-10) 120 (II-10) 121 (II-15)

122(H-17) 123(D-2)

116(H-18)

124(H-20)

内堀遺跡群 X

平成10年3月20日　印　刷
平成10年3月31日　発　行

編集発行　前橋市教育委員会文化財保護課
〒371-0007　前橋市上泉町664－4
TEL　027－231－9531
印　刷　上毎印刷工業株式会社